令和４（２０２２）年度

「第Ⅰ期中期実行計画」に基づく
各組織の年間活動報告

神戸常盤大学
神戸常盤大学短期大学部

令和4(2022)年度　第Ⅰ期中期実行計画に基づく年間活動報告【A組織】

2022(令和4)年度　年間活動報告書			
第Ⅰ期中期実行計画	該当組織	本年度の目標と活動計画	年間活動報告及び自己評価
1　教育に関する計画			
（1）教育の質保証の推進			
①　三つの方針（「卒業認定・学位授与の方針」「教育課程・実施の方針」「入学者受け入れの方針」）を踏まえた学修支援体制の確立	ときわ教育推進機構	2022年度より始まった第2次教学マネジメント改革を確実に進めると共に、次の見直しに向けた準備に着手する。 ・ときわコンピテンシーの自己評価システムを構築し、運営を始める。 ・正課内で用いるルーブリックとカリキュラムマップに基づいて設定される学修の到達目標の関係など、シラバス作成上の改善を進める。	第2次教学マネジメント改革を推進する取組の一環として、本年度は目標に沿って以下の取組を実施した。 ・ときわコンピテンシーの自己評価は、令和4年度以降の入学生が対象となる。最初の評価は、令和5年度のオリエンテーション期間中の実施となるため、そのスケジュールに合わせてシステムを構築した。実際には、自己評価はmanaba上のアンケート機能を使って行うものとして設定し、それはすでに2023年1月15日に学生に公開している。 ・シラバス作成の改善として、評価に用いるルーブリックとカリキュラムマップに基づいて設定される学修の到達目標に関しては、それが一致するシラバスになるように改善を行った。すでに令和4年のシラバスから、その内容で作成されている。来年度は新「ときわコンピテンシー」が適用されて2年目を迎えるため、来年度末のシラバス作成に向けて、各科目での学習と新「ときわコンピテンシー」の関係を説明する動画を作成し、授業担当者の理解を深めるよう努めた。 ＜自己評価・課題＞ 以上から、本年度の目標は達成できたと評価できる。課題としては、「ときわコンピテンシー」の自己評価に関して、学生の実施率の向上（100%に近づけたい）すること、自己評価の結果を真に活用できる仕組みを構築していくことである。
	医療検査学科	学位授与の方針に沿い、各教育課程を組んでいるが、2022年入学者から新たなカリキュラムとなったので、旧カリキュラムと異なる開講時期また授業回数が異なる科目もあるので、教育の質を落ちないよう、学習支援を行う。 入学者受け入れの方針に同意し、一定の基準を満たして入学していても、文系・理系の違い、理系でも生物・化学・物理の全てを理解しているとは言えない中、全入学生が学位を取得できるよう学修支援を行う。	■学修支援体制：チューター教員、クラス担任、学科長と連携して学修支援体制を行い、健康上または精神的な課題ある学生へ早期に対応した。 ■国家試験対策：国家試験対策委員会を主として、前期から補習を行うなど支援を行った結果、合格率は92.5%と良好であり、成果があったと言える。 ■臨地実習：コロナ禍で臨地実習が中止となる施設が2施設あったが、過去の経験を活かして学内での代替え実習を滞りなく行えた。 ■進路支援：低学年時から継続的に進路に関する情報を与えることができ、国家試験合格者は2022年も4月時点で95.9%の就職が決まった。また、国家試験不合格者が臨床検査技師免許不要な業務へ就職が早期に決まり、進路支援の成果が出ている。 ■その他：学生へ教員メールアドレスを公開している成果として、遅刻・欠席を事担当教員へ報告する学生が増え、質問や相談の前に事前にメールを送る学生が増え、学修だけでなく社会人としてのマナー意識向上に寄与していると言える。

第Ⅰ期中期実行計画	該当組織	本年度の目標と活動計画	年間活動報告及び自己評価
①　三つの方針（「卒業認定・学位授与の方針」「教育課程・実施の方針」「入学者受け入れの方針」）を踏まえた学修支援体制の確立	診療放射線学科	三つの方針を踏まえた学修支援体制の確立するための目標と活動計画 ■学修支援体制：担任制度およびチュータ制度を活用し、きめ細かな学生の支援を継続する。また、在学生数の増加に伴って教員数を検討し学生の指導に十分な体制を構築する。また、学内実習の多くが開講されるので必要な設備や備品についても順次整備していく。 ■国家試験対策：3年次生については、臨地実習開始前に国家試験に向けた意識づけを行い、臨地実習と国家試験の相乗効果を図る。また、臨地実習後にスムーズに国家試験対策に移行できるように、対策講義や模擬試験などの仕組みを構築する。 ■臨地実習：学科初の臨地実習を円滑に行うために、各施設の実習指導者との連絡会議を開催し、意見交換を行う。また、実習中は学生の様子を把握し適切なサポートを実施する。さらに実習中、実習後を通して課題等を見出し翌年度以降の臨地実習改善に活かす。 ■進路支援：4年次の医療機関への就職に先立ち、企業就職や大学院進学を希望する学生に対してサポートを実施する。また、医療機関への就職を希望する学生に向けたガイダンスや、施設見学についても支援する。 ■その他：福島スタディツアーなど地域貢献やボランティアの活動を継続的に実施する。また、放射線取扱主任者試験についてもサポートを継続する。	■学修支援体制：各学年に担任3名とチュータを配置し、その両面から学修を支援する体制を構築した。また、学修面だけでなく心身の不調を訴える学生については三者面談を行うなど、保護者とも連携し継続的に支援を行った。しかしながら、さまざまな配慮が必要な学生が増えており、教員一人当たりの負荷が増加してきているため、学修支援体制の見直しが必要である。 ■国家試験対策：3年次生までの在籍のため、診療放射線技師の国家試験は未受験である。次年度に向けて4年次の国家試験対策について方針を定め具体的な計画を策定した。3年次の国家試験対策を実施したが、臨地実習の指導との時間配分などの点で改善を要する点が見られたので今後の課題としたい。 ■臨地実習：学科開設3年目となり、初めての臨地実習に学生を送り出す節目の年となった。臨地実習施設約30施設に対し、事前に実習の依頼と実習生受け入れに関する調査を実施した。その調査結果に基づき学生の配置を決定し、11月より約4か月の臨地実習を行った。学内での臨床基礎実習はOSCEやCBTを導入し充実した内容であったと思っているが、臨地実習に耐えうる力が身につきにくい学生もあり、さらなる改善の必要性を感じた。なお、実習の途中で不調等をきたす学生が見られたが教員による巡回指導や月1回の登校日を使った学生相談等で学生とのコミュニケーションを保ちつつ、おおむね適切な対応を実施することができた。 ■進路支援：国家試験同様に4年生がいないため本格的な就職活動は次年度以降となるが、企業就職を希望する学生2名についてサポートを行い、順調な活動ができた。また、大学院を希望する学生についても次年度夏季に実施される試験に向けて指導を行った。 ■その他：国家資格である放射線取扱主任者試験の受験を推奨し、受験希望者に対して受験対策講座を開講した。また、地域貢献活動として福島スタディツアーに関する支援を実施した。さらに、2年生の保護者を対象にオンライン保護者会を実施し、学生の成績と履修要件、臨地実習、就職、国家試験などに関する情報を提供し、これらを含む学生へのサポートについて意見交換を行った。
	看護学科	1.学修支援体制の強化：学生の多様な状況に合わせた個別な支援が求められている。引き続き、継続課題となってる、担任・チューターおよび科目担当者等のそれぞれの役割が十分機能できるよう、連携を取ながら学修支援にあたる。2.国家試験対策の強化：教員による国家試験対策講座を開催する。また成績低迷者や低学年など、学生のレディネスに応じ学習支援を行う。昨年度は全体として得点率の上昇が認められたので、引き続き支援体制をとってきたい。3.臨地実習については本年度入学生より定員増となったことから、今後の実習施設の確保について引き続き進めていく。効果的な臨床指導に向け、臨地実習委員会及び各担当者が各実習施設との調整を行う。また臨床指導者との教育活動の連携のために臨地実習指導者研修会を実施する。4.進路支援：就職活動の時期が３年次末より始まっているが、学生の主体性や学生の特性に合わせた支援を行う。	■学修支援体制：学生の状況に応じた個別な支援を行ってきた。特に担任は１年次より全員の面接を実施し、学生の状況の把握に努め、対応してきた。一方、チューターについては役割が不明確なままで、教員個々に対応がまちまちである。学生からもチューターを認識されていない状況がある。　■.国家試験対策：第112回看護師国家試験結果は全国平均90.8%（新卒者95.5%）に対して本学93.4%であった。また第109回保健師国家試験結果は全国平均93.7%（新卒者96.8%）に対して本学84.2%であった。看護師、保健師共に昨年度に引き続き全国平均を下回り、兵庫県内15大学中も下位となった。教員による対策講座は必修問題の強化に取り組み、受験者も必須問題の得点率は上昇している。しかし、低学年の頃より成績低迷者が多く、それに対する対策が十分行えておらず、国試対策としての取り組みも遅く感じられた。また、委員会など一部の教員の取り組みになってしまい、教員間の意識もまちまちであったことは否めない。 ■臨地実習：8.9月ごろを中心にコロナ拡大の影響を受けたが、その後は臨地への受け入れもできるようになった。コロナ後には臨床の実習指導体制に変化がみられ、1病棟あたりの学生の受け入れ人数が従来の2分の1から3分の１になっている。またコロナの影響で臨地での体験が乏しい学生があり、臨床との連携を取りつつも、実習指導が困難な状況が見られた。定員増による学生数の増加により、臨地実習施設の確保を検討し、JHCO神戸中央病院など新規の施設を確保することできた。 ■進路支援：就職内定率93.6%。看護師は早期に内定が決まる傾向にあるが、４年次になっても進路を迷いつつ、国試にも身が入らない学生があり、進路支援が難しかった。保健師は希望者はいたが結果として看護師での就職となった。進学は助産師志望で１名大学院に合格した。 ＜自己評価・課題＞ 国家試験の結果が昨年に引き続き全国平均を下回ったことは、就職先の施設との信頼関係にも影響し、今後の志願者の確保の観点からも重く受け止めている。今年度のように国家試験対策として4年次にスタートしても遅い結果であったことから、低学年からの学修支援体制が重要である。改めてチュータ制が機能するように見なおすことが必要である。

第Ⅰ期中期実行計画	該当組織	本年度の目標と活動計画	年間活動報告及び自己評価
①　三つの方針（「卒業認定・学位授与の方針」「教育課程・実施の方針」「入学者受け入れの方針」）を踏まえた学修支援体制の確立	こども教育学科	3つの方針を踏まえた学修支援体制を確立する。 具体的には新課程設置に伴い、「義務教育コース」においては、義務教育9年間を見通したカリキュラム等の再構築を図る。 「保育・幼児教育養成コース」においても、認定絵本士の新設に伴うカリキュラムの再構築を図る。認定絵本士養成講座の令和5年度新規開設を目指して、5月に絵本専門士委員会に申請を行う。 これらカリキュラムの変更に合わせて、AP・DPに関する変更、検討も行う。今年度は新カリキュラムの構築を最優先課題として取り組む。	■学修支援体制：大学1期生である1年生はA,Bクラス3名の短期大学生と大学生1・2年生は各4名のクラス担任を配置しており、各学年担任が、ゼミ形式で実施する授業も担当しているので、きめ細かい学生の支援が可能となっている。3・4年生は卒業研究ゼミの担当教員に加えて、各学年に2名のクラス担任を配置している。進路対策として、個別にその都度、学科教員（就職委員、ゼミ担当、各科目担当、各コース担当等）の立場から面談や個別指導を実施すると共に、教職支援センター職員、キャリア支援課職員等の力を借りながら必要な指導を重ねた。 ■教員採用試験対策：「定例学習会」「夏季弱点フォロー勉強会」、「自主学習会」「春季セミナー」「春季集中学習会」等の採用試験対策を実施、「学力把握テスト（兵庫県・神戸市・大阪府の傾向を踏まえた出題）」を年3回実施、教員採用試験対策講座（EN1、E2対象）遠隔学習コンテンツを作成しmanabaにて実施、東京アカデミーによる「教職教養対策講座」、「基礎力養成講座」、「論作文・面接・討論対策講座」を実施、養護教諭合格者座談会の実施、小学校教諭合格者座談会の実施、先輩激励訪問の実施、「学内スタート模試」（3年対象）の実施、「全国公開模擬試験」（3年対象）の実施、「自治体別模擬試験」を実施。 ■臨地実習：臨地実習委員会を年間11回開催。E3保育実習Ⅰ（保育所）を8月22日から9月3日、E3教育実習（幼稚園）を10月3日から10月28日、E3教育実習（小学校）を10月3日から10月28日、E3保育実習Ⅰ（社会福祉施設）を2月13日から3月5日、E4保育実習Ⅱを5月9日から5月21日、E4保育実習Ⅲを4月25日から5月17日、E4教育実習（幼稚園）を10月3日から10月28日で原則実施した。 ■進路支援：３・４年生「就職ガイダンス」の実施、志望･進路調査及びゼミ毎個別進路面談の実施、職域ごとの就職フェアへの参加促進と引率の実施、採用試験対策模擬面接の実施、採用試験時提出書類の添削指導、公立･私立対策講座及び模擬試験の実施、就職体験報告会の開催、全学で実施された保護者のためのオープンキャンパスを実施、卒業生就職先巡回訪問（挨拶）の実施、就職委員会に対する当該年度卒業生アンケート実施 ＜自己評価・課題＞ 　教員採用試験と進路支援については、特色ある教育システムの欄で後述している。
	口腔保健学科	国家試験合格率を維持しながら進路決定率を高める。	■学修支援体制：大学1期生である1年生は、4年制の新しい教育課程が始まるため1クラス3名のクラス担任を配置し学習支援に務めた。短期大学部の2年生、３年生は口腔保健学科の閉学科を見据えて単位履修を確実にすることに努めた。特に、臨地実習の単位は状況に応じて学内歯科診療所で補習を行うなど学修支援に務めた。　結果、退学は1年生1名（進路変更）、2年生1名（体調不良）の2名であった。しかし、短期大学2年生に1、2年次科目の単位未修得者がいるので、次年度中に単位履修させることが課題である。 ■国家試験対策：本年度の国家試験受験者はコロナ禍に入学した学生であり、学内実習・学外実習とも教育内容の変更を余儀なくされた学生である。3年生後期に国家試験過去問題や模擬試験を基に成績不良者を抽出するが、例年10名前後のところ20名を超える学生が抽出された。そのため、1月からの国家試験特別補習を2ヶ月早く繰り上げて11月から開始した。抽出された学生は後期の授業以外に学科の国家試験委員による特別補習を受講し、成績が国家試験合格基準を上回るまで受講を継続するが、学修により成績レベルが変わってくるため、途中より個別指導を受講する学生と小集団で指導する学生に分けてきめ細かく学習支援を行なった。結果、合格率は98.6%（74名受験、過年度学生1名が不合格）であった。次年度は過年度生が数名在籍するので合格率を下げないことが課題である。 ■臨地実習：本年度は、2年生、３年生ともほぼ全ての実習施設(前期：59施設、後期：67施設)で臨地実習を実施することが出来た。本年度は5月より学内歯科診療所が開設されたことから、専任教員による臨地実習指導を受ける事が可能になり、不明点の確認や補習実習が実施できた。また本年度は来年度から始まる４年制大学の臨地実習に向けて、各実習科目の実習要領の作成と実習施設（67施設）向けの実習説明会を2回開催（ハイブリッド開催）した。次年度の課題は4年生選択科目である臨地実習の構築である。 ■進路支援：就職委員会（3年生担任を含む）が中心となり、キャリア支援課、国家試験対策委員会と共に情報を共有し、学生の学修状況を鑑みながら進路支援を行った。求人情報のmanaba機能を活用した情報提供、対面での個別相談や模擬面接、履歴書の記入方法や小論文等の指導を行なった。前期後半から就職活動を開始し、成績不良者以外は国家試験前にほぼ就職を内定させた。成績不良者は国家試験（3月上旬）終了後自己採点を行い、合格を確認した後、就職活動を開始した。結果、73名の国家試験合格者のうち95.9%（69名）が就職内定を獲得した。本年度は国家試験合格率、進路決定率とも高い数値を残す事ができた。就職ガイダンスは、3年生向けを6回、2年生向けを4回、1年生向けを1回実施して進路支援を行なった。

第Ⅰ期中期実行計画	該当組織	本年度の目標と活動計画	年間活動報告及び自己評価
①　三つの方針（「卒業認定・学位授与の方針」「教育課程・実施の方針」「入学者受け入れの方針」）を踏まえた学修支援体制の確立	看護学科通信制課程	１．学習支援体制の強化 １）5月にチューターを決定し、学生に周知する。 ２）6月末に新入生の学習進捗状況を確認し、チューターから連絡を取り学習を進めるよう指導する。 ・　8月～9月に全学生の学習進捗をチェックし、対応を検討する（学生へ進捗状況を通知） ２．国家試験支援体制の強化 １）国家試験対策模擬試験への参加率の向上 ・　オリエンテーション及び学習説明会、対面授業時やWeb配信などを活用しての国家試験対策行事の紹介と参加の推進をする ・　会場での模擬試験を神戸・東京・金沢の3会場で実施し、全員参加を目標に告知する。 10月：必須特訓テストを全学生対象で実施 12月：直前予想模試を卒業対象者対象で実施 ２）対面での指導の機会の設定 上記１）で登校した機会に教員による指導の時間を設ける 模擬テスト後に学習会を設けて参加を促す ３）国家試験学習が遅れている学生の早期把握 ・　チューター制で全学生を個別に支援する体制を整備する。 ・　教務と連携して各学生の学習進捗の把握と支援を行う。 ３．実習環境を整える １）居住地域別に学生数に見合う実習施設が確保する。 ２．実習での学習内容の補完 １）実習内容について臨床指導者と認識が共有する。 ・　指導者会の開催または、Webでの指導者と話し合いを行い、実習内容についての認識共有をする。 ・　臨地実習実施率が下がらないよう臨床と調整する。 ・　代替え学習内容の見直し(R4年度課程内FDのテーマとする) ・　実習のまとめの送付に対する実習施設からの意見を聴き取りフィードバックする。 ２）遠隔授業による実習スクーリング内容の充実 ・　昨年度の課程内FDで遠隔授業方法についての検討を踏まえ今年度の内容のブラッシュアップを図り、スクーリングに生かす。	■学修支援体制：5月にチューターを決定し、学生に周知したのち、6月末から全学生に連絡を取り、学習を進めるよう指導した。8月以降全学生へ進捗状況を知らせ、課程会議で学習が進まない学生の情報を共有しチューターから連絡してモチベーションを上げるようかかわった。1年次の学生には、10月に学習計画の立て直しとレポート内容の指導を行い実習に進めるよう支援した。令和4年度入学生で基礎実習及び看護マネジメント実習に進める学生は85.8%（昨年82.2%）で昨年よりも増加している。 ■国家試験対策：今年度の国試対策行事は可能な限り対面開催を計画し実行した(東京と金沢でも対面行事を実施)。また、動画の配信や予備校各社のWEB講座等を紹介するなどの支援も継続した。課程内では、引き続き教務委員による学生の学修進捗状況の確認やチューター制度下での電話&メール相談・指導と併せてすると共に、今年度新たに4月と6月に国試対策作戦会議を開催し、昨年度の結果を踏まえた具体案について検討した。10と12月に模試および学習会を実施した。 結果として、第112回看護師国家試験の新卒者合格率は79.3%で、昨年度新卒者合格率75.3%を4.0%上回ったが、全国2年課程通信制学校新卒者合格率（87.2%）を7.9%下回った。昨年度は全国2年課程通信制学校新卒者合格率よりも10.9%低かったが、今年度その差は3.0%縮小した。既卒者の合格率は40.0%であり、全国2年課程通信制学校既卒者合格率（30.2%）を9.8%上回った。入学年度別の新卒者合格率を見ると、2年で卒業した学生は87.1%と全国合格率とほぼ同程度であるが、2020年度入学生は45.5%、2019年度入学生は33.3%と昨年度を大きく下回り、全体合格率を低下させる要因となっている。 ■臨地実習：臨地実習実施率は、コロナ禍による見学実習中止施設数は、7月～10月に実施する各領域別実習では127施設中27施設で、代替学習の対象学生は、延べ587名中209名、実習スクーリングは８科目全て対面授業で実施出来た。コロナ感染または、濃厚接触者となって受講できなかった学生5名6科目については、Web授業で対応した。基礎・看護マネジメント実習では、36施設中1施設のみの中止で、代替学習対象者は123名中５名。実習スクーリングは全て対面授業で実施出来た。実習の代替学習は昨年度のFD内容を踏まえ、担当教員各自で改善・修正した教材を作成し送付した。さらに今年度の課程内FDとして、「見学実習の代替学習」について、全教員の教育内容の捉え方・考え方、学生観、指導観を含め、教材の具体的内容、工夫した点、困った点、その結果、どうであったかについて知ることで、授業計画立案のスキルアップを図った。 ■その他：生活支援として神戸常盤大学奨学援助資金を通信制課程の枠に従い公募し個別面接を実施、支援の必要度が高い学生に対して支給している。 ＜自己評価・課題＞ ２．国家試験合格率は大きく改善したわけではないが、少しづつ合格率上昇の傾向を示した。次年度は最後の入学生が2年で卒業し2年で合格を目指す年であると同時に、これまでのような国試対策行事を開催できる最後の年でもある。1人でも多くの学生が看護師国家試験に合格するため、3年以上在籍する学生の合格率向上への取り組みと「2年で卒業&2年で合格」を達成するための支援の強化を行う。 臨地実習では、1回目のFD開催を各領域別実習実施前に開催することで、本年度の「見学実習の代替学習」の実施内容に生かすことができた。その成果として、実習科目の評価結果から各看護学とも到達目標が達成されていることが確認できた。次年度はさらに多くの学生が臨地実習の意臨むため、学習環境に配慮した支援を継続する。

第Ⅰ期中期実行計画	該当組織	本年度の目標と活動計画	年間活動報告及び自己評価
②学修成果の保証と充実した学修機会の提供	教務委員会	1.2022 年度に改正したカリキュラムを適正に運用する。 2022 年度に改正した各学科のカリキュラムが適正に運用されるように、教務委員会で情報を共有しながらすすめていく。E科については、新コース設置に向けた準備が必要である。R科については、後期に臨床実習が始まることから、特別時間割作成による授業の運用の確認が必要である。新カリキュラム開始にあたり、現行カリキュラムから新カリキュラムへの移行がスムーズにすすめられるよう、読み替え科目（案）を作成する。また、O科については、2024年3月末をもって短期大学部口腔保健学科を閉科できるように、短大生の読み替え科目（案）について、必要に応じて作成する必要がある。 2.GPA の活用について検討する。 ・GPA の活用については一昨年・昨年度に引き続き、学科ごとに効果的な活用について継続して検討する。全学的に活用できる方法なども検討が必要である。GPAを学生自身が学修成果の一つとして意識し、学修に活かせるようよう教務ガイダンスや履修ガイダンスなどの機会を通じて、促していく予定である。 3.基盤教育分野の教務的な運用について、ときわ教育推進機構と連携して調整する。 　2022年より基盤教育分野の科目が変更になり、「生命と倫理」「心理臨床学」が1単位減となっているため、1単位分の補講が必要となる。単位不足が生じないよう、学生に周知するとともに対応が必要な学生がいるか確認する必要がある。 基盤教育の履修について、人数制限や教室の確保など教務的にかなり煩雑なことが多く、科目の運用について、ときわ教育推進機構と連携し、来年度に向けて調整する。方法については、教務課長をはじめ、両委員会に共通する委員からの情報を教務委員会内で共有して調整していく予定である。 4.その他 　学科、学年の増加に伴い、年間行事予定、時間割、ガイダンス等の作成・調整については、時間を要するようになってきているが、関係組織との連携を図り、スムーズな運用を検討する。	1．カリキュラムの運用について 2022年度に改正したカリキュラムの適正な運用については、教務委員会を通じて各学科の意見を吸い上げ教務課とも連携しながら運用し、大きなトラブルなく進めることができた。E科のコース設置ならびに中学校教諭一種免許状（理科）の取得に向けたカリキュラムや学則変更の手続きについても、必要な時期に確実に行うことができた。新カリキュラムに伴う、各学科の読み替え科目についても教務委員会で審議しながら作成することができた。 2．GPAの活用について GPAの活用については、主に学科ごとの履修指導や卒業時の表彰候補者推薦、就職活動、資格選考要件などに活用している。IR室の分析から1年次の学修がその後の履修に影響するとの報告があることから、この結果を元に学生への学習指導につなげるために各学科で活用が進んでいる。学生自身のGPAの認識を高めるために、教務課ガイダンスや履修ガイダンスで説明を続けてきているが、年々学生の認識は高まってきていると感じている。引き続き学生への認識を含め、GPAの活用について継続して検討していく。 3.基盤教育分野の教務的な運用について、ときわ教育推進機構と連携して調整する。 2022年の基盤教育分野科目変更に伴う、旧カリキュラム履修学生への周知と対応は問題なく行うことができた。学生数の増加に伴う、人数制限科目については、期間を決めた登録後の抽選により学生に不公平なく履修の機会を提供できている。基盤教育科目の一部を遠隔で実施することにより、教室の調整などの不便さが緩和できた。しかし、1科目の履修者が200名を超える科目もあり、成績評価の期間が限られると担当者の負担が大きいことから、大学設置基準の一部変更による「多様な学習評価方法により単位を与える」を取り入れ、厳格な成績評価を維持しつつ、科目の特性を生かした評価を次年度から取り入れることを考えている。 ＜自己評価と課題＞　年度当初に策定した目標はおおむね達成できたと考える。次年度以降については基盤教育科目の適切な運用に加え、2025年の4年間の実施後のカリキュラム修正に向けて、ときわ教育推進機構と連携を取りながら進める必要がある。また、GPAの履修指導以外の活用については今後も検討していく課題である。

第Ⅰ期中期実行計画	該当組織	本年度の目標と活動計画	年間活動報告及び自己評価
②学修成果の保証と充実した学修機会の提供	医療検査学科	学位授与の方針に沿い、各教育課程を組んでいるが、2022年入学者から新たなカリキュラムとなったので、旧カリキュラムと異なる開講時期また授業回数が異なる科目もあるので、教育の質を落ちないよう、学習支援を行う。	■入学者97名・退学者 4名・休学者 10名(4年次に留年し前期休学の6名を含む) ・留年者7名・卒業者80名 ■GPA：卒業生累積 GPA 2.6 ■資格取得状況：臨床検査技師免許　74名 (合格率92.5%)、細胞検査士 12名 (合格率100%) ■卒業後の進路：進路決定率95.9%、うち大学院進学2名 ■授業評価：分野別学科平均 Ⅰ学生自身 4.1、Ⅱ授業内容 4.2、Ⅲ授業方法 4.2、Ⅳ学習成果 4.3、Ⅴ総合評価 4.3 ■卒後評価：回収率　57.1% 卒業時の平均GPAは2021年の2.57とほぼ同じで2022年度は2.6であった。学修成果の一つとして、臨床検査技師国家試験の合格率は2021年の86.8%から2022年は95.8%と上昇した。全国平均合格率も75.4%から77.6%と２%ほど上昇したが、全国の上昇率より遥かに良いことから支援の成果が出たと言える。細胞検査士養成過程に在籍者数は2020年から連続して合格率100%と学修成果は出ている。卒業時点の進路決定率は2021年の86.7%から95.9%と上がり支援の成果がでた。卒業生の多くが臨床検査技師免許を活かした就業を考えていることが要因であり、国家試験不合格者が次年度の再受験にむけて就職せずに国家試験対策へ臨むことが原因と考える。退学者数は2021年の12名から激減し、日頃からチューター、クラス担任、学科長など複数の者が対応した成果とも言える。卒後評価に関しては回収率が2021年は56.9%とほぼ同等の57.1%であった。ディプロマポリシーにて倫理観は肯定的な意見が2021年より16%上昇したが、問題解決能力が20%弱低下しこと、地域社会・国際保健向上に関しては2020年同様に肯定の意見が低く、コロナ禍で積極的な対人活動等が行なえなかった可能性がある。
	診療放射線学科	学修支援の指標としてGPAを活用し支援が必要な学生に対し、早めの対応を試みる。また、学修成果の向上に向けて、人的なものを含め、教育環境の整備・充実し、十分な学修機会を提供する。また、カリキュラム改善のために授業評価などを参考に改善点の洗い出しを行う。	■退学者・休学者・卒業者：今年度の在学生は1期生～3期生の3学年で239名、退学者が 12名、休学者は前期、後期あわせて延べ10名であった。退学者、休学者の多くは2年生で、専門基礎科目、専門科目への移行に伴う成績不振や、進路の変更に伴うものであった。 ■GPA：累計のGPA平均値は1期生2.30、2期生2.08、3期生2.58であった。 ■資格取得状況および卒業後の進路：診療放射線技師国家試験受験は次年度以降であり、卒業生が出るのも次年度である。放射線取扱主任者試験（国家資格）において、第一種放射線取扱主任者（合格率28.9%）に4名、第二種放射線取扱主任者（合格率20.6%）に2名（1名は第一種と第二種同時合格）が合格した。 ■授業評価：学生による授業評価（学科平均）は以下の通りである。 1. 学生自身 4.0、 2. 授業内容 4.3、3. 授業方法 4.3、4. 学習成果 4.3、5. 全体評価 4.4 この結果は、昨年より微増であったが、「１.学生自身」のみがわずかに低いことから、専門科目での自己学習が難しくなっていることが予想されるので引き続き学習支援を実施したいと考える。

第Ⅰ期中期実行計画	該当組織	本年度の目標と活動計画	年間活動報告及び自己評価
②学修成果の保証と充実した学修機会の提供	看護学科	充実した学修機会の保証として、2022年度からの新カリキュラムを実施していく。「地域活動基礎実習」をはじめ、次年度に開講予定の科目についても具体的な検討を行う。旧カリキュラムから新カリへの移行については、休学・復学等、学生の状況を確認しながら学習支援をする必要がある。休学が長期化している学生についても本人、保護者を交えた面談を行ってきたが引き続き対応する。またコロナ禍の影響により臨地実習の制限が一部続いているが、臨地での学習の機会が保証できるよう、施設との信頼関係の構築にむけてし施設との調整を密にできるよう、適宜、臨地と大学の共有の場である指導者連絡会を開催する。学修成果の保証については、ＧＰＡが国家試験や就職活動にも影響するようになってきた。また本年度入学生より保健師課程の選抜要件にＧＰＡを活用することとなった。学生への意識づけを継続していく。	■入学生94名、退学者6名、　　休学者1名、卒業生78名　（看護師国家試験受験資格75名、保健師国家試験受験資格20名、養護教諭1種免許8名）卒業延期者　7名 2022年からの新カリキュラムの１年目が経過した。１年次後期にコミュニケーション力の強化を目的とした「基礎看護学実習Ⅰ」を実施した。コロナの影響で今回が初めての臨地実習となった。また２年次「地域活動基礎実習」の検討を行い、社会連携課の協力のもと、神戸市への協力依頼を行った。具体的な活動の場や日程については今後の検討を続けていく。 専門基礎から専門、科目間のつながりなど、学科内FDや年度末の総括学科会議で現状の課題について意見交換を行った。 ■GPA：卒業生累計GPA2.51であった。今春卒業した学生は１年次よりGPA2.0以下の学生が多く、国家試験にも影響したと考える。1年次より低いものについては面談を行ったが、GPA1.5前後の学生はほとんど学修習慣がなかった。 ■学生による授業評価：学科平均は例年と変わらない結果（Ⅰ4.2、Ⅱ4.5、Ⅲ4.4、Ⅳ4.5、Ⅴ4.5）であったが、Ⅰ学生自身の授業以外の学修時間が低い。ここからも学修習慣が定着していないことが伺える。低学年よりこのまま進んでいくと学修に躓きが見られることも予想されるため、GPAについて学生にも意識付けをして引き続き学修支援をしていく。 ■卒業生アンケートはR4年度卒業生：89名を対象に実施した。回答は29名（32.6%）で昨年度より3.1ポイント上昇した。全員が看護師として病院勤務していた。DPの自己評価については全体的に肯定的な回答であるが国際感覚については「非常に思う」が14%の結果であった。各種支援については国試・進路・教員との関わりについて肯定である一方、チュータについては「非常に思う・思う」が18ポイント減少し、全体的に意見にばらつきがあった。 ＜自己評価・課題＞ カリキュラムの過密さや臨地での体験の少なさなど、学生にとって学修環境の課題はあるが、それを踏まえた上で学生個々の学修進度に合わせた学修機会の提供の検討を継続する。また、学修につまずく学生もいる中、指導や成績評価に説明責任が果たせるような対応を教員個々に考える必要がある。"
	こども教育学科	正課内に子育て支援施設KITでの活動を組み込んだが、コロナ感染症の影響により昨年度は、規模を縮小して活動を実施せざるを得なかった。今年度は昨年度新設された「ときわんノエスタ」の活用についても検討し、学生の学修成果の保証と充実した学修機会の場として提供する。 また学生の学修成果の幅を広げるプロジェクト「ときわ学びの森（ときわラーニングフォレスト）プロジェクト」の策定についても検討する。	■入学者69名・退学者5名・休学者4名（うち3名が休学から退学）・留年者4名・卒業者84名：学生情報を教員間で共有すべく、manaba上に学生の状況について閲覧できるスレッドを作成している。 ■GPA：卒業生累積GPA2.9 ■資格取得状況：小学校教諭免許状取得者29名、幼稚園教諭免許状取得者51名、保育士資格取得者52名 ■卒業後の進路：①小学校　計18名（21.7%）／小学校（教諭）14名（前年度比＋8名）、 小学校（講師）4名（前年度比－3名）、②保育所・認定こども園・幼稚園　計35名（42.2%）／公立保育所・幼稚園（正規）6名（前年度比＋2名）、社会福祉法人保育所（正規）2名（前年度比±0名）、社会福祉法人認定こども園（正規）24名（前年度比＋4名）、学校法人幼稚園（正規）2名（前年度比＋1名）、③社会福祉施設（障害児者・社会的養護）　計15名（18.1%）（前年度比＋1名）／外郭団体（4名）（前年度比＋1名）、社会福祉法人（11名）（前年度比±0名）、④一般企業　14名（16.9%）（前年度比＋2名）、⑤公務員　1名（1.2%）（前年度比±0名）／大阪府警察　1名 ■授業評価：学科平均を分野別に表示するとⅠ学生自身（4.0）、Ⅱ授業内容（4.5）、Ⅲ授業方法（4.5）、Ⅳ学習成果（4.5）、Ⅴ総合評価（4.5）と高い結果となっているが、昨年度と比較するとⅠ学生自身が0.2ポイント、Ⅱ授業内容が0.1ポイント、Ⅲ授業方法が0.1ポイント、Ⅳ学習評価が0.2ポイント、Ⅴ総合評価が0.2ポイント下降している。 ■卒後評価：回収率は31.5%であり、前年より0.5ポイント上昇しているものの低い傾向は変わらない。調査結果については、全体的に前年よりも肯定的回答の低下傾向がうかがえる。DPに関する修得事項の中で肯定的回答が半数を下回ったのは「教育力」の48%であった。また、本学の各種支援や資格取得の満足度も低下傾向であった。総合評価も肯定的評価が前年の97%から70%と低下していた。２年生よりコロナ禍での試行錯誤しながらの授業や課外活動への参加など、学生自身の思いとしては新しい大学生活の在り方に適応しにくかった者もいたと考えられる。 ＜自己評価・課題＞ 　現状資格の取得に甘んじることなく、新たな各種申請を行って、認可された。また教職支援センターと協働し、教員採用試験対策強化を図ることができた。本年度の目標として掲げた教員採用試験受験者の一次試験合格率60パーセント（本年度は80%）、最終合格者30%（本年度は70%）以上はともに達成することができた。2017年度に策定した中・長期目標として、2桁の公立学校教員合格者を輩出できる体制を構築することを掲げていたが、今年度は新卒20名の教員採用試験受験者のうち、最終14名（複数合格者は除く）が合格し、初めて目標を達成することができた。就職希望の学生すべてが内定を勝ち取り、就職内定率１００%となった。 　「基礎研究演習Ⅰ」（1年必修科目）、「基礎研究演習Ⅱ」（2 年必修科目）、「保育教育課題研究Ⅱ」（3 年必修科目）において、KIT 内で実践学修を行い、専門職としての自覚を喚起した。 　学生の学修成果の幅を広げるプロジェクト「ときわ学びの森（ときわラーニングフォレスト）プロジェクト」の策定については新カリキュラムが23年度より始動するので、引き続き検討を行っていく。 　課題としては、就職希望の多様化に対応すべく、無資格で卒業する学生、進路変更学生などに対する就職指導体制の確立、また公務員（一般行政職・警察・消防等）への採用試験対策の充実も検討していく。

第Ⅰ期中期実行計画	該当組織	本年度の目標と活動計画	年間活動報告及び自己評価
②学修成果の保証と充実した学修機会の提供	口腔保健学科	・今年度より新設された４年制教育の教育課程を適正に運用する。 ・短期大学部口腔保健学科を円滑に閉学科できるように、単位習得が困難な学生の学修支援を行う。	■退学者・休学者・留年者・卒業者 退学者数は1年生1名、2年生1名の2名で、昨年度の退学者数3名を下回り、この数年継続して退学者数は減少している。退学理由は進路変更と体調不良であった。履修単位数の不足で3年生が数名留年となったが次年度での修了に強い意欲を示している。昨年度1単位のみを残して過年度生になった4名は揃って修了する事ができた。本年度は留年者以外休学する者はいなかった。来年度は、短期大学部口腔保健学科が閉学科となるため、現役生と過年度生を含めて、未修得単位の履修が課題となる。 ■GPA：卒業生累積GPA2.66 ■資格取得状況・卒業後の進路：国家試験の合格率は98.6%であった。過年度生4名を含む74名が受験をして73名の合格であった。100%は達成出来なかったが全国平均は上回った。今年度の国家試験受験者は入学時からコロナ禍で、１年生から遠隔での学習や2年生、３年生の学内実習・学外実習も変則的であったため、学習指導や学習環境が極めて難しい状況であった。それを踏まえた上での国家試験対策が功を奏し、本年度の結果が得られたと考える。来年度は、短期大学部口腔保健学科が閉学科となるため、過年度生も含めて、国家試験合格率100%を目指すためには、多くの検討が必要である。 ■授業評価：短期大学部の学生による授業評価のカテゴリー別学科平均値の推移（令和2年度～令和4年度）は、「Ⅰ：学生自身」4.1→4.2→4.3、「Ⅱ:授業内容」4.3→4.5→4.5、「Ⅲ：授業方法」4.3→4.5→4.5、「Ⅳ：学習成果」4.4→4.5→4.5、「Ⅴ総合評価」4.5→4.5→４.5と全ての項目において評価が高くなっている。本年度は対面授業が再開されたので評価が高かったと考えられる。授業評価アンケートの回答率は全体70.6%より6ポイントほど高く、学生の3/4の意見が反映されていた。大学生1期生では回答率が90.8%とほとんどの学生が回答しており、「Ⅰ：学生自身」4.0、「Ⅱ:授業内容」4.4、「Ⅲ：授業方法」4.4、「Ⅳ：学習成果」4.3、「Ⅴ総合評価」4.4であった。 ■卒後評価：卒業生アンケートは37.8%の回収率となり昨年の68%に比べて低くなったが、一昨年やその前の年の40%台とほぼ同等の回収率である。ディプロマポリシーに対する評価は、例年「基礎知識」や「学ぶ姿勢」が身についたと回答しているが、本年度は「学ぶ姿勢」よりも「地域社会に貢献する気持ち」や「対人関係形成能力」が身についたと回答した学生が多く見られた。本学科では、在学中にボランティア活動を推奨しているので人間関係形成力や社会貢献への気持が身についたことは意味があったと考える。

第Ⅰ期中期実行計画	該当組織	本年度の目標と活動計画	年間活動報告及び自己評価
②学修成果の保証と充実した学修機会の提供	短期大学看護学科通信制課程	１．国家試験合格率が現状より上がる １）国家試験対策模擬試験への参加率の向上 ・　オリエンテーション及び学習説明会、対面授業時やWeb配信などを活用しての国家試験対策行事の紹介と参加の推進をする ・　会場での模擬試験を神戸・東京・金沢の3会場で実施し、全員参加を木曜に告知する。 10月：必須特訓テストを全学生対象で実施 12月：直前予想模試を卒業対象者対象で実施 ２）卒業要件を早期に整える ・　教務と連携してレポート課題及びテストの進捗状況を早期に把握し、11月には国家試験対策に取り掛かれるよう指導する。 ・　学習説明会及び春期スクーリングで新入生に対して具体的方法を提示し対策に着手するよう指導する。 ・　8月～9月に全学生の学習進捗をチェックし、対応を検討する（学生へ進捗状況を知らせる。） ２．授業評価が向上し、卒業者割合（4月卒業対象者の卒業に至る割合）が増える。 ・　前年度の授業評価内容の共有を受けて春スクーリングを実施、主に学習の動機づけに力を入れる。 ・　卒業延期に至る学生の理由を把握し、きめ細やかの指導につなげる	■入学者・退学者・休学者・留年者・卒業者：年度途中の退学者数は9名（昨年18名）・休学者数2名（昨年6名）。理由は家庭・仕事と学業との両立や経済面、介護などである。卒業者数90名のうち2年間で卒業した学生の割合は78.9%（昨年67.0%）、又、卒業対象者の60.4%（昨年66.3%）が卒業に至っている。 ■GPA：本学で取得した科目のみで算出した。結果は平均2.92（昨年度は2.80）であった。 ■資格取得状況：看護師国家試験結果は、新卒者合格率は79.3%で、昨年度75.3%を4.0%上回ったが、全国2年課程通信制学校新卒者合格率87.2%を7.9%下回った。昨年度は全国2年課程通信制学校新卒者合格率よりも10.9%低かったが、今年度その差は3.0%縮小した。既卒者の合格率は40.0%であり、全国2年課程通信制学校既卒者合格率（30.2%）を9.8%上回った。入学年度別の新卒者合格率を見ると、2年で卒業した学生は87.1%と全国合格率とほぼ同程度であるが、2020年度入学生は45.5%、2019年度入学生は33.3%と昨年度を大きく下回り、全体合格率を低下させる要因となっている。国試対策行事の参加率をおげるため専任教員からの声掛けを徹底した。また、これまでの行事以外に、今年度新たに4 月と6月に国試対策作戦会議を開催し、昨年度の結果を踏まえた具体案について検討し、10と12月に模試および学習会を実施した結果であると考える。 ■授業評価：17項目中学生自身に関する１項目を除いて4.27～4.51と昨年度に比べてもさらに高い評価を得ている。カテゴリー別評価でも全てにおいて4.2以上と高い評価で、学生自身以外は昨年度を上回っており、総合評価でも0.1ポイント上がっている。今年度は概論スクーリングがすべて対面で実施できたことが影響していると考える。 ■卒後評価：ディプロマポリシーに関しては、1項目を除いて（看護実践の評価）昨年度の評価を下回っている。昨年度も7項目全てにおいて前年度より低い結果だったことから目指すべき到達目標に関しては大きな課題であると考える。反面、大学で受けた支援、特に教員とのかかわりに関しては肯定的な回答の割合はいずれも前年度より非常に上がっている。自由記述でも満足した内容が数多くみられ、卒業してよかったと回答する学生が96%に及んでいる。年々、特にチューターからのかかわりを密にして相談や支援を行った結果であると考えるが、卒業時の学習成果に最も関わる実習スクーリングが対面で行えなかったことが大きく影響していると考える。 ＜自己評価・課題＞ １．国家試験結果はわずかであるがあげることができた。今年度の対策を引き続き実施するとともに、3年以上在籍する学生の合格率向上への取り組みと2年で卒業し国家試験に向かえる学生を増やすための支援の強化を行う。 ２．授業評価は、学生自身に対してはポイントが下がっているが、授業内容・授業方法・学習成果共に昨年度を上回っており、総合評価でも0.1ポイント上がっている。また、卒業者数90名のうち2年間で卒業した学生の割合は78.9%と昨年の67.0%を大きく上回る結果で目標は達成できたと考える。次年度は、さらに卒業に必要な単位習得を終える時期が早くできるように、個々の学習進捗に合わせたオーダーメイドな指導を実施したい。卒後評価については、ディプロマを基にして学生の満足度が上がるよう指導内容を今一度見直す必要がある.
③　FDによる教育力の向上	SD委員会	1.研修の４観点（①医療・教育行政の動向の把握、②学内で優先して共有すべき内容、③教職員の教育力・教育支援力の向上、④教職協働 を図る）を踏まえた研修会を計画的に実施する。特に、大学の喫緊の課題について取り上げていく。 2.学科の実態に応じた学科内FDを実施する。 3.各委員会や組織と連携し、効果的な研修を行う。 4.大学コンソーシアムひょうご神戸等の外部情報を学内に広く発信し、充実した情報提供を行う。	＜自己評価・課題＞ １研究の４観点については計画通り実施できた。①医療・教育行政の動向の把握：３月１８日に高階恵美子元構成労働副大臣を招聘して実施した。参加率は60.3%である。②学内で優先せいて共有すべき内容：ハラスメント防止対策研修　　2022年4月25日（月）13：00～15：00　講師：横山美栄子　氏（広島大学ハラスメント相談室）参加率63.0%。　③各学科でFD研修会を実施した。　④教職協働を図る　新任教職員研修　４月４日参加率100%。２学科の実態に応じた研修：各学科でテーマを決めて実施した。３ハラスメント防止対策委員会や関係部署と連携し、効果的な取り組みをおこなった。４コンソーシアムひょうご神戸等、外部の情報を学内にallmail 等で発信した。また、３月１８日の「医療・教育行政の動向の把握」に関する研修については、コンソーシアムや病院関係に案内をした。外部からの参加者は　　15名である。次年度は、参加率の向上を図ることと、学生参加型のFDについても検討、実施を図ることを課題とする。

第Ⅰ期中期実行計画	該当組織	本年度の目標と活動計画	年間活動報告及び自己評価
④　ICT を活用した学習方法の更なる充実	教務委員会	昨年度と同様、新型コロナウイルス感染対策を講じながら学修成果の保証と学修機会の提供に向けて活動（遠隔授業の効果的な活用）する。 今年度は感染対策を十分に行いながら、通常の対面授業を実施する。遠隔授業の運用については、補講日程の確保や、非常事態の場合の授業の確保などを中心に行うが、遠隔授業の効果についても検証し、ICT活用による授業の効果的な制度を教務委員会委員会で作成していく予定である。	専門科目並びに専門基礎科目については、本学学科は国家資格を取得するための指定規則があることから、今年度から以前の状態に戻し、対面授業を主体として授業を行ったが、基盤教育科目の一部の科目については、3年間で培ったmanabaを使用した遠隔授業を取り入れ、実施した。シラバスについて、以前は紙ベースでの配布であったが、令和4年度より本格的にwebシラバスを導入し、紙ベースでの配布を廃止した。これにより、学生は随時シラバスの確認ができるようになった。 ＜自己評価・課題＞　令和4年度から基盤教育科目の一部（11科目）についてmanabaによる遠隔授業を行っているが、おおむね問題なく実施できたことから、令和5年度も同様に実施する。1月23日に予期せぬトラブルによる休講を余儀なくされたが、その際も補講についてはmanabaによる遠隔授業も含めた対応ができたことにより、定期試験の日程を変更することなく実施することができた。来年度以降に向けて、基盤教育科目を中心とした遠隔授業を増やす必要性を検討する。
⑤　激甚災害を想定した学修環境及び学修方法の整備・検討	危機管理（災害）委員会	(1)消防訓練の実施 ・　長田消防署の協力を得て消防訓練を企画し、新入生、在学生、教職員を対象に健康フェスタの開催と併行して実施する。 ・　新型コロナウイルス感染状況により開催が困難な場合を想定し、別途実施の可能性について検討する。 (2)避難手引書の作成 (3)在学生、教職員を対象とした避難訓練の実施	(1)消防訓練の実施 　10月9日の健康フェスタにて、長田消防署の協力のもと、学生教職員、フェスタの来場者とともに、消防訓練を実施することができた。 (2)避難手引書（防災マニュアル）の作成 避難訓練での改善点を反映し、避難経路図の見直し、AED案内の設置等をおこなった。また、新たに学生生活ガイドブックを作成し、新入生、在学生への啓発ツールを充実させることができた。 (3)在学生、教職員を対象とした避難訓練の実施 3月、４月の学生ガイダンスにて在学生、新入生を対象とした避難訓練を実施。課題として大教室での避難誘導、非常階段の利用に係るマニュアルの検討などが上げられた。
	教務委員会	"新型コロナウイルス感染症を含む激甚災害の対応については、学長会議や新型コロナウイルス対策会議での決定事項を受けて速やかに対応する。 令和4年度4月より通常の対面授業が再開したが、授業時の感染対策については、今まで通り学生のマスク着用、手洗いならびに教室の換気を徹底する。また、昼食時の黙食についても、適宜学生に指示を行い、学内での感染を予防する。 新型コロナウイルス感染症や地震・台風などによる休講などが生じた場合は、この2年間で培ったICT（manaba）を活用し、学生の学修の機会を継続させることとする。 "	新型コロナウイルス対策については、学長会議や新型コロナウイルス感染症対策本部会議の決定事項に基づき、公欠の取り扱いなど適宜修正しながら対応することができた。また、ほぼ、対面授業を実施することになったが、学生のマスク着用、教室の換気、昼食時の黙食などを励行することにより、学内の感染は起こらなかった。 1月23日には予期せぬトラブルによる休講を余儀なくされた。学期末で定期試験も近い時期であったが、定期試験までに遠隔授業を含めて補講を実施し、予定通り定期試験を実施することができた。 ＜自己評価・課題＞ 3年間のmanabaによる遠隔授業ならびに感染対策の浸透により、様々なトラブルが生じた場合の学習環境や学習方法ならびに対策は確立できたと考える。今後も様々な対応を強いられる場面が生じる可能性があるが、諸所と連携を取り、学生の学習環境の確保を最優先に対応する。
⑥　学修成果・教育成果等の積極的な情報公表	法人本部	「年間活動報告および自己評価」でも触れたとおり、各学科で収集・分析した学修成果等の可視化に努め、積極的に情報公表していくことは勿論のこと、これら有用な情報をPDCAサイクルに基づき教育等にフィードバックできるよう努める。	各学科で収集・分析した学修成果等の可視化に努め、可能な限り情報公表に努めた。 ＜自己評価・課題＞ 関係法令等に基づき、今後も情報公表に努め、PDCAサイクルに基づき教育等にフィードバックできるよう努めたい。

第Ⅰ期中期実行計画	該当組織	本年度の目標と活動計画	年間活動報告及び自己評価
（２）多様で柔軟な教育体制の構築			
①　基盤教育の充実	ときわ教育推進機構	2022年度より開講した新たな基盤教育カリキュラムの円滑な運営と、次の見直しに向けた準備に着手する。 ・基盤教育科目の設計、履修、運営上の課題を把握する。 ・教育内容を全学共通に見直した情報系科目のについて、振り返りを行ったうえ、次年度に向けた改善を行う。 ・情報系科目の今年度の授業実績にて、次年度のデータサイエンスAI教育認定プログラムへの申請を行う。 ・大学道場miniゼミの見直しに着手する。	本年度は、2022年度より開講した新たな基盤教育カリキュラムの円滑な運営と、次の見直しに向けた準備を目標とした。その目標に沿って、以下の活動を実施した。 ・基盤教育科目の設計、履修、運営上の課題に関して、年度内に11回実施した機構会議において現状に関する情報共有と課題の確認を行った。 ・教育内容を全学共通にした情報系科目を1年間に渡って実施した。開始当初は、情報教室を使用しない大人数での普通教室での授業、教室のWi-Fi環境の脆弱さといった要因により、多少の混乱が見られた。しかしながら、授業担当者の取組により、その後は改善が進み、無事に一年間の授業を終えることができた。 ・上記のように情報系科目の今年度の授業実績が得られたため、次年度のデータサイエンスAI教育認定プログラムへ申請を行う状況が整った。申請に向けて、準備を進めている。 ・大学道場miniゼミの運営に関する見直しを行い、課題となっていた部分を少しでも低減するように努めた。令和5年度は、見直しが完了した運営方針により実施する予定である。 ＜自己評価・課題＞ 目標とした項目は達成できたと評価できる。課題は、令和5年度に着実にデータサイエンスAI教育認定プログラムの申請を行うこと、目標に掲げた科目やそれ以外の科目も含めて、基盤教育科目を改善するための取組を継続することである。
②　学生個々の能力を引き出すための教育プログラム（テーラーメイド教育）の構築	ときわ教育推進機構	・ときわコンピテンシーの自己評価システム内で学生の準正課活動を収集し、活用方法を検討する。 ・必要に応じてリカレント教育についての情報を収集し、卒後も含めた本学独自の教育プログラムの構築を検討する。	本年度は目標に沿って、以下の項目に取り組んだ。 ・前項目で報告の通り、ときわコンピテンシーの自己評価システムの構築は終えることができた。このシステムが稼働することにより、令和4年度入学生からは準正課や正課外の活動を収集すことが可能となっている。そこで、収集したデータの活用方法に関する検討を行った。現段階では、学生自身へのフィードバックを通じて、就職活動における活用や、各学科へのフィードバックを通じて学生指導体制を強化するといった活用方法を考えている。 ・リカレント教育についての情報収集に関しては、今年度は十分な検討はできなかった。 ＜自己評価・課題＞ おおむね目標は達成できたと評価できる。課題として、さらに自己評価システムから得られたデータの活用方法を検討すること、リカレント教育に関する取組を推進することである。
③　キャリア教育の充実 （「学部・学科の特色化」参照）	医療検査学科	新型コロナウイルス感染予防に対応したキャリアサポーター勉強会の支援を行い、在学生に対しキャリアサポーター活動の広報を行う。	キャリアサポーター（卒業生）による勉強会は、５月に５名、９月に２名、３月に５名の協力を得て、対面で行えた。 特に効果的であったのは、５月に実施した新入生を対象とした卒後1年目のキャリアサポーターから自身の学生時代を含めた、仕事紹介または大学院進学体験談であり、１年生に希望と目的を与えることが出来た。
	診療放射線学科	1期生（3年生）に対して就職委員会を中心に、キャリア支援課と連携し、ガイダンス等を実施していく。また、企業就職を希望する学生については、企業訪問等などについて支援を行う。また、兵庫県内はじめ各医療機関の採用情報を集め学生の就職に関する意識の向上を図る。	1期生（3年生）に対し就職ガイダンスを行い、履歴書の書き方等の指導を行うとともに、兵庫県職の採用に関する講演会などを実施した。また、企業就職希望者2名についてはエントリーシート提出やインターンシップへの参加についてサポートを行った。また、大学院進学希望者についても相談にのり、大学院経験者との面談などの機会を設け、進路について助言を行った。一方、新設学科であるため実習施設以外の認知度は低く、採用情報が不足する可能性が危惧されたので、特に関西地区の就職先を開拓するためにキャリア支援課と連携して求人票を配布をするとともに、採用情報を学生に提供し、就職に向かう意識の向上を図った。
	看護学科	看護実践力の育成を目指すために、実践の場にいる卒業生らの教育への協力を得ながら継続していきたい。また、卒業生も含めたキャリア教育（リカレント教育など）にうちて今年度内に一度開催できるよう検討する。	看護の専門分野の科目：3年「小児援助論」、4年「災害看護学」において、ゲストスピーカーとして卒業生に協力を得た。各実践の場にいる卒業生の生きた体験に対して学生は関心を高くしていた。また臨地実習先で卒業生の指導者も増えている中で卒業生の姿は学生とってもよいモデルとなっている。他に、養護教諭を目指す学生対象に卒業生の座談会を行ったり、就職先から卒業生を招きＯＢ／ＯＧ（8月8日）を行った。 ＜自己評価・課題＞実践の場にいる先輩からの話は学生にとって良い刺激となっている。引き続き継続させていきたい。

第Ⅰ期中期実行計画	該当組織	本年度の目標と活動計画	年間活動報告及び自己評価
③　キャリア教育の充実 （「学部・学科の特色化」参照）	こども教育学科	正課内外、授業・就職指導両面において、就職委員会とキャリア支援課が連携し、キャリア教育の充実を図っている。また教職支援センターの活動においても、教員採用試験合格者による座談会を毎年11月に開催し、既卒生による先輩激励訪問を8月に実施している。今年も実施予定である。	授業において、外部講師や卒業生を迎えてキャリア教育を行っている。また就職指導においても、就職先から講師を招き、専門職としての意識を高める取り組みも行っている。教職支援センターと連携して、卒業生を迎え、合格者座談会や先輩激励訪問などの企画も実施している。 ＜自己評価・課題＞ 課題としては、保育や教職の専門職を目指さない学生へのキャリア教育の実施である。少人数であること、また年度ごとに差異があるため計画的に実施することは難しい。専門職を目指す学生に対するキャリア教育と一般職・公務員等への就職を目指す学生と汎用性の高いキャリア教育の実施を計画していく。
	口腔保健学科	・大学においては１年次のキャリア教育科目の実施とキャリアコンサルタント有資格者によるキャリア支援を推進する。 ・短期大学部においては従来どおり就職委員会とキャリア支援課の共同企画を実施する。	大学においては、１年次のキャリア教育科目「学びの基礎」や、入学直後の就職ガイダンスで歯科衛生士の先輩の話を聞く会を開催し、早期に歯科衛生士のイメージを持つ事が出来たと考える。本学科ではキャリアコンサルタント有資格者である専任教員もいることから授業や担任の学生面談時等にキャリア支援を推進している。さらに、次年度にはキャリア教育としてワークキャリアプラニングの科目が開始され、次次年度にはインターンシップも開催されキャリア教育が本格化する予定である。短期大学部においては従来どおり就職委員会とキャリア支援課の共同企画である就職ガイダンスを、3年生向けを6回（内1回は、外部企業によるマナーガイダンスを実施）、2年生向けを4回（内1回は、外部の熟練したキャリアコンサルタントによる自己分析を実施）実施して進路支援を行なった。

第Ⅰ期中期実行計画	該当組織	本年度の目標と活動計画	年間活動報告及び自己評価
④　リカレント教育の実施	医療検査学科	リカレント教育にむけた教材のさらなるデジタル化を促進。 対面でのリカレント教育が行える場合、可能なかぎり対面での実施を行う。	腹部・心臓・消化器・泌尿器・婦人科・乳腺・甲状腺などを中心とした基礎と臨床について、生理学的検査を主にたリカレントカンファレンスを月に1回の頻度で開催した。また、デジタル教材として、各種動画マニュアル教材を作成用の資料および動画の作成、外国人対応などにも役立つよう日本語版・英語版・中国語版の作成を行った。
	診療放射線学科	卒業生を対象としたリカレント教育に関する準備を行っていく。同時に近隣の医療機関で従事している社会人に対するリカレント教育についても検討していく。	卒業年次に達していないため、具体的な活動はなかった。 将来の卒業生を対象としたリカレント教育については十分に検討が進まなかった。ただし、近隣医療機関との連携については臨地実習を通じて進んできており、少しづつリカレント教育のニーズを検討していくことができた。
	看護学科	訪問看護師を対象とした調査および本学卒業生を対象とした調査結果の分析結果から リカレント教育の方向性を明らかにして、実施に向けて計画・立案する。	卒業生の本学でのリカレント教育へのニーズは様々であるが、在校生との交流や自らのキャリアを母校に還元したいといった意見もあった。先述したように授業のゲストスピーカーとなってくれる卒業生がおり、彼ら自身も学修の場となっていると思われるので、このような機会は継続していきたい。 ＜自己評価・課題＞ 学生の学修効果だけでなく、卒業生のリカレント教育の一環としても意味があると考えている。他の科目についても機会があれば継続させていきたい。
	こども教育学科	学祭の時期に合わせて、ホームカミングデーを開催している。そのときに、学科教員が保育の動向や保育所保育指針、幼稚園教育要領、学習指導要領の改訂のポイントなどについて講演を行って いる	毎年学祭の時期に合わせて、ホームカミングデイを開催している。その時に保育の動向や最新の保育事情について学科教員が講演をしている。教職支援センター事務室と連携し、教員採用試験を受験する既卒生にも採用試験対策のための資料の配布、採用試験情報の提供なども行っている。 ＜自己評価・課題＞ 　既卒生への連絡については、ゼミ担当者がゼミごとにライン等で周知を図っているが、退職した教員がいる場合などは徹底が難しい場合もある。今後既卒生への連絡方法等については検討の余地がある。
	口腔保健学科	リカレント教育の新しい試みとして、学内の歯科診療所を実習場所とした歯科衛生士の臨床技術修練や患者の歯科保健指導などを企画し、より実践に即した学び直しの機会を提供する。	「歯科衛生士リカレント教育キャリアアッププログラム」は平成26年度から開講しており、本年度は「歯周疾患管理コース」に4名（内2名は本学卒業生）の受講者があった。4月の開講式から3月の修了式までの間、60時間以上の授業（在校生に開講されている科目、リカレント生だけの特別科目、歯科診療所での実習科目、他施設への見学研修等）を受講し、全員が学校教育法第105条に基づき履修証明書を受け取ることができた。本年度は歯科診療所が開設されたので、歯科診療所を実習場所として歯科衛生士の臨床技術修練や患者の歯科保健指導など、より実践に即した学び直しが可能になった。
⑤　大学の特色を生かした学部学科横断的な教育プログラムの検討・実施	ときわ教育推進機構	学科横断、学年横断のリエゾン（橋渡し）を意識したコンテンツや教育プログラムの作成に着手する。 必要に応じて多職種連携教育への協力を行う。	目標に沿って以下の取組を行った。 ・基盤教育から専門教育につながる学科・学年横断型のカリキュラムは、現在、学年進行中の段階にあり、その実施に関わる課題の確認と議論は実施したが、具体的な活動までには結びつかなかった。 ＜自己評価・課題＞ 十分には取り組めていないと評価できる。課題として、複数の学科や組織が関連する当該教育プログラムについて、ときわ教育推進機構が果たせる役割を明らかにした上で、取組を実施することである。

第Ⅰ期中期実行計画	該当組織	本年度の目標と活動計画	年間活動報告及び自己評価
⑥　地域連携型教育プログラムの検討・実施	地域交流センター	①新型コロナウイルス感染症の収束が見えない中、「子育て総合支援施設 KIT」「健康ふれあいフェスタ」「わいがやラボ」等地域交流の場をどのように継続していくのかを検討し、地域と大学が繋がり続けるための企画を積極的に増やすしていく。 ■昨年度、子育て支援センター「ときわんノエスタ」がスタート、登録者数も1年で150組以上となり、今年度も引く続き、ときわんクニヅカ、ときわんモトロクと共に地域の子育て支援を行う。 ■「わいがやラボ」において「わいがやカフェ」をスタートさせる。 ②公開講座については、昨年度より取り組みを強化しているオンデマンド配信による講座を活用し、高齢者を中心とした企画以外に新たな年齢層を取り込める企画を提案する。 ■対面/オンデマンド、年間 20 本以上の公開講座を実施するとともに、すこラボや KIT 等学内組織と連携した講座を企画する。 ■今年度よりセミナーガイドを刷新し、地域向けの大学広報誌的な役割も果たすようなもの作成し、2回/年発行していく。 ③多文化共生社会の実現に寄与する活動を企画・運営する。 ■神戸国際コミュニティセンター（KICC）との連携協定をベースに多文化共生に関する地域課題の発掘、それに対して寄与できる活動を企画・運営する。（ときわ健康キャラバン：日本語学習者への健康支援、外国にルーツを持つ子どもへの日本語学習指導等） ④教職員・学生に本学の地域交流・社会連携活動を周知するための広報活動を行う。 ■新着任教職員の希望者を募り、街歩き会を実施する。 ■インナーブランディングの確立のため、学内向け地域交流・社会連携活動情報誌「社会連携だより」を発行する。 ■地域における防災減災啓発のための取り組みとして、長田消防署と連携した学生による啓発活動の検討を行う。 ■学生のボランティア活動推進のため、諸団体と連携した活動の企画を行う。（淡路市岩屋地区活性化プロジェクト、小豆島合宿、福島スタディツアー、ボランティアリーダー育成事業等）	■公開講座は、前後期合わせて20本を講座実施。 【内訳】 ◎対面14本　※まちコラ1本、芸術文化論1本を含む　◎WEB4本　◎オンデマンド2本 補助金要件で言えば、40本以上の公開講座開催（主催、または共催）で満点の得点となるため、少しでもその本数に近づけるよう努力する。 ■セミナーガイドを刷新し、作成した「ハロとき」を2回発行。地域との新しいインターフェイスとなった。 ■神戸国際コミュニティセンター（KICC）と連携し、てらこやに登録のある児童で外国にルーツを持つ子どもへの日本語学習指導を実施。 延べ419名の児童が参加。また、同センターが主催するKICCキッズ国際ひろば（2回：8/10、8/24開催）に常盤女子高の生徒10名がボランティアとして参加。 国際保健室（3回：12/14、2/14、3/8開催）には7名の大学生がボランティアとして参加。 ■コロナ感染拡大防止の観点から小豆島合宿は中止となったが、小豆島町とは連携協定を締結。 ■健康ふれあいフェスタは、3年ぶりの開催。515名の来場者があった。 来場者数だけではなく、来場者の満足度を高めていくことにも注力していきたい。 ■福島スタディツアーは、2回目の開催。3/23～24の1泊2日で実施。診療放射線学科の学生14名（1～3年生）が参加。
	ときわ教育推進機構	2022年度より開講した創造実践科目群について、その設計、履修、運営上の課題を把握する。	目標に沿って以下の取組を実施した。 ・2022年度より、創造実践科目群に「超ときわびと」を位置づけた。当該科目の設計については、検討を行った。しかしながら、その実施に当たっては、コロナ禍の影響、当初予定していた実践フィールドの実施体制変更などの要因により不開講となっており、現時点では継続課題となっている。 ＜自己評価・課題＞ 上記のように目標を達成できていない。課題は、現状を改善して当該科目を開講させることである。
⑦リメディアル教育（学習支援、補習授業）の検討・実施	ときわ教育推進機構	・ICT（manaba）を活用した入学前教育の支援を行うと共に、入学前教育とリメディアル教育の接続の在り方を検討する。 ・必要に応じてリカレント教育についての情報を収集し、卒後も含めた本学独自の教育プログラムの構築を検討する。	目標に沿って、以下の取組を実施した。 ・ICT（manaba）を活用した入学前教育に関して、各学科のときわ教育推進機構の機構員を通じて、manabaの活用に関する情報提供を実施した。その結果、昨年度よりも多くの学科でmanabaを活用した双方向での入学前教育が展開された。さらに、入学前教育で提出した学びの成果は、入学後にも引き継がれるため、その活用を模索する動きも出ている。 ・リカレント教育に関しては情報収集の段階であり、今年度の段階では卒後も含めた本学独自プログラムの構築の検討には至っていない。 ＜自己評価・課題＞ 上記のように、一定の成果が得られたと評価できる。課題として、卒後も含めた本学独自プログラムの構築の検討に着手することである。
⑧学園内高大連携の充実	学園一体化推進協議会	昨年度に引き続き、各学科の体験授業、入学予定者を対象とした入学前オリエンテーション、あるいは神戸常盤女子高等学校主催の進路説明会等への教職員派遣などを実施し、学園内広大連携の一層の充実に繋げていく。	医療検査学科、看護学科、診療放射線学科、口腔保健学科、及びこども教育学科を対象とした体験授業を実施した。その他、入学前オリエンテーション、神戸常盤女子高等学校主催の進路説明会等への教職員派遣などについては例年どおり実施した。 　これらの取り組みが、学園内高大連携の充実に繋がることを期待したい。 ＜自己評価・課題＞ コロナ禍3年目において、感染防止に配慮しながら概ね各行事を実施することができた。これにより神戸常盤女子高等学校生徒の学習意欲向上に繋がった。

第Ⅰ期中期実行計画	該当組織	本年度の目標と活動計画	年間活動報告及び自己評価
2　入学者選抜に関する計画			
（1）IRを活用した入学者選抜制度の検証と改善	入試委員会	各学科のR.4年度卒業生に関する卒業次の成績(取得単位、資格、国家試験結果)と入試形態に関する解析 ・IR推進室と協力して各学科のR.4年度卒業生に関する卒業次の成績（取得単位、資格、国家試験結果）と入試形態に関する解析を行う。	各学科でR.4年度新入生アンケートの実施・分析等により、志望動機や併願先の様子を把握することで学生受け入れに関する適性を検証した。 IRデータを活用して各学科R.4年度卒業生（上位10名、下位10名）に関する入学時基礎力テスト結果、取得単位、資格、国家試験結果等と入試形態に関する解析を継続的に行うことはより当該学科のAPに適合した入学者の選抜につながると考える。また、各学科の特徴、独自性を強化するとともに、将来的に求められる分野を見極めることが重要である。
（2）アドミッション・ポリシーに基づき、入学志願者の学力及びそれ以外の能力・意欲・適性等を多面的・総合的に評価・判定するための入学者選抜を実施	入試委員会	新テストにおける評価基準の設定と確認 ・R.4年度選抜で本学が導入した新テストに対応するために設定した調査書評価基準、面接試験評価基準、大学入学希望理由書の評価基準を確認する。	R.４年度選抜では、本学が設定した調査書評価基準、面接試験評価基準、大学入学希望理由書の評価基準を各学科で確認した上で、各選抜入試を実施したことで従来の学力ではなく、学力の３要素を基に意欲・適性を多面的・総合的に評価できた。学科研修として選抜方法についての理解を共有した後、各入試に臨んだ学科もあった。
（3）ホームページの充実やインターネットの活用による積極的な広報展開	広報委員会	「魅力ある大学」として広く社会に発信できるコンテンツ作りのため、他部署と連携してHPの充実を図る。 　教育・研究・社会貢献に関する情報公開を積極的に行う。またHP記事の更新に学科や部署の偏りがないようにし、トピックボックス等を利用して迅速に漏れなく掲載する。 　SNSを使った広報を活性化させる。	＜自己評価・課題＞ 1.コロナ禍を乗り越え、昨年度まで中止していたイベントや活動も再び実施されるようになってきた。それに伴い、HPへの掲載数も増加した。また、コロナ禍にあっても教員の教育・研究活動は遅滞なく掲載することが出来たことは評価できよう。（根拠資料：HPトップページ「NEWS」への掲載記事）HPについて、過去4年間のアクセス総数を比較すると2019年度431,478回・2020年度525,756回・2021年度469,251回・2022年度466,514回である。2019年→2022年は＋8.12%の変化であった。 スマホからの新規訪問率についてはリニューアル前の2020年9月は46.90%、リニューアル後2023年2月は55.62%と運用開始後は8.72%の結果である。 さらに、平均ページビュー（アクセス後、何ページ閲覧したかの平均）は2022年2月3.04%から2023年2月2.87%へと△0.17%の変化である。 2.3年目に入った「トピックボックス」による情報共有は順調に運用できている。教職員が自分の属している学科や部署にとどまらず、他学科や他部署のことを知る機会としての意義は大きい。学科や部署によっては記事の更新回数にばらつきがあるので、引き続きトピックの提供や、トピックボックスの閲覧について呼びかける。また、広報活動に広く利用してもらうために常盤女子高校とも共有できるようにする。 3．SNSを使った広報については引き続き活性化の方法について模索している。KOBE-TOKIWAの検索ワードを使ったインスタグラムが本学の教職員の努力によって次々と更新されている。今後も、協力を仰ぎつつ、効果的な広報を行いたい。 4．広報紙「キャンパスレポート65号66号」を発行し、本学の実績を報告することができた。
	入試委員会	広報委員会の協力を得ながら「今の常盤」、「最新の常盤」を発信することで本学の周知を図り、認知度を高め、志願者増に結びつける。 ・新型コロナウイルス感染症の感染状況による選抜方法の変更等の告知を迅速に行い周知することで、受験生の不利益防止に努める。 ・在学生と教職員の協力を得ながら動画を用いた各学科の魅力と最新の情報を提供し、志願者増に結びつける。 ・web 相談会により他府県からの受験生対応の実施につなげる。	在学生と教職員の協力を得ながらホームページ上での神戸常盤大学の各学科の魅力と最新の情報を提供することで志願者増に結びつけられた。さらに、web相談会により他府県からの受験生対応の実施につなげたいと考える。

第Ⅰ期中期実行計画	該当組織	本年度の目標と活動計画	年間活動報告及び自己評価
（４）オープンキャンパスの実施方法の改善	入試委員会	新型コロナウイルス感染症の予防を徹底しながら、新たな方法で6回のオープンキャンパスを実施し、来場者を受験に結びつける。 ・新型コロナウイルス感染症の予防（3密の回避、消毒の徹底）に配慮しながら対面型のオープンキャンパスの方法として、予約制人数制限有り、登録制人数制限無し、学生動員の調整、午前午後の2度実施、来場者を複数班に分割しての実施等を企画し運営することで、高校生、来場者の要望に応える。	新型コロナウイルス感染症の感染状況を見据えて、新型コロナウイルス感染症の予防（3密の回避、消毒の徹底）に配慮しながら5月と6月は人数制限を設けた上で午前午後の2度実施、来場者を複数班に分割しての対面型オープンキャンパスを実施した。7月以降は人数制限をなくして保護者を含めて多くの入場者を受け入れるようにし、さらには他府県からの受験生が来訪できるようキャンパスツアーを行うことで受験生の不利益防止に努め、来場者を受験に結びつけた。R.４年度来場者総数は生徒1,473（1,118）名、保護者 1,022（767）名、合計2,495（1,885）名（カッコ内は Ｒ３年度人数）であり、大幅に増加した。
３　学生支援に関する計画 本学の教育理念を構成する全学スチューデントサポート・ポリシーに則り、学生委員 会を中心に以下の課題に取り組む。			
（１）各学科就職委員会と連携した就職支援の強化	キャリア支援課	各学科就職委員会と連携の上、就職支援に取り組み。従来より推進する「キャリアサポーター（卒業生）」の参加型による在校生へのガイダンス、懇談会は令和2年度、3年度とコロナ禍により中止、縮小を余儀なくされたが、今年度は当然ながら新型コロナウイルス感染症の影響も考慮しながら、すべての学科で実施し、業界研究、職種研究等の就職活動の準備に繋げて行く。また、第1期生が就職活動を迎える診療放射線学科においても、外部の診療放射技師を招きガイダンスを展開していく、就職先開拓も臨床実習開始に伴う施設訪問や他学科の就職施設を訪問し、求人確保に繋げて行く。	＜自己評価・課題＞各学科の就職委員会と連携し、キャリアサポーターのガイダンスを実施した。年間を通して、医療検査学科は３回、看護学科は１回、こども教育学科は１回、口腔保健学科は２回実施した。 コロナ禍以前のような回数は実施できなかったが、職業意識の醸成に繋がったと考える。 診療放射線学科においては、１年生を対象に外部の診療放射線技師を招いてのガイダンスを実施した。また、次年度の計画として、診療放射線学科の４年生を対象に兵庫県職員と国立病院機構の方を招いてのガイダンスの計画をすることができた。 さらに診療放射線技師の求人確保のために就職実績のある施設に対して、キャリア支援課員で１９施設を訪問した。

第Ⅰ期中期実行計画	該当組織	本年度の目標と活動計画	年間活動報告及び自己評価
（２）学生支援体制の充実 ①　学生実態調査および3年毎の学生満足度調査を行い、学生生活の実情を把握する。また調査の結果を学生にフィードバックするとともに、教育環境の改善を図る。	学生委員会	「本年度の目標」 1.学生実態調査の実施部署として調査回収を行い、早期に学生全員が回答できるように努める。 「本年度の活動計画」 1.入学時、2年次、4年次の学生に学生実態調査を行い、早期面談の実施および学生生活の充実に向けた環境改善につながるよう、各学科およびキャリア支援課、IR推進室と連携して、速やかに回答率が100%になるよう努める。	＜自己評価・課題＞新入生を対象とした学生実態調査について、オリエンテーションの期間を利用して実施したことにより、４月中に100%（435名）の回答を得た。また、調査を基に学科教員で面談を実施した。学生実態調査が4月中に実施・回収できたことで、早期の面談につなげたことは評価できる。
（２）学生支援体制の充実 ②　学生自治会との定期的なミーティングを実施し、活動方針を協議、確認することにより、学生自治会の健全な運営のための支援を行う。	学生委員会	「本年度の目標」 2.学生自治会の健全な運営のための支援を行うとともに、学生生活の充実を図る。 3.コロナ禍の中、⑴今年度学園祭、⑵次年度新入生対象の学外オリエンテーションの実施方法について検討を行う。 4.喫煙学生の実態を把握し、対応を検討する。 「本年度の活動計画」 2.学生自治会とミーティングを実施し、活動方針を協議、確認することにより、学生自治会の健全な運営のための支援を行う。さらには、多くの学生から意見を集約し、問題点を見つけ出すことにより、大学側と連携して教育環境の改善に役立てる。 3.⑴大学祭開催の是非および実施方法については、昨年度の実績をもとに学生自治会との意見交換を通じて検討する。⑵については、昨年度同様、新型コロナウイルスの感染防止措置が必要となることが予想されることから、学内オリエンテーションの実績、在学生の意見、アンケート調査結果などをもとに検討を行う。 4.喫煙学生の実態の把握に努め、必要に応じて対応策を協議する。	＜自己評価・課題＞2.(1)学園祭の実施については学生自治会と４回のミーティングを通じて意見交換を行った。学生委員会と学生自治会で新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止策を講じながらの開催について議論を重ねた。学生たちの実施に向けての強い思いも尊重し、飲食の提供や食事場所等を制限しながら、学内学生を中心とした参加者として１日だけの開催とした。感染が広がることなく学園祭を成功裏に終えることができたことは評価できる。 (2)新入生オリエンテーションについては、昨年度に学内で実施した実績や学生のアンケート結果をもとに今後のオリエンテーションの開催方法について検討を行った。学内で実施することにより在学生が参加しやすく、新入生と在学生の交流が図れること等、メリットも多く、次年度以降は学内で開催することとなった。新入生オリエンテーションのアンケート結果は次のとおり。①トキワシンポジウム(満足度)：98.6%、②学科プログラム(満足度)：99.3%、③大学生活のイメージが湧いた：97.6%、④学習意欲が高まった：96.3%、⑤友達作りのきっかけになった：89.1%、⑥教員との交流が図れた：70.4%、⑦大学生活の不安が軽減した：86.1%、⑦緊張の緩和が図れた：90.9%　　その他、自由記述においても肯定的な意見が多く、学内実施を通して本来の目的が達せられたことは評価に値する。今回の経験を次年度以降に繋げる取り組みを進めていく。 3.定期的な学内見回りや禁煙に関する啓蒙活動により校内での喫煙学生数が激減した結果、タバコに関するトラブルの発生は今年度は見られなかった。禁煙活動を次年度以降も続けていく。
（３）修学支援奨学金制度の見直し 2020年4月から新たに始まる「高等教育の教育費負担軽減新制度」と本学独自の修学支援奨学金制度を連動させるために制度の見直しを行い、経済的な理由で修学が困難 な学生を支援する。	学生委員会	「本年度の目標」 5.修学支援奨学金制度の見直しを行う。 「本年度の活動計画」 5.昨年度に引き続き、本学独自の修学支援奨学金を新型コロナウイルス感染症の影響を受け、家計の収入が減少した学生を対象に支援を行う。	＜自己評価・課題＞奨学金については、今年度も昨年に引き続き、新型コロナウイルスの影響で家計収入が減収している者を対象とした。令和元年度（コロナ前）の収入が令和3年度の収入もしくは令和4年度の収入見込が50%以上減少した者を対象として募集を行った。 応募者は3名であり、その内、基準を満たしている1名が採用となった。また、家計の急変による理由で1名の学生を採用した。 30名の採用枠がある中、申請数が3名と少なかったことが課題として挙げられる。申請者が少なかった理由として、令和2年度からの高等教育の修学支援制度の導入により授業料減免、給付型奨学金の受給者が増えたこと、また、減少率が50%以上の基準も影響していると考えられる。 次年度は経済的に困窮している学生を支援する制度として、申請条件の見直しを行う。

第Ⅰ期中期実行計画	該当組織	本年度の目標と活動計画	年間活動報告及び自己評価
４　研究に関する計画 医療と教育、そして地域連携を特色とする大学全体としての研究環境の充実を図り、 多様で柔軟な研究体制を構築することを目的として、以下の課題に取り組む。			
（１）「私立大学研究ブランディング事業」（平成29～令和元年度文部科学省補助事業）により開設された本学独自の「子育て総合支援施KIT」および「ときわんモトロク」を拠点として、総合的な子育て支援関連の研究を系統的に推進する。	教育研究推進センター	推進のための研究環境の整備と学内啓発活動 ・2022年度の「テーマ別研究」より新たに見直したルール等の学内周知や今後の在り方について検討	テーマ別研究の「教育研究枠」で採択された「子育て総合支援施KIT」にまつわる教育研究に関して、「神戸常盤大学紀要」に論文が2本掲載された。 ＜自己評価・課題＞ 「子育て総合支援施KIT」および「ときわんモトロク」を拠点とした総合的な子育て支援関連の研究の系統的な推進は、コロナ禍ということもあって十全に進んでいないのが現状である。世の中がアフターコロナに移行しつつある中で、いかに本内容を推進していくかが課題である。
（２）地域社会における多文化共生の実現を目指し、保健、歯科衛生、教育、保育の分野での調査・研究を企画し推進する。	教育研究推進センター	推進のための研究環境の整備と学内啓発活動 ・2022年度から新設した「テーマ別研究」の申請区分【ブランディング研究（地域・教育）】枠を活用した研究の活性化	テーマ別研究の「地域研究枠」で採択された多文化共生に関する研究が現在遂行中である。 また、多文化共生を具現化したコロナワクチンの大学拠点接種に関する報告が「神戸常盤大学紀要」に掲載された。 ＜自己評価・課題＞ テーマ別研究の「地域研究枠」で採択された多文化共生に関する研究は、コロナ禍において滞っているが、これに関して研究推進と論文化の支援が課題である。
（３）多様な研究人材を活かし、医療・ 保健分野、教育分野における基礎的・先導的研究の推進を図る。	教育研究推進センター	推進のための研究環境の整備 ・2022年度から新設した「テーマ別研究」の申請区分【基礎研究】枠を活用した研究の活性化 ・「すこラボ」等の学内組織と協働し、医療・保健分野における基礎的・先導的研究を推進 ・約3年ぶりに「神戸常盤学術フォーラム」を対面で実施し、学内の研究情報の共有化	・「すこラボ」から申請された科研費が不採択となった。 ・約3年ぶりに「神戸常盤学術フォーラム」を対面で実施し（12月）、学内の研究情報の共有化を図ることができた。 ＜自己評価・課題＞ ・「すこラボ」発信による科研費採択への支援が課題である。 ・「神戸常盤学術フォーラム」の開催時期については賛否はあるが、もう1年、同時期に開催後、改めて開催時期については検討する。
	紀要委員会	紀要発行について ①査読方法の課題について、引き続き検討する。 ②教育研究推進センター、研究倫理委員会と連携しながら、本学紀要のより良い在り方について検討する。	（1）緑葉・紀要の発行について ・緑葉第17号を発行した。（掲載3編） ・紀要第16号を発行した。（掲載14編/査読回数のべ66回） ・紀要第16号別冊「令和4年度 神戸常盤学術フォーラム抄録集」を発行した。（掲載29編） （2）次号発行に向けて ・「紀要投稿の手引き」を改訂した。（研究倫理委員会と連携） ・「神戸常盤学術フォーラム抄録様式」を改訂した。（教育研究推進センターと連携） ＜自己評価・課題＞ ①査読関連の課題については、査読方針の共通理解を図り解決に努めたことにより、概ね方針にそった査読を実現することができた点は評価できる。しかし、依然として査読の質、及び投稿者の査読への対応の質の確保について課題が残った。これらの課題については、引き続き検討する。 ②研究倫理委員会と連携し、本学紀要のより良いあり方を検討した結果、「紀要投稿の手引き」の見直しを行った。目次「はじめに」の記載内容として、著者及び査読者に共通の目安として３項目を示していたが、２項目とした。

第Ⅰ期中期実行計画	該当組織	本年度の目標と活動計画	年間活動報告及び自己評価
（４）学術研究、実地調査の基盤としての図書館ならびに情報ネットワーク環境の充実・ 整備を図る。	図書委員会	１. 電子資料のアクセシビリティの向上を図るために ①. 電子資料の利用方法について各学科教員と連携した周知拡大につとめる ・電子資料の利用について、情報の発信・共有を周知する ・電子資料のリニューアルにともなう対応・利用方法変更を周知する ②. 電子資料利用状況の評価・分析を行う ・Webガイダンスの更新、利用状況の評価・分析とそれに応じた契約変更を行う ２. 学生の図書館利用を促進する取り組みを継続する ①. 教員と連携して授業・課題等での図書館利用を促進する ②. 継続的な広報活動を行う。 ・継続的なガイダンス、配布物やポータルシステムでの情報配信 ・図書館HPの継続的な改善を行い、Web 広報・案内を充実する ③. 読書マラソン参加者を増やすために積極的な広報・案内を行う ・読書マラソンを実施し、優秀者の表彰を実施する ④. 幅広い図書ジャンルから良書を所蔵するためにビブリオ KoToLa の充実を図る ⑤. 図書館機能の拡充として、学内に館外閲覧スペースの設置について検討する 3. 図書館の環境整備 ①.感染拡大予防対策による利用制限を状況に応じて見直す ②入館ゲートのリニューアルにより入館時のカード読み取りをスムーズに行う ③図書館外へ持ち出せる学生貸出用PCとしてChromeBookを導入する ④図書館システムサーバーのcloud化を検討する	1-①. ・文献検索ガイダンスを開催した。（manaba：NE科4年生、対面：M科4年生・O科2年生） ・図書館HP資料を適宜追加・更新し、各学科教員および学生に周知した。（オンデマンドガイダンス、文献検索、電子書籍） ・データベース案内を追加した。（JAPAN SEARCH・教育研究論文索引・白書等・ERIC） ・各データベースオンライン講習会の案内を都度配信した。（学生へポータル配信4回、教員へtokiwa-all配信8回） ②. ・メディカルオンラインイーブックストライアルを実施、利用ログを収集・分析し、利用資料の傾向を確認した。（期間4ヵ月・利用ユーザー数：540人） 2-①. ・E科1年生「基礎研究演習Ⅰ」で学生Web選書を活用できた。（4グループ19人） ・授業協力した。（N科3年生「看護研究方法論」・O科1年生「学びの基礎」） ・学生企画のオリエンテーションM1学科プログラムに協力した。 ②. ・図書館エントランスでブックリユースを実施した。（持ち帰り：73冊） ・イベントごとに掲示板・図書館HP・ポータルで周知、参加を呼びかけた。（ポータル配信：5回） ③. 読書マラソンの表彰を行い、読書マラソンニュースを配信した。（表彰者2名）（新規エントリー者：4名） ④. ビブリオKoToLaを募集した。（推薦者13人、推薦図書37冊） ⑤. 資料整理・管理の観点より、見送った。 3-①. ・グループ学習室の利用を利用時間制限で再開した。 ②. 入館ゲートをリニューアルし、学生証・学生証アプリのコード読み取りでの入館が可能になった。 ③. ChromeBookを導入した。（学内限定で館外利用可・貸出当日限り） ④. 来年度実施予定。 <自己評価・課題> 活動計画はおおむね達成できた。 課題：上記の活動を継続しつつ、オープンサイエンス時代に必要とされる大学図書館の在り方を検討するための準備を進めていく必要がある。 機関リポジトリのシステム移行に伴い、本学の研究成果公表支援の周知を図り、求められる機能およびデータの利活用についての動向を把握・整理する。そのため、必要に応じて教員、関係部署への協力を図る。
（５）「外部資金」獲得のための支援体制を構築し、学内研究活動の促進を図る。	教育研究推進センター	「外部資金」獲得のための支援体制のさらなる充実 ・「外部資金」募集案内の全学的発信と、特に若手研究者に対する応募書類の校閲と加筆修正のアドバイス ・研究者の層に合わせた支援体制の検討	・本年度の科研の申請者数は15名であり、採択者数は3名（採択率20%）であった。 ・私学事業団の「2023年度若手・女性研究者奨励金」の公募において、大学としては初（短期大学部においては実績あり）の「女性研究者奨励金」に採択された（「若手研究者奨励金」については残念ながら不採択」）。 <自己評価・課題> ・科研の申請者数が本年度は低調であった。科研の申請者も固定化されてきたように感じる。引き続き、全学的に「研究活動」が推進していくよう働きかけを行っていくことが課題。

第Ⅰ期中期実行計画	該当組織	本年度の目標と活動計画	年間活動報告及び自己評価
5　地域連携に関する計画 建学の精神のもと、「地域と歩みを共にする大学」として教職員・学生が一体となっ て以下の課題に取り組む。			
（1）大学の地域貢献 「子育て総合支援施設 KIT」「健康ふれあいフェスタ」「わいがやラボ」など地域交流の場を積極的につくるとともに、諸団体（地域団体・行政機関・企業等）との連携強化を図り、地域課題解決に向けた本学独自の教育研究活動を展開する。	神戸常盤地域交流センター	新型コロナウイルスの世界的な感染拡大の影響により「子育て総合支援施設KIT」「健康ふれあいフェスタ」「わいがやラボ」等地域交流の場が縮小せざるを得ない状況にあるが、コロナ禍においてどのように場を持つのかを検討し、地域と大学が繋がり続けるための企画を積極的に増やす。 ・子育て支援センター「ときわんノエスタ」を新たに開設し、既存の子育て支援施設とともに地域の子育て支援を行う。 ・「わいがやラボ」の利用促進を図るため、学生向け企画を開催する。（わいがやカフェ等） ・学生のボランティア活動推進のため、諸団体と連携した活動の企画を行う。（淡路市岩屋地区活性化プロジェクト、小豆島合宿、福島スタディツアー等）	■コロナ感染拡大防止の観点から小豆島合宿は残念ながら中止。 ■健康ふれあいフェスタは、3年ぶりに開催出来、515名の来場者があった。 来場者数だけではなく、来場者の満足度を高めていくことにも注力していきたい。 ■福島スタディツアーは、2回目の開催。3/23～24の1泊2日で実施。診療放射線学科の学生14名（1～3年生）が参加。
（2）多文化共生 多文化共生推進のためのワークショップ、シンポジウムを開催するとともに、学生参加プログラムとして国際保健室活動などの正課内外への組み込みを検討する。また、外国にルーツを持つ子どもたちが安定した生活を築くロールモデルの確立を図る。	神戸常盤地域交流センター	多文化共生社会の実現に寄与する活動を企画・運営する。 ・新長田南地区に移転予定の神戸国際コミュニティセンター（KICC）等と連携し、多文化共生に関する地域課題の発掘、それに対して寄与できる活動を企画・運営する。（日本語学習者への健康支援、外国にルーツを持つ子どもへの日本語学習指導等）	神戸国際コミュニティセンター（KICC）と連携し、外国にルーツを持つ子どもへの日本語学習指導を実施。 ※てらこやに登録のある児童で外国にルーツのある子供たちが参加。 ■延べ419名の児童が参加。 また、同センターが主催するKICCキッズ国際ひろば（2回：8/10、8/24開催）に常盤女子高の生徒10名がボランティアとして参加。 国際保健室（3回：12/14、2/14、3/8開催）には7名の大学生がボランティアとして参加。
（3）公開講座（生涯教育） 履修証明制度を導入するなど、社会の多様なニーズに合った生涯教育の体制を体系的に整備するとともに、本学知財のさらなる可能性を探る。また、高大連携事業の一環として高校生向けのイベントを計画する。	神戸常盤地域交流センター	公開講座については、すでに昨年度より取り組みを強化しているオンデマンド配信による講座を積極的に活用し、高齢者を中心とした企画以外に新たな年齢層を取り込める企画を提案する。 ・対面・オンデマンド、年間20本以上の公開講座を実施するとともに、すこラボや KIT 等学内組織と連携した講座を企画する。	前後期合わせて20本を講座実施。 【内訳】 ◎対面14本　※まちコラ1本、芸術文化論1本を含む ◎WEB4本 ◎オンデマンド2本 補助金要件で言えば、40本以上の公開講座開催（主催、または共催）で満点の得点となるため、少しでもその本数に近づけるよう努力する。
（4）インナーブランディング 建学の精神に基づく地域活動の充実と学内の理解の一層の深化のための仕組みづくりを行う。教職員・学生がアクセスしやすい地域交流・社会連携活動情報サイトを構築するなど、各自が「ジブンゴト化」できる活動環境を整備する。	神戸常盤地域交流センター	教職員・学生に本学の地域交流・社会連携活動を周知するための広報活動を行う。 ・インナーブランディングの確立のため、学内向け地域交流・社会連携活動情報誌「社会連携だより」を発行する。またいつでもアクセスできるようポータルサイトの作成を検討する。	学内向け地域交流・社会連携活動情報誌「社会連携だより」の発行が出来なかったことは大きな反省点である。 次年度は、活動した結果をまとめ、何かしらの形で学内に伝えていくことに注力したい。

第Ⅰ期中期実行計画	該当組織	本年度の目標と活動計画	年間活動報告及び自己評価
（５）防災・減災教育 学生・教職員を対象とした防災訓練を行うなど防減災活動を実施するとともに、地域において防減災に関する知識を啓発していく。全学生が取得する市民救命士の資格を基礎に、地域活動に関する新たな学内認定資格の創設を検討する。	危機管理（災害）委員会	(1)消防訓練の実施 ・　長田消防署の協力を得て消防訓練を企画し、新入生、在学生、教職員を対象に健康フェスタの開催と併行して実施する。 ・　新型コロナウイルス感染状況により開催が困難な場合を想定し、別途実施の可能性について検討する。 (2)避難手引書の作成 (3)在学生、教職員を対象とした避難訓練の実施	＜自己評価・課題＞ (1)消防訓練の実施 10月9日の健康フェスタにて、長田消防署の協力のもと、学生教職員、フェスタの来場者とともに消防訓練を実施することができた。 (2)避難手引書（防災マニュアル）の作成 避難訓練での改善点を反映し、避難経路図の見直し、AED案内の設置等を実施した。また、新たに学生生活ガイドブックを作成し、新入生、在学生への啓発ツールを充実させることが出来た。 (3)在学生、教職員を対象とした避難訓練の実施 3月、４月の学生ガイダンスにて在学生、新入生を対象とした避難訓練を実施。課題としては、大教室での避難誘導、非常階段の利用に係るマニュアルの検討などが上げられた。
	神戸常盤地域交流センター	・危機管理委員会（災害委員会）、長田消防署、長田消防団と連携し、学生消防団員による初期消火デモンストレーション、体験会を実施する。	・健康ふれあいフェスタにおいて、長田消防団所属学生による防災紙芝居を披露した。また同行事において、長田消防署員協力のもと、水消火器を使用して消火体験を実施した。
６　国際交流に関する計画 学生のグローバル共生の意識を高め、また国際貢献を担う人材を育成することを目的 として、以下の課題に取り組む。			
（１）ネパール交換研修プログラムの充実 22年間におよぶネパールとの研修生交換事業のさらなる発展を目指し、短期研修プログラムの系統的な作成と効果的な実施に取り組む。	国際交流センター	・ネパール交換研修プログラムの本年度実施の可否について検討を行う。実施困難となった場合、次年度以降の派遣と受け入れの時期、内容の検討を行う。	・ネパール交換研修プログラム COVID-19の影響により、昨年度に引き続き、ネパール交換研修は中止とした。本研修がホームステイを伴うことから、実施可能とする条件は新型コロナウイルス感染症が感染法上の分類が第5類に移行することとし、2023年度実施可能となった場合は、本学学生の派遣より再開し、翌年受入を順次行うことを決定した。 ＜自己評価・課題＞ 本年度は実施に関しての協議をネパール側と重ねたが、次年度は具体的な研修内容に関して、特に教育系の充実を図るための協議を進めることが課題であると考える。
（２）国際交流プログラムの実施 ①　海外学生派遣プログラムとして「国際保健医療活動II」（ネパール・米国）を開講するとともに、本科目を「大学コンソーシアムひょうご神戸」の参加大学に開放する。	国際交流センター	・大学コンソーシアムひょうご神戸に開放している「国際保健医療活動II」に関して、今年度の実施を検討し、コンソーシアム側にフィードバックを行う。	・国際保健医療活動II 大学コンソーシアムひょうご神戸に開放している「国際保健医療活動II」は新型コロナウイルスの影響により今年度の実施は中止とした。本科目の科目責任者と協議を行い、2023年度に関しては、本学の学生の希望が最少催行人員を満たしたコースを開講し、あわせてコンソーシアムへの開放を行うこととした。 ＜自己評価・課題＞ コンソーシアムへの開放に関するルール検討をCOVID-19の状況を注視しながら進める。

第Ⅰ期中期実行計画	該当組織	本年度の目標と活動計画	年間活動報告及び自己評価
（２）国際交流プログラムの実施 ②　「異文化体験」等をテーマとした各種国際交流プログラムの実施を通して、学生がグローバルな視点から共生の意識を持てるよう支援する。	国際交流センター	・ネパール交換研修の本年度の実施が困難となった場合、昨年度に引き続き「ネパール研修会」を、神戸国際コミュニティセンター（KICC）と協議の上実施する。 ・学内実施国際交流プログラムとして実施可能なものを選定し、実施する。 ・基盤教育科目「国際理解」を開講する。	①神戸国際コミュニティセンター（KICC）との共催プログラム 　2023年3月11日に「スポーツを通して国際交流」会を本学と包括協定を結んでいるKICCと共同で開催した。午前中は、卓球大会を行い、また午後はオンラインでネパールとつなぐハイブリッド形式で行った。39名（本学学生13名、常盤女子高等学校学生7名、留学生4名、学外大学生2名、学外高校生1名、一般の方12名）の参加があり、その後のアンケート結果では80%以上の方が「満足」「やや満足」と回答した。 ②学内実施国際交流プログラム 　本年度は学内実施国際交流プログラムとして、「ヨガ講座」、「ネパール語勉強会」のプログラムを下記のとおり実施した。 【ヨガ講座】：開催日は2022年7月20日。参加者は学生11名、教職員6名。学外の講師よりインドという国、ヨガについて講義を受けた後、感染対策を行いながら参加者全員でヨガを実践した。 【ネパール語勉強会】：開催日は2022年12月20日（第1回）及び2023年2月21日（第2回）。参加者は学生7名、常盤女子高校生9名、教職員数名であった（※全2回の延べ数）。在日ネパール人を講師として招き、ネパール語の挨拶などの日常会話や文化などを意見交換を行いながら学習した。 ③基盤教育科目「国際理解」 　本科目は前期後半に受講者64名で開講した。単位修得者は５０名であった。国際交流センターの教員、職員が役割分担し、各回ゲストスピーカーを招き、授業を行った。 ＜自己評価・課題＞ ①　このプログラムにより、新たに地域の留学生、一般の方との交流を行い、また26 年に及ぶネパールとの貴重な交流を途切れることなく実施することができた。一方で、コロナ関連の発表やディスカッションに対して、意見を押し付けているのではないかとのクレームも一部にあった。この点、一般の人が参加する場所でのディスカッションは学会等とは異なることを意識して行う必要があると考えられた。また次年度は地域の日本語学校の留学生との交流等も視野に、更に幅広い国際交流の機会を検討していく。 ②　両プログラム共に今回はアンケートを実施していなかったが、今後はアンケート等により参加者の意見を反映させながら、より良いプログラムを実施できるよう検討していく。 ③　本科目の学生による授業評価調査は、分野Ⅰ（学生自身）は基盤教育科目の平均値4.0であったが、分野ⅡからⅤ（授業内容、授業方法、学習成果、総合評価）ではどれも4.5と、平均を上回っていた。コメントからも受講生は多文化理解について考えたり、学んだりしたことが示唆される。2023年度授業に向けて、授業内容や課題、評価の仕方を見直し、さらなる充実を目指す。
（３）「国際交流センター」の充実 　国際交流関連情報にアクセスできるセンター機能の充実を目指し、多言語・多文化に関心を持つことのできる資料の整備を進める。	国際交流センター	・本年度重点的に整備を進める言語、文化を設定し、それらの関連資料の調達・整備を、設置場所の調整を行ったうえで進める。	・資料整備 　国際交流センターは現在、すこラボの一部を使用している。資料の利用を図るシステムをどのように構築すべきかが不明であるため、今年度は書籍等の資料購入は見送った。 ＜自己評価・課題＞ 　次年度、設置場所の確保の為の調整を行い、学生が関心を寄せ、国際理解の授業の参考になる書籍等の購入の検討を図っていくこととする。

第Ⅰ期中期実行計画	該当組織	本年度の目標と活動計画	年間活動報告及び自己評価
７　自己点検・評価に関する計画			
（１）自己点検・評価の継続、及び第三者評価機関等による評価を実施し、それらの結果に基づき、内部質保証システムを効果的に機能させ、大学運営の改善につなげる。	自己点検・評価委員会	「第Ⅰ期中期実行計画（令和2年度～令和5年度）中間報告書」を作成し、新たに設立される評価組織（外部評価者を含む）による評価に向けた準備を行う。 ①「中期実行計画に基づく中間報告」を編集し、関連組織等と協議の上「中間評価」の準備を行う。 ②内部質保証システムの変更に伴う委員会規程等の改訂について検討する。	①「第Ⅰ期中期実行計画」中間報告および中間評価について ①-1）「第Ⅰ期中期実行計画に基づく中間報告」および「データ集」を作成し、運営委員会・教授会を経て学内で共有した。さらに、本学の自己点検・評価活動として、大学ホームページ上で情報公開した。 ①-2）上記「中期実行計画に基づく中間報告」を基に、外部評価会議（対面）を実施した。 日時：9月15日（木） 出席者：外部評価員4名、本学教職員31名 目的：第Ⅰ期中期実行計画の進捗状況の評価と実行計画後半への改善点の指摘、第Ⅱ期中期実行計画策定に向けた課題抽出 評価分野：教育・研究、学生支援、地域連携・国際交流、入試 ・評価会議の概要を「令和4年度　中期実行計画に係る中間評価　報告書」としてまとめ、学内で共有し、本学ホームページ上で情報公開した。 ②規程等の改訂について 自己点検・評価委員会規程については、不整備箇所の洗い出しを行った。 ＜自己評価・課題＞ ①中間報告書を基に、初の試みとしての外部評価を実施して、中期サイクルでの点検・評価については一定の体制を整えることができた。今後は、書面による外部評価の導入などについても検討する必要がある。 ②自己点検・評価委員会規程については、委員会活動の実態と規程との整合性に留意し整備をすすめ令和5年度内に完了させる必要がある。
（２）着実な評価の継続・向上のために研修会の実施等を含め、学内の評価風土を高め、エビデンスや評価指標の設定を重視したより客観的な評価の実施を行う。	自己点検・評価委員会	「授業評価」「卒後評価」の評価項目及び評価方法について見直しを行い、教育の現状に沿った評価指標とする。	①授業評価： ・学期ごとに「学生による授業評価」を実施し，各教員に対して学生へのメッセージと学科長報告書の作成を依頼した。また、学科単位の集計結果を各学科にフィードバックした。 ・授業評価の評価項目について、学生の回答しやすさなどの観点から見直しを行い、次年度より変更することとした。その結果、学科共通項目を１項目減らし、独自項目の設定が１項目増え、科目に応じた質問ができるようにした。 ②卒後評価： ・令和3年度卒業生への「卒業生アンケート」を実施し、集計結果を各学科にフィードバックした。 ・「卒業生アンケート」の項目見直しについて議論した結果、各学科ともに新カリキュラムへと移行した学年が対象となる令和8年度実施分から変更することとなった。 ＜自己評価・課題＞ ①授業評価：評価項目見直しについて目標達成できた。今後は学科長報告書の在り方について、ティーチングポートフォリオの導入も視野に入れて検討を行う必要がある。 ②卒後評価：「卒業生アンケート」見直し年度に向けて引き続き内容を検討していく。また、3年に1度実施している「就職先アンケート」については、実施サイクル等について再検討する必要がある。

第Ⅰ期中期実行計画	該当組織	本年度の目標と活動計画	年間活動報告及び自己評価
（３）大学運営のPDCAサイクルを着実に機能させ、学長のもとに設置されている「ときわ教育推進機構」や「IR推進室」等との連携において、評価の質向上と評価方法の改善につなげる。	自己点検・評価委員会	「第Ⅰ期中期実行計画」の後半に向けて、年間活動計画と年間活動報告書による自己点検・評価システムの妥当性を検討し、より実効性のある点検・評価体制を構築する。これにより、中期実行計画に基づく全学的なPDCAサイクルを確立・機能させることを目指す。 ①「年間活動計画」「年間活動報告」による点検・評価活動が円滑に実施できるような体制を整える。 ②活動報告で用いる根拠データの入手について、IR推進室との連携を強化する。 ③教員の個人年間活動報告の在り方について検討する。	①中期実行計画に基づく点検・評価活動の実施体制について： ・「令和3年度年次報告書（各組織の年間活動報告まとめおよび根拠データ）」を作成し、学内での共有と学外への公表を行った。今回からは、クラウド上のファイルに入力していただくことにより、経年的な計画の進捗状況や他組織との比較などがわかりやすい形を整えた。 ・「令和4年度年間活動計画」作成を依頼し、学内で共有した。 ・「第Ⅰ期中期実行計画に基づく中間報告」をまとめ、これに基づいて上記の外部評価を実施した。中間報告書および中間評価報告書は学内で共有し、学外に情報公表した。 ②年次報告書および中間報告書の根拠データは、IR推進室から提供を受けた図表を用いた。 ③「研究計画調書」の導入に伴い、教員の年間活動報告書では研究に関する活動報告の記載は求めず、教員の負担削減を図った。 ＜自己評価・課題＞ ①年度ごとの「年間活動計画」→「年間活動報告」のサイクルに、中期サイクルでの「中間報告」→「外部評価」のサイクルを加え、中期実行計画に基づく点検・評価の体制構築を予定通り前に進めることができた。今後はPDCAサイクルの確立のために点検・評価結果の改善への活用推進と、第Ⅰ期中期実行計画終了後の点検・評価体制の構築について検討する。 ②根拠データの提供に関してIR室との連携を深めることができた。 ③教員の年間活動報告書については、前述の「授業評価報告書」とも合わせて、改善に結びつき、かつ教員の負担を軽減するような方法を検討する。
８　学部・学科の特色に向けての計画			
保健科学部 医療検査学科			
①臨床検査に必要な知識・技術に加え、人間性のさらなる向上を目指した教育を実施するとともに、社会貢献に資する教育・研究を実行する。	医療検査学科	一般向け講演、学内外で実施される臨床検査啓発活動への協力 学外での各種専門学会を通じた知的・人的貢献	教員がそれぞれの専門性を活かして社会貢献を行えた。学科長の坂本は本校だけでなく臨床検査技師養成校の代表として臨床検査技師教育改正に伴う説明を頻回に行えたことは、本校の教育が実際に社会に役立っている証とも言える。 臨床検査に関する講習会、研修会の会場として、本学科教員が実務委員として加わり本校で開催依頼を受けることが多いことも、社会貢献に資する教育・研究を学科として行えた特記すべき事項である。
②平成29（2017）年度に開始した新カリキュラムの学修成果を検証し、その結果を基に、当分野での多様なニーズに応じた教育システムを構築する。	医療検査学科	2022年4月入学者から開始された臨床検査技師教育内容に関する学科内FD開催を含め、4. 新カリキュラムを系統だって行えるよう、学科内での情報共有を行う。	2022年入学者から新カリキュラムが導入されたことに伴い、開講年度が異なる科目の時間割調整、履修者登録などを調整し、滞りなく新カリキュラムへの移行を開始することが出来た。
③キャリアサポーターによる勉強会の充実。当勉強会は年齢が近い講師（卒業生）による講習であり、学生にも好評であることを鑑み、講師数の増加と講習内容の拡充のために、学科としての関わりをさらに深くする仕組みを構築する。	医療検査学科	新型コロナウイルス感染予防に対応したキャリアサポーター勉強会の支援を行い、在学生に対しキャリアサポーター活動の広報を行う	キャリアサポーター（卒業生）による勉強会は、５月に５名、９月に２名、３月に５名の協力を得て、対面で行えた。 特に効果的であったのは、５月に実施した新入生を対象とした卒後1年目のキャリアサポーターから自身の学生時代を含めた、仕事紹介または大学院進学体験談であり、１年生に希望と目的を与えることが出来た。

第Ⅰ期中期実行計画	該当組織	本年度の目標と活動計画	年間活動報告及び自己評価
④卒業生を中心に、社会人を対象とした次の二つのリカレント教育を構築する。 ・臨床検査現場にも本格的に導入が進んでいる遺伝子及びゲノム医療などに関する基礎的な講義を通し、学生時代に同分野の授業を受けなかった社会人への座学的なリカレント教育。 ・超音波検査分野での知識・技術の向上を目指す社会人を対象とした実習的なリカレント教育	医療検査学科	リカレント教育にむけた教材のさらなるデジタル化を促進。 対面でのリカレント教育が行える場合、可能なかぎり対面での実施を行う。	腹部・心臓・消化器・泌尿器・婦人科・乳腺・甲状腺などを中心とした基礎と臨床について、生理学的検査を主にたリカレントカンファレンスを月に1回の頻度で開催した。また、デジタル教材として、各種動画マニュアル教材を作成用の資料および動画の作成、外国人対応などにも役立つよう日本語版・英語版・中国語版の作成を行った。
保健科学部 診療放射線学科			
①アドミッション・ポリシーに基づいて迎え入れた学生を、ディプロマ・ポリシーに掲げている、優れた診療放射線技師として育てる。そのために、カリキュラム・ポリシーに基づいて作成した教育プログラムを展開する。同時に、遅滞なくそれを評価し、評価結果は速やかに学生教育に反映させる。	診療放射線学科	1．入学試験による学生の確保 過去の入学試験の形態・時期などを分析し、2023 年度入学試験を適切に実施し、優秀な学生の確保に努める。 ２．専門科目移行期の学習支援 基盤科目から専門基礎ならびに専門科目へスムーズな移行を図るために適切な学習支援の方法を検討する。また、4年次の本格的な国家試験対策に先立ち、3年生後期から徐々に対策を開始する。 3．学内実習や卒業研究に必要な備品の整備や人員の配置に関する検討 学内実習や卒業研究などの教育に必要な備品を精査し、適切に整備する。 4．カリキュラムの検証と適切な教員配置に関する検討 開設時のカリキュラムについて、改訂を前提とした精査を開始する。さらに、カリキュラムの最適化に伴う適切な教員配置についても併せて検討していく。	2022年度の新入生88名を3期生として迎え、3学年の体制となった。過去の入試形態と成績の関連性についての分析は実施したが、大幅な入試形態等の変更には至らなかった。ただし、受験者数は堅調に推移して、優秀な学生の確保ができるようになってきている。 入学後の学修面では欠席が多い学生や不安を抱えている学生については定期的に調査し、学科会議などで学科教員全体が情報を共有するとともに、キャリア支援課、学生相談室とも連携しながら対応した。特に基盤科目から専門科目への移行の段階となる2年次のカリキュラムで難易度が上がるために学修が思うように進まない学生が多くみられる。そこでこの時期の学修支援体制の強化を行ったが同時に合理的配慮の必要な学生への対応も行う必要があり、マンパワー不足により十分に行うことができなかった。また同時に、学修の難易度が急に上がることなく、よりスムーズに学修できるようにカリキュラム自身の見直しが必要と考え、新カリキュラムに向けた準備を開始した。 そのほか、診療放射線技師とは別の国家資格であるが、放射線取扱主任者の資格取得を勧めており、希望者には受験対策講座を開き、延べ6名の合格者を出すことができた。
②短期大学部を含めると、多様な医療系および教育系の学部・学科を擁した本学の特徴を活かして、基盤（基礎）教育を推進する。	診療放射線学科	「基盤教育」から専門教育に向けた連携性を確認していく。基盤科目から専門基礎科目への移行がスムーズにいかない学生がいるので支援する。また、必要に応じて基盤教育の内容を吟味し、シームレスな教育を目指していく。	基盤教育は医療人としての視野を育成するために重要な役割を担っている。しかしながら、基盤教育と専門教育の間には授業内容や難易度にギャップがあり、その差に学生が苦労していることが見て取れた。このギャップを改善するためには基盤教育、専門教育の担当者の意見交換が必要であるが十分な検討は行えなかった。よって、学科として、よりシームレスな教育ができるように、引き続き現カリキュラムにおける改善と新カリキュラムの策定による是正を検討していく。
③地域医療機関との共同研究を推進する。	診療放射線学科	臨地実習における近隣医療機関とのコミュニケーションの場を活用して、将来、共同研究に発展するような研究活動に関する意見交換を進めて行く。	臨地実習の実施により近隣の医療機関とのコミュニケーションは大きく進展した。診療放射線領域の研究においては本学で整備できない大型機器等が必要な場合もあるため、近隣の医療機関との連携や共同研究は重要であるが、学修支援や臨地実習への対応に要する時間が増加し、現在の学科教員数では学外での共同研究を推進するまでの余力はないのが現状であった。
④本学の地域貢献事業やボランティア活動に積極的に関わっていく。	診療放射線学科	福島スタディツアーなど本学の地域貢献事業やボランティア活動に学生及び教員が積極的に参加し、放射線災害時などにおける地域貢献の重要性について継続的に学んでいく。	コロナ感染の規模は収束の兆しを見せているが、ボランティア活動および地域貢献活動は依然、限定的な開催となっている。そのような状況の中、原子力発電の事故による放射能汚染に苦しむ福島県を訪問するスタディツアーを今年度も実施した。この福島スタディツアーでは、放射線の安全管理や原子力災害に対する診療放射線技師の役割を再認識することを目標とし継続的に実施していくものである。昨年は、滞在中の地震により中断を余儀なくされたが、今年度は無事に予定を完了することができ、有意義なスタディツアーとなった。

第Ⅰ期中期実行計画	該当組織	本年度の目標と活動計画	年間活動報告及び自己評価
保健科学部 看護学科			
①地域に開かれた大学としての使命を果たすために、豊かな知性と感性を備えた専門職業人の育成に向けたカリキュラムの現状（基盤教育の推進を含む）を検証する。	看護学科	改正カリキュラムでの教育課程実施（１年目） 実施上の課題の抽出を行う。 2023年度に開講予定の「地域活動基礎実習」について、地域・在宅系を中心に、実習内容・計画を作成する。また地域交流センターとも連携し、具体的な検討を進める。 （10月～11月まで）	改正カリキュラムの遂行については先に述べた通り。特に地域・在宅看護が注目される中、本学科も地域、在宅看護を特色として「地域活動基礎実習」を2年次に設けた、2023年度に開講予定であるが、担当者は地域・在宅系、老年系の教員である。神戸市協力依頼を済ませたが、具体的な活動の場や時期についての検討はこれからである。 ＜自己評価・課題＞ 「地域活動基礎実習」について、2023年度後期に開講できるよう、具体的な検討を早急に進める必要がある。担当者が他学年の臨地実習や授業の調整もしながらスケジュールに組み込む必要がある。
②国が示す「地域包括ケアシステムの構築」を受けて、チーム医療・多職種間共同を図り、病院・施設看護はもちろん、在宅系サービス、地域における生活支援・介護予防等の実践力育成のための看護の基礎教育内容を検討する。	看護学科	2023年度に開講予定の「地域活動基礎実習」について、地域・在宅系を中心に、実習内容・計画を作成する。また地域交流センターとも連携し、具体的な検討を進める。 （10月～11月まで）	上記の通り
③在宅看護実践力の向上のために、卒業生を主な対象とするリカレント教育、また大学院を視野に入れた卒後教育のシステムを検討する。	看護学科	訪問看護師を対象とした調査および本学卒業生を対象とした調査結果の分析結果から リカレント教育の方向性を明らかにして、実施に向けて計画・立案する。	在宅看護実践能力の向上を目指し、昨年度実施した調査結果を分析し、リカレント教育の実施に向けた計画を実施予定であったが、分析が不十分で実施に向けた計画・立案に至っていない。卒業生を対象としたニーズ調査については現職に必要な知識、基礎知識、先端の知見、キャリアアップのためなど様々であったが、先述したように在校生と交流し、共に学びたいという意見があった。具体的な計画まで至っていない。 ＜自己評価・課題＞ 訪問看護師を対象にした調査結果の分析とリカレントの検討を課題として取り組む必要がある。また卒業生についてもリカレント教育を企画する予定であったができなかった。
④「地域拠点において看護学科が提供する all generations の健康支援に向けた実践モデルの検討」における平成30年度研究成果から、地域における健康課題が抽出されたが、その解決に向けた取り組みとして「まちの保健室」や「ＫＩＴ」での活動を中心に、地域の高齢者への健康相談・介護予防、子育て支援等、長田の地域に密着した健康支援活動を継続する。	看護学科	「地域拠点において看護学科が提供するall generations の健康支援に向けた実践モデルの検討」に基づいた地域支援 ・子育て支援を中心とした長田地域への健康支援について、調査結果を,まとめ公表する。 ・大学全体の「健康プロジェクト」と交流し、高齢者・外国人・子ども・母親世　代・祖父母世代など、各世代ごとの課題に対して、具合的な取り組みを行い、検証する。	子育てを中心とした長田地域の健康支援について、「すこらぼ」や「KIT」などの活動を通して、高齢者、外国人、子供・親・祖父母世代などの課題について、それぞれに取り組みを行っている。 ＜自己評価・課題＞ 学科としての検証には至っていない。今後は地域活動の場が地域で学ぶ場にもなるように、地域との交流の機会を継続していく必要がある。

第Ⅰ期中期実行計画	該当組織	本年度の目標と活動計画	年間活動報告及び自己評価
教育学部 こども教育学科			
①特色ある教育システムを次のように構築する。 ・本学他学科の特徴を取り入れ、医療的な知識を備えた保育士・幼稚園教諭・小学校教諭の養成を可能にするカリキュラムを検討する。 ・再課程認定後の新カリキュラムの検証に加えて、子育て支援施設KITおよび附属幼稚園との教育連携を強化し、現地での実践的活動を取り入れた授業計画および準正課でのプログラムを立案する。 ・教員採用試験の対策強化のために、教職支援センターと協働し、準正課での教員採用試験スケジュールの充実を図る。	こども教育学科	①特色ある教育システムを次のように構築する。 本学他学科の特徴を取り入れ、医療的な知識を備えた保育士・幼稚園教諭・小学校教諭の養成を可能にするカリキュラムを作成し、「チャイルドヘルスサポーター」資格を付与している。この資格に加えて、保育・教育の現場、家庭、地域の中で、こどもが安全に活動できるよう、環境を注意深く観察する力や、こどもが災害から自分自身を守るすべを身に着けられるよう指導する力を修得したことを認定する資格、「地域防災スペシャリスト」を取得できるカリキュラムを一昨年度に考案したが、その中核科目「防災教育実践」（令和6年度開講）のシラバス等の検討を行う。また保健科学部の「チーム医療論」開設に歩調を合わせて、教育学部でも「チーム学校論」を令和6年度に新設をする。そのシラバス等の検討を行う。	①特色ある教育システムを構築する １．チーム力育成教育、こどもの健康教育、防災教育の 3 つのプログラ ムを本学独自の教育プログラムとして構築するために科目の整理、調 整を行った。 ・本学科独自資格「地域防災スペシャリスト」の科目連携を検討するとともに新たに設置した「防災教育実践演習」の科目内容を検討した。 ・保育者養成コースと教員養成コースの学生がともに学ぶ科目「チーム学校論」保・幼・小連携（縦のつながり）、保育施設・教育機関と家庭および地域との連携（横のつながり）について学ぶ科目の検討を行った。 ２．再課程認定後の新カリキュラムを検証し、子育て支援施設 KIT および附属幼稚園との教育連携を強化する、という目標を掲げた。「基礎研究演習Ⅰ」（1年必修科目）、「基礎研究演習Ⅱ」（2 年必修科目）、「保育教育課題研究Ⅱ」（3 年必修科目）において、KIT 内で実践学修を行い、専門職としての自覚を喚起した。また幼稚園の行事に学生を参加させる機会を提供したり、学科教員が幼稚園で研修を行うなどコロナ禍において実施できなかったプログラムを実施することができた。 ３．教員採用試験の対策強化を図る。 ①一般・教職・専門教養の学力を強化する、②実技試験対策を実施する、③学びの常盤風土を促進する（含：異学年・異学科交流）、④子育て支援施設KITにおける活動をカリキュラム内に位置づけ、小学校教諭としての自覚を喚起し、実践力の養成を図るの4つの計画を立てたが、すべて計画通りに実施することができた。 　上記計画の実施に加えて、本年度は中学校教諭1種免許状資格（理科）が取得できる新課程の申請を行い、文部科学省より認可を受けることができた。中学校教諭免許資格に加えて、学校図書館司書教諭資格についても申請、認可された。来年度より新たなコースとして設置する保育幼児教育コースのカリキュラムの充実をはかるため、認定絵本士養成講座を開設することができるよう申請し、義務教育コースには採用試験対策の一環として、英検オンラインプラクティス・論理的文章カトレーニングの導入も計画している。 <自己評価・課題> 　現状資格の取得に甘んじることなく、新たな各種申請を行って、認可された。また教職支援センターと協働し、教員採用試験対策強化を図ることができた。本年度の目標として掲げた教員採用試験受験者の一次試験合格率60パーセント（本年度は80%）、最終合格者30%（本年度は70%）以上はともに達成することができた。2017年度に策定した中・長期目標として、2桁の公立学校教員合格者を輩出できる体制を構築することを掲げていたが、今年度は新卒20名の教員採用試験受験者のうち、最終14名（複数合格者は除く）が合格し、初めて目標を達成することができた。就職希望の学生すべてが内定を勝ち取り、就職内定率１００%となった。 　課題としては、就職希望の多様化に対応すべく、無資格で卒業する学生、進路変更学生などに対する就職指導体制の確立、また公務員（一般行政職・警察・消防等）への採用試験対策の充実も検討していく。
②地域と大学との連携強化を図るため、学部の専門性を生かした子育て支援活動（KITや附属幼稚園に通う児童、保護者、乳幼児への支援活動）に取り組む。	こども教育学科	②地域との大学との連携強化を図るため、学部の専門性を生かした子育て支援活動（KITや附属幼稚園に通う児童、保護者、乳幼児への支援活動に取り組む。 KITでの活動を「基礎研究演習Ⅰ」等カリキュラム内に取り込んで授業運営を行っている。その教育内容についてさらに検討を進める。また昨年度オープンした「ときわんノエスタ」の活用方法についても検討する。 KIDSクラブの運営を企図し、実施しているが、今年度も引き続き検討実施する。	３年ぶりの開催となった健康ふれあいフェスタでは、学生が地域のこどもたちのためのプログラムを企画・運営し、人形劇、あそびの広場の運営を行った。付属幼稚園との交流においては、のべ11人の教員が関わり、14回、附属幼稚園でキッズクラブを開催することができた。 <自己評価・課題> 　今年度同様、学部の専門性をいかした子育て支援活動を実施していく。上記した地域連携活動においては、教員の専門性を社会貢献活動として還元することに加えて、学生の教育の機会とできるように一層プログラム構築に配慮していく。
③高大連携の強化を図るために、系列校（常盤女子高校）および協定校を中心として、高校生向けの授業や学生と高校生の交流企画を充実させる。	こども教育学科	③高大連携の強化を図るために、系列校（常盤女子高）および協定校を中心として、高校生向けの授業や学生と高校生の交流企画を充実する 昨年度に引き続き常盤女子高との関係を強化すべく、出張授業、高校生と大学生の交流企画を検討実施する。協定校に関しては、教員の負担等も考えながら方策を検討する。	神戸常盤女子高との連携強化を図るために大学見学会、進路講座、出張授業、体験授業を実施した。入学前オリエンテーションを２回実施し、可能なときにはできる限り本学学生との交流機会を設けた。 <自己評価・課題> 　本年度同様、上記の連携を継続していく予定である。

第Ⅰ期中期実行計画	該当組織	本年度の目標と活動計画	年間活動報告及び自己評価
保健科学部　口腔保健学科（短期大学部 口腔保健学科 ）			
①4 年制大学への移行を視野に入れ、次の課題に取り組む。 ・口腔衛生に適した優秀な学生を確保するため、一貫した 3 ポリシー（アドミッション、カリキュラム、ディプロマ・ポリシー）を検討するとともに、多様な入学者選抜制度を構築する。 ・豊かな教養と多様な技能を兼ね備えた歯科衛生士を育成するために、基盤教育及び専門教育を見直すとともに両者の有機的連携を図る。	口腔保健学科	１．入学定員を充足することを目標とする。新しくした臨床実習内容の学習成果を確認する。 ２．　資質の高い入学生を確保するために、入試委員会と連携して広報活動を充実する。 （高大連携事業の継続、高校訪問の推進、グランフロント大阪・大学紹介ブースでの口腔保健学科紹介の実施、オープンキャンパスでの個別相談会の充実化など） ３.豊かな教養と多様な技能を兼ね備えた歯科衛生士を育成するために歯科診療所と連携した学内臨地実習教育の充実化を検証する。 ４．教育内容を担保する学外臨地実習施設の確保と充実に務める。 ５．4年制教育に合わせて、学外臨地実習における科目担当者の学修内容について検討する。 ６．リカレント教育と学部教育の連携による双方の教育の充実を図る。	４年制の口腔保健学科の教育理念に沿った３ポリシーと学修成果の策定を行い、質の高い学生確保のために多様な入学者選抜制度の構築と高校訪問、オープンキャンパス、入試ガイダンスなどの広報活動を精力的に実施した。しかし、令和４年度に引き続き令和5年度入学者も定員を3名満たすことが出来なかった。定員の充足は今後の課題である。教育カリキュラムについては昨年度に専門教育科目の実習内容の見直しと臨地実習教育内容の統一を図ったので、本年度は臨地実習評価について検討した。また、本年度から学内歯科診療所において学内臨地実習教育が実施でき、教育効果が上がったと考える。
②学生の学びの振り返りや実践力の強化、他者との関係を取り結ぶ姿勢を涵養するために、上級生による教育サポーター制を導入し、教員とともに下級生の学習支援を行うシステムを構築する。	口腔保健学科	学生の学びの振り返りや実践力の強化、他者との関係を取り結ぶ姿勢を涵養するために、上級生による教育サポーター制を導入し、教員とともに下級生の学習支援を行うシステムを構築する。	本年度は短期大学2年生から4年制大学1年生に歯科保健指導を実施するなど、上級生による教育サポートを一部導入した。次年度は大学2年生から1年生に学習支援を実施できるようシステムを構築する予定である。
③低学年からキャリア意識を高め、歯科衛生士という職種への理解を深めるための支援システムを構築する（キャリア教育の充実）。	口腔保健学科	キャリア意識を3年制より一層高め、歯科衛生士という職種への理解を深めることを目的に、下記の内容を実施する予定である。 ・現状のキャリア支援システムの充実 ①外部講師を招いてキャリアコンサルティング講演を実施する。 ②従来から実施している既卒生による職場の歯科衛生業務の紹介を専門領域に分けて継続する。 ・職場体験実習（インターシップ）の実習内容の検討を企業側と進める。 ・キャリア教育充実に向けて専任教員の各種資格取得をさらに推進する。	大学においては、１年次のキャリア教育科目「学びの基礎」や、入学直後の就職ガイダンスで歯科衛生士の先輩の話を聞く会を開催し、早期に歯科衛生士のイメージを持つ事が出来たと考える。本学科ではキャリアコンサルタント有資格者である専任教員もいることから授業や担任の学生面談時等にキャリア支援を推進している。　　さらに、次年度にはキャリア教育としてワークキャリアプラニングの科目が開始され、次次年度にはインターンシップも開催されキャリア教育が本格化する予定である。　　短期大学部においては従来どおり就職委員会とキャリア支援課の共同企画である就職ガイダンスを、3年生向けを6回（内1回は、外部企業によるマナーガイダンスを実施）、2年生向けを4回（内1回は、外部の熟練したキャリアコンサルタントによる自己分析を実施）実施して進路支援を行なった。
④口腔保健研究センタと連携した口腔保健に関する多彩な知的・文化的な生涯学習の拠点を形成し、現行のリカレント教育の拡充を図るとともに、地域イノベーションの創出等、社会貢献への取り組みを推進する。	口腔保健学科	口腔保健研究センターと連携した口腔保健に関する地域イノベーションの創出への取り組みを推進する。 ①地域イノベーションの創出への取り組み拠点であると共に、学内臨地実習施設である歯科診療所の運用を開始する。併せて、ハード・ソフト両面の整備・拡充を行う。 ②口腔保健研究センターの地域貢献事業や歯科診療所業務への教員の配置状況について検証し、改善を進める。	口腔保健研究センターと連携し、本学の歯科診療所を活動拠点として、様々な口腔保健に関する地域イノベーションの創出への取り組みを実施した（詳細は口腔保健研究センターの報告に記載済み）。今年度は昨年度に加えて、一般歯科診療の開始や健康フェスタでのオーラルフレイルチェックと歯科よろず相談の再開、神戸市委託オーラルヘルス対策「健口トレーニング」事業、兵庫県・神戸市・長田区歯科医師会との連携事業、神戸大学大学院保健学研究科との連携事業、兵庫県下企業との連携などなど様々な事業を実施した。これらの業務には専任教員が従事したので、教員の業務負担について検討した。

第Ⅰ期中期実行計画	該当組織	本年度の目標と活動計画	年間活動報告及び自己評価
短期大学部 看護学科通信制課程			・
学習内容を統合する実習科目の充実を図るため実習環境の改善と臨床との意識共有を図る。	看護学科通信制課程	１．実習環境を整える １）居住地域別に学生数に見合う実習施設が確保できる。 ・　早期に実習施設の不足状況を把握する。 ・　居住地から超県をしない範囲での実習施設の確保をする。 ２．実習での学習内容の補完 １）実習内容について臨床指導者と認識が共有できる。 ・　指導者会の開催または、Webでの指導者と話し合いを行い、実習内容についての認識共有をする。 ・　臨地実習実施率が下がらないよう臨床と調整する。 ・　代替え学習内容の見直し(R4年度課程内FDのテーマとする) ・　実習のまとめの送付に対する実習施設からの意見を聴き取りフィードバックする。 ２）遠隔授業による実習スクーリング内容の充実 ・　昨年度の課程内FDで遠隔授業方法についての検討を踏まえ今年度の内容のブラッシュアップを図り、スクーリングに生かす。	１．実習環境を整える 今年度は兵庫県内の入学生が多いことから、早期より学生数とエリア別科目の受け入れ枠を俯瞰し過不足の無いよう確保出来た、また、近畿圏及び北陸ではほぼ居住地から超県をしない範囲での実習施設を確保できた。ただし、関東方面では、科目によっては実習依頼病院の不足から一部隣県での実習となったが、可能な範囲で移動距離を最短にする配慮をした。 ２．実習での学習内容の補完 臨地との実習調整は、メール・電話・Webでの指導者と話し合いを中心に施設訪問も必要に応じて実施し、認識共有を図った。見学実習においては特に大きな問題はなかったが、学生個人の問題としによって臨床で指導に困るケースが見られた。臨地実習実施率については、コロナ禍による見学実習中止施設数は、7月～10月に実施する各領域別実習では127施設中27施設で、代替学習の対象学生は、延べ587名中209名だった。実習スクーリングは８科目全て対面授業で実施出来たが、コロナ感染または、濃厚接触者となって受講できなかった学生5名6科目については、Web授業で対応した。基礎・看護マネジメント実習では、36施設中1施設のみの中止で、代替学習対象者は123名中５名。実習スクーリングは全て対面授業で実施出来た。施設からの実習中止の要請や感染予防対策内容の変更、および学生情報は、刻々と変化するため共有ホルダーに情報を入力し全員で共有できるようにした。 実習の代替学習については昨年度の実施結果及びFD内容を踏まえ、担当教員各自で改善・修正した教材を作成し送付した。さらに今年度は課程内FDとして、これまでの各看護学の「見学実習の代替学習」の実施内容の紹介をすると同時に、「見学実習の代替学習」について、全教員の教育内容の捉え方・考え方、学生観、指導観を含め、教材の具体的内容、工夫した点、困った点、その結果、どうであったかについて知ることで、授業計画立案のスキルアップを図った。 ＜自己評価・課題＞ 1回目のFD開催を各領域別実習実施前に開催することで、本年度の「見学実習の代替学習」の実施内容に生かすことができた。その成果として、実習科目の評価結果から各看護学とも到達目標が達成されていることが確認できた。□ 実習科目の充実について、実習環境の改善と臨床との意識共有については、今年度は達成できたと評価する。今後の課題としては、学生個々の学習進捗の差が大きいことに対応するために、教務と連携し実習に参加するまでの学生の学習内容を充実させるための対応を図ることであると考えている。

令和4(2022)年度　年間活動報告【B組織】

2022(令和4)年度　年間活動報告		
該当組織	本年度の目標と活動計画	年間活動報告及び自己評価
研究倫理委員会	１．教育活動を対象とした研究における学生の包括的同意に関する検討 教育活動に対するデータを活用した研究を円滑に進めるために、在学生に対する包括的同意を得るための方法について検討する。 ２．e－ラーニング教材における倫理教育の実施 新入職員に対するe－ラーニング教材を用いた倫理教育を実施する。 ３．研究情報の公開（オプトアウト）について導入の検討 研究情報の公開（オプトアウト）を活用するための、掲載方法や期間の設定について検討する。 ４．教職員および学生が行う研究に対する「人を対象とする生命科学・医学系研究に関する倫理指針」に基づいた、研究実施計画及び研究成果に関する審査 「人を対象とする生命科学・医学系研究に関する倫理指針」を確認し、教職員および学生の申請による研究計画および研究成果発表の倫理審査を施行する。加えて、学生からの申請によるものは各学科の学研委員会が審査し、研究倫理委員会に報告する。	＜自己評価・課題＞ １．教育活動を対象とした研究における学生の包括的同意に関する検討 教育活動によって取得されたデータを業務または研究に有効に活用することを目的に、在学生に対する包括的同意を得るための「教育・研究データ利活用ポリシー」が策定された。このポリシーの実施に伴い、取得したデータの研究への利用についての対応を検討した。 ２．e－ラーニング教材における倫理教育の実施 新入職員に対するe－ラーニング教材を用いた倫理教育を実施した。 ３．研究情報の公開（オプトアウト）について導入の検討 研究情報の公開（オプトアウト）を活用するための、掲載方法や期間の設定について検討を進め基本方針を取りまとめた。 ４．教職員および学生が行う研究に対する「人を対象とする生命科学・医学系研究に関する倫理指針」に基づいた、研究実施計画及び研究成果に関する審査 「人を対象とする生命科学・医学系研究に関する倫理指針」などの指針に沿って、教職員からのの研究倫理申請31件（大学24件，短大7件）について審査した。加えて、学生研究については各学科の学生研究委員会の審査ののち研究倫理委員会にて承認した。
個人情報保護委員会	1.個人情報保護委員会への新たな申請様式に関する検討 従来の書類による誓約書提出の見直し。Web申請可否の検討。 2．個人情報教育システムの導入の検討 Web、ネットワークの活用の広がりにより研究教育活動における個人情報の取扱いは重要性を増している。更に新型コロナウイルス感染における人権・個人情報取扱いの課題の顕在化など、個人情報保護に関する環境は大きく変わっている。こういった状況をふまえた効果的な研修を行う。e－ラーニング教材を含め準備を検討。	【活動報告】 １．個人情報取り扱いを学生に周知目的で、新入生個人情報取り扱い「同意書提出」を徹底した。 ２．次年度より本学アセスメントポリシーの効果的な実質化等に向け、個人情報の学前から卒業後までパネルデータとして繋ぎ、教育改善に役立てることを想定したプラン、ポリシーの検討に加わった。 ３．職員の個人情報・情報セキュリティに関する知見の底上げを目的に個人情報研修会（委員会内勉強会）を開催した。講師は三谷商事より教育機関セキュリティ事情の詳しい方をお招きした。 【自己評価】 １．新入生の「同意書提出」は、今年度教職員の努力実り提出遅れ少なくほとんどの学生から同意書が提出された。今回は早期に回収できたので当面このスタイルを継続する。 ２．新年度から実施予定のアセスメントポリシーの効果的な活用に向け、これまで本委員会で検討されてきた問題点が役立った。 ３．個人情報保護委員会勉強会にて改めて最新の「情報管理」を学ぶことができた。成果として学科、部署においてセキュリティ対策に生かせると考えられた。今後も良い教材または講師が見つかれば、全教職員を対象とした講演会を検討していきたい。 ４．民法改正に伴う成人年齢引き下げや情報化社会の新たな問題点について、今後も教職員間のスキルアップを目指しアップデートを心掛けたい。

該当組織	本年度の目標と活動計画	年間活動報告及び自己評価
ハラスメント防止対策委員会	【組織の目的】神戸常盤大学（短期大学部含む）の全教職員及び全学生が、キャンパスにおいて起こり得るあらゆる形態のハラスメント事象について認識を深め、互いの人格と人権を尊重し、教育研究機関の場にふさわしい相互理解と配慮、意思疎通に努めることによって、ハラスメントの無い快適な教育研究環境・学習環境、就労環境が確保されるよう、必要な事項について啓発・対応・審議等の活動を目的とする。 【本年度の目標】上記目標を達成するために、ハラスメントの防止及び対応について、ハラスメント防止対策委員会規程・調停委員会規程・ガイドライン及びそれに基づく対処方法等について、継続して学内へ周知徹底していく。 1．今年度は、年度当初に教職員研修会を対面にて開催し、ハラスメント防止対策(特にアカデミック・ハラスメントについて)に関する啓発を促すと共に、当委員会・委員の機動力と対応力の向上を図る。 2．新入生及び在学生のハラスメントに関する意識の向上を図る。 3．ハラスメント防止対策委員会規程・調停委員会規程・調査委員会規程・防止対策ガイドライン等に関する周知を徹底するとともに、ハラスメント相談事案が生じた際の、対応方法・守秘義務等を教職員に周知し、ハラスメント防止意識の向上を図る。 ４．ハラスメント事案に関して、当委員の適切かつ迅速な対応を可能とするために、委員の対処能力向上を図る。 【本年度の活動内容】各目標の達成に向けた活動の内容 １）新入生及び在学生に対する各学科オリエンテーション（4月）にて、リーフレット配布及び学生便覧を用いて、ハラスメント防止への意識を啓発し、本学のハラスメント防止に対する相談窓口や方策等に関する認知を促し、ハラスメント防止意識の定着を図る。 ２）ハラスメント防止対策に関する教職員への理解を深めるため、当該年度研修等を活用してハラスメント防止意識の向上を図る。 ３）当委員へ外部研修等の参加を促し、当委員の質的向上に努め、ハラスメント防止対策に関する事項について、学内教職員への還元を図る。 ４）ハラスメント防止対策委員会規程・調停委員会規程・調査委員会規程・防止対策ガイドライン等の内容に基づき、毎月1回程度の定例委員会を開催し内容検討を図る。 ５）上記以外の活動 ・各所属部署にて、ハラスメント相談員を任命された者は、学生及び教職員からのハラスメントに係る相談等に応じ、適宜当委員会へ報告する。 ・当委員会へ報告されたハラスメント事案について、守秘義務のもと、学長及び当該学科責任者へ報告し、対応策等について協議する。	＜自己評価・課題＞ 【各目標の達成に向けた活動報告】 １）2021年度に校正した「キャンパスハラスメント防止ガイド」について、学科ガイダンス時に各学年学生に対し各学科当該委員からリーフレット配布及び説明等を行い、啓発を図った。 新入生に対しては、入学時学科オリエンテーション時にリーフレット配布及び学生便覧を用いて、各学科当該委員から本学のハラスメント防止に対する相談窓口や方策等について丁寧に説明し、ハラスメント防止対策への認知と意識啓発への取り組みを行った。 また、今年度も継続して本学HPにハラスメント対応に関するガイドライン等をアップしていることを全学年学生に対して周知するとともに、ハラスメント事案が生じた場合の各学科のハラスメント防止対策委員への相談等について理解を促進した。その際、当該事案に関する守秘義務の徹底についても認知を図り、安心感と相談のし易さを促した。　２）ハラスメント防止対策に関して教職員への理解を促すために、下記研修会を対面にて開催し、特にアカデミックハラスメントに関わる認識の向上に努めた。 ・2022年4月25日（月）13：00～15：00 ・講師：横山美栄子　氏（広島大学ハラスメント相談室） ・演題：ハラスメントの概念とアカデミックハラスメントの具体的事例について ３）ハラスメント防止対策委員会規程に基づき、本年度7回の定例委員会を開催し、ハラスメント防止対策に係る検討を行った。当委員会での審議内容から必要事項を各学科教員へ周知するよう努めた。 ４）学生の読みやすさ、理解しやすさの観点から、「令和５年度　学生便覧」内の当委員会「ハラスメント防止のために」、及び当委員会リーフレット「キャンパスハラスメント防止ガイド」の内容確認及び文章校正の上、改訂した。 ５）本年度は、学生からの本案件に関わる相談（処理すべき）は０件であった。 【自己評価・課題】 ①当委員会の存在と周知は、学生にとって当該案件に関する「気軽に相談できることへの安心感」といった精神的安定や拠り所に繋がりつつある、との委員からの感想が挙げられている。本年度も処理すべき相談は０件であったことから、当委員会の取り組み及び研修等の成果の表れとも評価できる。ただし、この状況に甘んじず、啓発等に尽力していきたい。 ②これまでの数回に渡るハラスメント防止対策研修会を踏まえ、次年度以降、その内容及び質的向上を踏まえた検討をしていく必要がある。 ③当該委員会の開催について、概ね月毎の定例委員会開催を念頭に、事案発生への機動力ある対応を念頭におきつつ、即応性のある委員会体制のあり方を維持していきたい。 ④ハラスメント防止対策に関する新たな知見の収集及び委員の質的向上のために、学外研修会等への積極的な参加（本年度０件）について、参加可能な体制づくりを検討していきたい。

該当組織	本年度の目標と活動計画	年間活動報告及び自己評価
神戸常盤健康保健センター	本組織は、学生全体の健康状態や健康課題を把握し、一人ひとりの学生がいろいろな健康状態や健康課題をもちながらも健康な生活・有意義な大学生活を過ごせるように、直接学生や必要時、保護者とも関わりながら学生自身が自己に目を向け、健康課題に取り組めるように支援することを目的とする。 【本年度の目標】 1．学生全体の健康状態や健康課題を把握し、健康な生活や有意義な大学生活を過ごせるように直接学生や必要時、保護者に関わりながら学生が健康課題に取り組めるように支援する。 2．一人ひとりの学生が必要な支援が受けられるようにセンターメンバー・カウンセラー・医師教員・各委員会（実習委員会・学生委員会・キャリア委員会等）・学科長、必要時保護者も含め情報共有し連携できる体制作り 【活動内容】目標1・2についての活動内容 1．センターの業務変更による学生抗体価の不備による実習への支障が生じないように健康保健センターの役割の明確化と各学科との連携を図り学生をサポートする体制づくり。 2．学生の健康課題や不安を軽減しながら大学生活が過ごせるように、必要時、学生・保護者、学科長・担任・適任者との調整役、医師教員と連携し学生を支援する体制づくり。 3．健康診断・健康管理室利用・学生相談室利用に関する学生の情報共有・状況分析及び学科との情報共有と連携　4．2022年度　全国大学保健管理協会　近畿地方部会保健師看護師班兵庫地区研修会開催に関する検討。 .	<本年度の年間活動報告> 1）センターの業務変更に伴う各学科との調整・連携に関する活動：各学科がワクチン接種の基準を見直し学生の接種指導に取り組めるように連携した。大学で管理するワクチン接種に関する情報と各学科がワクチンガイドラインを基に接種回数決定のプロセスを明らかにして学生の接種指導に取り組めるように検討を重ねた。結果、抗体価検査結果を基準とする学科は口腔保健学科・放射線学科、抗体価検査結果基準と実習施設の条件から一部過去の接種回数を基準として用いる学科は医療検査学科。過去の接種回数を基準とし、接種回数により抗体価検査結果も基準材料として用いる学科は、看護学科・子ども教育学科に基準を決定し、2023年度から学生の抗体価検査・接種指導を各学科が実施を開始する。　2）新入生健康調査に関する業務と各学科・各教員との調整・連携、及び 3）健康診断・健康管理室利用・学生相談室利用に関する学生の情報共有分析・対応 ・2022年度健康調査で4名の学生が入学前・入学後に面談を希望し対応した。健康調査情報や面接内容は各学科長・医師教員へ情報提供した。また、健康管理室利用件数年間延べ76件（男子学生：16件・女子学生60件）緊急対応の学生1名、自宅への帰宅サポートを要した学生1名、学生相談室利用件数年間延べ107件であった。頭痛・腹痛・演習による気分不快や試験・学修状況による緊張やストレス等、様々な内科的症状や心理的状態により学生は健康管理室・学生相談室を利用するため、柔軟に学生の心身をサポートした。さらに学科教員とセンター担当者間で学生の情報共有と学生対応について連携する等コンサルテーションの場としての役割を担った。 4）2022年度　全国大学保健管理協会 近畿地方部会 保健師看護師班兵庫地区研修会開催に関する検討 ・12月8日（木）13時から16時zoom研修会開催。大学生の生活に焦点をあて、塩谷英之学部長による「健康は規則正しい生活リズム、良い睡眠から」　口腔保健学科 山城圭介教授による「歯周病と全身の関わり」の２題を講演内容に開催した。当日の出席者57名　無事に研修会を終了した。　5）学生の健康の維持・促進に関する働きかけ　・本館4階ハローホール・すこラボ前に白板を設置し、コロナ感染情報・季節や学生行事に関連した健康に関するトピックスを用いて、学生の健康に関する意識や注意喚起に働きかけた。 <自己評価・課題> １）今年度から学生の抗体価検査・接種指導が各学科で実施するが、学生が困らないように連携しながら学科の運用をサポートする。2）多様な学生の背景から、学生の情報提供後、どのような連携やサポートができるか、さらに個別の対応・検討を要すると考える。次年度の課題として取り組む。
すこラボ (健康生活研究所)	「すこラボ（健康生活研究所）」は、わが国の重要な健康課題について本学保健科学部の4つの学科で協働して取り組み、健康増進に役立つ情報の発信、研究、そしてその成果を教育に活かしていくことを目的とした施設として、令和３年４月に開設された。令和４年度の目標および活動計画は以下である。 １．本年度の目標 昨年度３回実施したすこラボ講座は、全体的に高評価で、高齢者や医療従事者、高校生など幅広い層からの視聴があった。本年度も引き続きすこラボ講座を実施し、健康増進に役立つ情報の発信を行っていく。また、知見の教育への活用のために、すこラボライブラリーの運用を進めていく。さらに、研究活動を推進していく。 ２．本年度の活動計画 １）すこラボ講座の実施 今年度は「フレイル」をテーマに講座を行う。第1回は「オーラルフレイル」をテーマに7月下旬、第2回は「運動（ロコモ）とフレイル」について11月に配信を予定している。 ２）すこラボライブラリーの運用 昨年度行った「糖尿病」に関するすこラボ講座（８回分）の動画を講演ごとのアーカイブとして残し、学生指導の教材や高校に対する紹介動画などに活用できるよう、YouTubeを媒体としたライブラリーとして運用する予定である。 ３）研究活動について これまでの研究成果をまとめて海外学術誌に投稿する。	１．本年度の活動報告 １）定例委員会の開催（計10回） ２）すこラボ講座開催 本年度は、我が国の重要な健康課題である「フレイル」をテーマに掲げ、保健科学部の5名の教員が協働して2回の講座を実施した。 第一回「健康寿命を延ばすために」～オーラルフレイルを防ぐ～ 講師：口腔保健学科 福田昌代教授、同学科 澤田美佐緒講師、看護学科 阿児馨講師 配信期間：2022年8月10日（水）～24日（水） 視聴回数：一般視聴85回（延べ数）、学内視聴43回（延べ数） 第二回「ロコモ、サルコペニアとは？」～予防するために、栄養および運動について～ 講師：医療法人関田会ときわ病院 井上陵理学療法士、医療検査学科 大澤佳代教授 配信期間：2023年3月10日（金）～24日（金） 視聴回数：一般視聴80回（延べ数）、学内視聴31回（延べ数） ３）すこラボライブラリーの運用 昨年度開催した糖尿病についての３つの講座と、本年度のフレイルについての２つの講座合わせて延べ13本の糖尿病およびフレイルに関する教材が作成された。すこラボ開設目的のひとつである「成果を教育に活かす」ため、すこラボライブラリーを運用し、教員へ資料として開放している。データの管理と貸し出しはIR推進室が行っている。今年度第一回の講座は、口腔保健学科においてリカレント教育の教材として活用予定である。 ４）すこラボにおける共同研究について 　神戸大学保健学科と神戸常盤大学保健科学部との連携・協力に関する協定書が令和５年度５月に締結される。具体的内容は本学口腔保健学科との連携による認知症予防プログラムと、すこラボとの連携による生活リズムと健康に関する研究である。今後もすこラボ自身あるいはすこラボが媒体となって様々な共同研究を締結していく予定である。 ２．自己評価 第一回、第二回すこラボ講座に関しては、医療従事者を含めた多くの視聴者から高い評価を得た。次年度も４科で協働して健康増進に関する情報発信を行っていく。そして、今年度はすこラボと神戸大学との共同研究が具体化した。次年度はこの共同研究を着実に進めていく。

該当組織	本年度の目標と活動計画	年間活動報告及び自己評価
教職支援センター	【本年度の目標】 教員採用試験受験者の一次試験合格率60パーセント、最終合格者30パーセント以上を目指す。 【本年度の活動計画】 1．一般・教職・専門教養の学力を強化する ・教職支援センター事務室による「学力把握テスト」を実施し、その解説も行う。 ・東京アカデミーによる「教職・教養対策講座」、「基礎力養成講座」、「論作文・面接・討論対策講座」を実施する。 ・「定例学習会」、「弱点フォロー勉強会」、「春季集中学習会」、「春季セミナー」等の採用試験対策を実施する。必要に応じてLMSマナバを活用し、遠隔実施を行う。 ・自主学習会（E4面接指導、E3一般教養）を実施する。 ２．実技試験対策を実施する ・　専門教養「実技試験」直前対策を実施する（体育実技・音楽実技） ・　春季セミナーの中で基礎技能の定着を図る（体育実技） ３．学びの常盤風土を促進する（含：異学年・異学科交流） ・　「養護教諭合格者座談会」、小学校教諭「先輩激励訪問会」を実施する。課程内・外においても異学年、異学科交流の機会を設ける ４．子育て支援施設KITにおける活動をカリキュラム内に位置づけ、小学校教諭としての自覚を喚起し、実践力の養成を図る ・　カリキュラム内にKITにおける実習を位置づけ、実施する	１． ・「学力把握テスト（兵庫県・神戸市・大阪府の傾向を踏まえた出題）」を年 3 回実施及び解説 ・東京アカデミーによる「教職教養対策講座」、「基礎力養成講座」、「論作文・面接対策講座（6コマから10コマへ拡大、教育時事の指導を含む）」を実施 ・「定例学習会」、「夏季弱点フォロー勉強会」、「自主学習会」、「春季セミナー」、「春季集中学習会」等の採用試験対策を実施 ・教員採用試験対策講座（EN1対象）遠隔学習コンテンツを作成し、manaba にて実施 ・4/3（日）4/4（月）自治体別模試を実施 ・11/10（木）「学内スタート模試」（EN3 EN4（希望者）対象）を実施 ・1/5（木）「全国公開模擬試験」（EN3 対象）を実施 2. ・専門教養実技試験直前対策講座（体育実技）を 6/17（金）、7/1（金）、7/15（金）に実施 ・音楽は個別指導で実施 ・春季セミナー「体育実技」を2/17（金）、2/28（火）に実施 3. ・4/24（日）「養護教諭合格者座談会」を実施。卒業生も含め7名が参加（在学生5名、卒業生2名）。 ・「先輩激励訪問」を実施。8/7（日）は岡山市・神戸市対策。5名が参加。8/11（木）は兵庫県対策。10名が参加。 ・10/31（月）「受験対策説明会」（E3 対象）を実施。8名が参加。 ・11/18（金）「小学校教諭合格者座談会」を実施。３２名が参加。 ・11/24（木）「岡山市教員募集説明会」をオンラインで実施。7名が参加。 ・12/15（木）「川崎市教員募集説明会・採用予定者相談会」を実施。E3　2名、E4　4名が参加。 ・2/6（月）「小学校教員採用試験対策説明会」（E2 対象）を実施。19名が参加。 4. ・「基礎研究演習Ⅰ」（1年必修科目）、「基礎研究演習Ⅱ」（2 年必修科目）、「保育教育課題研究Ⅱ」（3 年必修科目）において、KIT 内で実践学修を行い、小学校教諭としての自覚を喚起した。 ＜自己評価・課題＞ 　本年度は正規の小学校教諭として、兵庫県（4名）、神戸市（6名）、大阪市（1名）、川崎市（4名）、横浜市（1 名）、千葉県（1名）、東京都（1名）、岐阜県（1名）、鳥取県（3名）、愛媛県（1名）、福岡県（1名）、福岡市（1名）、長崎県（1名）において、のべ 26名（うち 7名は既卒生）が採用され、現役生は教員志望の学生20名のうち14名が正規の教員として採用された。大学推薦枠を活用して、 6名が正規採用された（神戸市に 2 名、川崎市3名、愛媛県1 名の計 6 名を大学推薦）。養護教諭の採用試験には、過年度生１名が、神戸市に採用された。 　本年度の目標として掲げた教員採用試験受験者の一次試験合格率60パーセント（本年度は80%）、最終合格者30%（本年度は70%）以上はともに達成することができた。2017年度に策定した中・長期目標として、2桁の公立学校教員合格者を輩出できる体制を構築することを掲げていたが、今年度は新卒20名の教員採用試験受験者のうち、最終14名（複数合格者は除く）が合格し、初めて目標を達成することができた。 　今年度の成果の要因として次の4点を挙げる。①今年度の受験生は教職に求められる個々の資質・能力（学力・人間性等）が豊かであった。②協調的な態度で仲間と連帯して課題に取り組む姿勢が見られた。③学科と教職支援センターとの役割の分担や連携・支援体制が概ね機能した。④兵庫県を除く多くの自治体で受験者数の減少や採用人数の拡大により最終倍率が低下し、広き門となった。 　課題としては、今年度は神戸市の倍率が例外的に半減したが、本学の学生が多く受験する兵庫県、神戸市は今後も倍率低下が望みにくい自治体であるので、学力の強化が求められる。その対策を継続していかなければならない。2次試験突破には小手先の対策だけでは難しい。面接では豊かな人間性や柔軟な対応力・思考力・表現力、そして教職に就こうという意欲が求められる。それらを醸成する指導を継続していかなければならない。最後に大学推薦の特例措置選考区分での受験形態を学生に周知し、受験の幅を広げさせる情報提供も行っていかなければならない。

該当組織	本年度の目標と活動計画	年間活動報告及び自己評価
口腔保健研究センター	１．地域住民並びに職員・学生の口腔健康を維持・増進するために地域社会活動を充実する。 １）地域貢献事業部と連携して口腔保健活動に参加する。 ・はすいけ介護予防教室講演会（２回程度）を行う。 ・歯科相談（歯ッピー相談会）（KIT・もとろく施設・ノエビアスタジアム）を年間20回行う。 ・地域ボランティア活動（地域委員と協業、学生ボランティア活動）を行う。 ・KOBETOKIWA健康ふれあいフェスタへ参加する。 ・歯科医師会と連携できる体制を構築する。 ２）歯科健診活動を行う。 ・学園内ならびに学外での活動を年間3回以上実施する。 ３）兵庫県委託事業を協力し、「大学生による大学生のためのオーラルヘルスアッププロジェクト」の実施 ２．新歯科診療所の立ち上げと機能化による研究体制の構築 １）新歯科診療所で保険診療活動を行う。（年間延べ人数200人以上） ２）入学時大学歯科健診を実施し、その結果を公表する。 ３）「口腔の健康を自ら管理できる口腔に自信のある学生を育てる」ことを理念として、入学時歯科健診の結果を踏まえた、歯科治療の推進と口腔衛生管理の継続のための呼びかけを実施する。 ４）学生実習後の二次利用（継続利用促進）を促す。 ３．リカレント教育における口腔保健研究センターの役割の明確化をはかる １）リカレント教育の実践の場として、診療所利用に向けて利用項目を検討する。 ２）修了生に継続的な案内等を行う。	１．地域住民並びに職員・学生の口腔健康を維持・増進するために地域社会活動として以下の活動を行った。 １）地域社会活動 ・はすいけ介護予防教室講演会を２回（8/23、11/20）を実施した。 ・歯科相談（歯ッピー相談会）（KIT・もとろく施設・ノエビアスタジアム）を年間20回118名に実施した。 ・10/9　KOBETOKIWA健康ふれあいフェスタで歯科よろず相談室を開催した（17名利用）。 ・歯科医師会と連携：長田区歯科医師会が参加したまちの文化祭（神戸市）（11/27）に学生ボランティアを2名派遣した。 ・太陽刷子からの要請で11月から毎月2名の学生ボランティアが参加（のべ10名）した。 ・神戸市委託オーラルヘルス対策「健口トレーニング」事業を歯科診療所で実施(3月初旬)、20名の市民が受診した。 ２）歯科健診活動：新入生への歯科健診：（4/5・6・7）432名、神戸常盤女子高：（4/19・21）751名、神戸常盤大学附属ときわ幼稚園：（6/21）29名、立花うるま幼稚園（尼崎）：（6/10）37名に実施した。 ３）11/3　「兵庫県歯及び口腔の健康づくり推進大会」でのOral Health Up Project 活動報告を行った。 ２．新歯科診療所の立ち上げと機能化による研究体制の構築 １）新歯科診療所で保険診療活動を行い、「口腔の健康を自ら管理できる口腔に自信のある学生を育てる」ことを理念に、歯科健診や学生実習後の二次利用（継続利用促進）を促した。 ・診療実日数210.5日、年間延べ利用者数：新患231人、再診841人、計1082人(内　学生利用272人、教職員146人、一般664人))、平均5.1人/日利用となった ・新規パンフレットの作成した。 ２）歯科診療所の学生実習利用は、のべ681名であった。「染色によるブラッシング指導の効果」については研究結果の報告を予定している。 ３．リカレント教育における口腔保健研究センターの役割の明確化 １）リカレント教育の実践の場として、歯周疾患管理コースを4名履修した。 ２）次年度案内を修了生および兵庫県歯科衛生士会、長田区歯科医師会などに行った。 ＜自己評価・課題＞ 概ね達成できた。課題として、より地域に貢献できる研究課題をもって内外に発信すること、また、臨床的データを得るためにも、安定的患者数の確保ならびに施設の充実化が挙げられる。

該当組織	本年度の目標と活動計画	年間活動報告及び自己評価
子育て総合支援施設KIT	１．開設5 年目を迎え、事業の開催回数に関しては一定の水準に達しているので、活発な運営を行い、より地域のニーズに沿った開催を目指すなど、質の面でのさらなる向上を目指す。 ・新型コロナウィルス感染症の流行が下火になりつつも今だ続いており、事業実施にあたっては、昨年度同様、慎重な運営が求められている。本年度も安全面への配慮を念頭に置きつつ、予約制・時間入替制を効果的活用し、地域のニーズに応じた内容で事業を実施する。 ２．昨年度、ノエビアスタジアム神戸内に「ときわんノエスタ」が開設し、今年度より「ノエスタ」には新しい主任が着任し、 「クニヅカ」、「モトロク」を含むすべての施設が連携し、活動出来る状況が整ったので、合同イベントを開催したい。 ・人的資源に関して、専任職員・施設スタッフとともに、大学の人的資源の活用も模索して、それぞれの特性を活かした運営を行う。 ３．利用者数に関しては、一定の水準に達しているので、本年度は満足度のさらなる向上等を目指す。 感染対策の予約・入替制度の中で、利用者の満足度を向上させるために、より精選された内容での事業実施を目指す。 ４．運営コストも含め、本施設が安定的に運営できる体制の構築を目指す。同時に、施設の存在意義を高める取り組みを実施して、経費をかけることの意味を高める。 各種の補助金・助成金等の活用も模索して、可能な限り運営に必要となる経費を外部から獲得することを目指す。また、大学本体との連携を深めて、教育・研究拠点としての存在価値を高める。そうした取り組みを通じて、受験生に施設の存在意義を訴求して、受験者数の増加に繋げ、すべてステークホルダーからの認知度を高める。 ５．中長期にわたって取り組む課題 ◎外国にルーツを持つ子供たちも含め、地域の子どもたちの学びの拠点や子育て支援、地域支援の拠点として位置付ける。 　本年度よりKICCと連携し、外国にルーツを持つてらこや利用児童への日本語支援がスタート、継続して実施可能な 　事業となることを目指す。 ◎真に生きた知識・スキルの修得を目指す本学の医療系・教育系、全学生の学びのフィールドとして位置付ける。 ◎本施設で実施する学童や未就園児・保護者に対する教育や子育て支援に関する事業、地域支援に関する事業を、本学教員の研究対象やリカレント講座の場として位置付ける。	【ときわんクニヅカ】 ◎年間延べ利用者人数：13,312人　/　◎開園日数：237日　/　◎1人平均利用者数：56.17人 ◎学生受け入れ延べ人数（ボランティア含む） 　口腔保健学科：231人 　看護学科：68人 　こども教育学科：63人 【てらこやクニヅカ】 ◎年間延べ利用者人数：2,611人　/　◎開講回数：201回　/　◎1人平均利用者数：12.99人 ◎ボランティア参加者（本学学生含む）：611名 ※KICCとの連携事業への参加児童延べ419人 【ときわんモトロク】 ◎年間延べ利用者人数：6,584人　/　◎開園日数：234日　/　◎1人平均利用者数：28.14人 ◎学生受け入れ延べ人数（ボランティア含む） 　口腔保健学科：82人 　看護学科：15人 　こども教育学科：20人 【ときわんノエスタ】 ◎年間延べ利用者人数：6,152人　/　◎開園日数：225日　/　◎1人平均利用者数：27.34人 ◎学生受け入れ延べ人数（ボランティア含む） 　口腔保健学科：127人 　こども教育学科：33人 【てらこやノエスタ】 ◎年間延べ利用者人数：563人　/　◎開講回数：102回　/　◎1人平均利用者数：5.52人 コロナ禍ということもあり、昨年度に引き続き、予約制・時間入替制を取っていたが、利用者数は、順調に増加したと考えている。 また、多くの学生を授業や実習で受け入れることが出来たことは嬉しい反面、スタッフたちの負担増は心配である。

該当組織	本年度の目標と活動計画	年間活動報告及び自己評価
ライフサイエンス研究センター	１．生命科学研究、特に本学における唯一の遺伝子組換え設備を有するセンターとして、分子生物学研究、細胞生物学研究等を推進するための研究環境整備を行う。 ・必要備品・設備のリストアップを行う ・共通消耗品の利用状況共有システムの改善を行う。 ２．生命科学関連分野の研究者（特に若手・学位取得を目指す者）への研究支援を行う。 ・ベクター、遺伝子発現コンストラクト、細胞株等の（共有可能なものに関して）共有システム構築を行う。 ・各種機器使用法、解析方法の共有システム構築を進める。 ３．センター内外との共同研究の推進を図る。 ・昨年度に引き続きセミナーを開催し、研究関連情報の共有を図る。	１．ライフサイエンス研究センター（LSC）の研究環境整備 ・必要機器として、経年劣化しているクリーンベンチの更新と、解析ソフトのリストアップを行い、これらを次年度備品として申請を行うこととした。 ・グローブ、エタノール等の共通消耗品の納品場所を発注時に共有するようにした。 ２．研究支援体制の確立 ・次年度にLSCを利用する新規プロジェクトが始まり、プロジェクト関連機器の設置場所が必要になることから、ベンチスペースの配分、現有機器の設置場所の変更を行った。 ３．共同研究の推進 ・将来的な共同研究推進を目標に、本センターの現在のアクティビティ調査を行い、ユーザー間で共有を行った。 現在進行中の研究テーマ 「マクロファージを標的とした輸血後鉄過剰症治療薬の探索」「FIV感染ネコ末梢血リンパ球に対する抗体依存性細胞傷害作用について」「CAR（Chimera Antigen Receptor）-T療法を妨げるｻｲﾄｶｲﾝｽﾄｰﾑに関する研究 」「 フィブリノゲン生合成分泌制御機構に関する研究」「敗血症マーカープレセプシンの産生機序の解明」「保育施設におけるオムツ処理規定モデルの構築 、薬剤耐性淋菌の遺伝学的解析」「歯周病原細菌が誘発する炎症応答におけるフラボノイドの作用機序解明」「各種検体からのウイルスなど微小物質の高効率濃縮/回収法の開発」「Direct (RT)-PCR用酵素/反応液の改良、それらを組み合わせた検出キットの開発」「新規熱帯疾患コントロールツールの開発」 論文発表：英文1報　和文2報 学会発表：国内学会　３報 獲得研究費：科研費　10件（研究代表者６　研究分担者4）　その他の研究費　1件 特許：1件 ＜自己評価・課題＞ １．ユーザー間で、より汎用性が高く、また必要性が高い機器のリストアップを行った。次年度も同様に優先順位をつけ、LSC機器の整備を進めていく。 ２．次年度からLSCを利用する新規プロジェクトへの調整に時間がかかった。LSCユーザー全員に資するように、スペースの有効活用をさらに進めていく。 ３．本年度は日程の確保等が難しく、LSC研究セミナーを開催できなかったが、センター内外での共同研究の推進を図るために、次年度は日程調整を早めに行い開催を目指す。
事務局	１．新型コロナウイルス感染症への適切な対応を講じた大学運営を図る ２．事業計画に基づく新規事業の確実な履行	１．新型コロナウイルス感染症への適切な対応を講じた大学運営を図る 令和４年度における新型コロナウィルス感染症への対策については、新型コロナウィルス対策本部を中心に蓄積された情報やこれまで執ってきた対応を深化させ大きな混乱を生じさせることなく対応できたと評価する。学内に設置されているPCR検査センターを活用し、実習前・学外活動における特殊ケースを対象にPCR検査を実施することにより、学内クラスターの発生抑止のみならず実習先等における本学学生からの感染防止に努めることができた。また、神戸市内における感染ピーク時においても、学内での集団感染を阻止し、各科目における不開講等といった事態に陥ることなく適切に授業運営を行えた。なお、一部の実習科目においては学内での実習に切り替えての措置となったが、学科教員の尽力により十分な教育を担保することができた。 事務局各課室においては、新型コロナウィルス感染症の影響により制約を受けた活動が続いたが、感染症によって大きく大学運営にとっての支障がでないように善処できたと評価する。 ２．事業計画に基づく新規事業の確実な履行 ①コンビニエンスストアの開設、②ときわんホールの設置（カルティベの移設）、③歯科診療所のリニューアルに伴う保険診療開始、④保護者のためのオープンキャンパスの４点について履行することができた。とりわけ、保護者のためのオープンキャンパスについては毎年実施の事業として充実を図りたい。

2022年度（令和4年度）

学科	学年	基礎データ 入学者数	在籍者数	退学者数	休学者数	留年者数	卒業者数
M科	1年	97	98	0	3	0	—
	2年	87	83	2	0	0	—
	3年	86	80	2	1	0	—
	4年	79	87	0	6	7	80
	計	349	348	4	10	7	80

休退学等の理由：進路変更等

目標資格取得状況

臨床検査技師	人数/率	細胞検査士	人数/率		
受験者	80	受験者	12		
合格者	74	合格者	12		
合格率	92.5%	合格率	100.0%		

備考：

卒業後の進路

	人数	割合（率）
就職内定者	73	91.3%
進学者	2	2.5%
その他		

備考：

卒業年次累積GPA平均：2.56

学科	学年	基礎データ 入学者数	在籍者数	退学者数	休学者数	留年者数	卒業者数
R科	1年	88	88	1	0	0	—
	2年	85	85	7	1	0	—
	3年	86	78	3	1	0	—
	4年	—	—	—	—	—	—
	計	259	251	11	2	0	0

休退学等の理由：進路変更、学習意欲の低下等
その他身分変更者数：2年1名

目標資格取得状況

受験者		受験者		受験者	
合格者		合格者		合格者	
合格率		合格率		合格率	

備考：

卒業後の進路

	人数	割合（率）
就職内定者	—	—
進学者		
その他		

備考：

卒業年次累積GPA平均：

学科	学年	基礎データ 入学者数	在籍者数	退学者数	休学者数	留年者数	卒業者数
O科	1年	67	67	1	0	0	—
	2年	79	77	0	0	0	—
	3年	77	80	1	3	5	74
	計	223	224	2	3	5	74

休退学等の理由：進路変更、学習意欲の低下

目標資格取得状況

歯科衛生士	人数/率		人数/率		人数/率
受験者	74	受験者		受験者	
合格者	73	合格者		合格者	
合格率	98.6%	合格率		合格率	

備考：

卒業後の進路

	人数	割合（率）
就職内定者	67	90.5%
進学者	2	2.7%
その他		

備考：

卒業年次累積GPA平均：2.66

学科	学年	基礎データ 入学者数	在籍者数	退学者数	休学者数	留年者数	卒業者数
N科	1年	94	94	0	0	0	—
	2年	87(2)	85	2	0	0	—
	3年	81(1)	83	2	0	0	—
	4年	83	87	1	5	7	78
	計	345	349	5	5	7	78

休退学等の理由：進路変更、心身耗弱
その他身分変更者数：4年1名

目標資格取得状況

看護師	人数/率	保健師	人数/率	養護教諭	人数/率
受験者	76	受験者	19		
合格者	71	合格者	16		
合格率	93.4%	合格率	84.2%		

備考：

卒業後の進路

	人数	割合（率）
就職内定者	73	93.6%
進学者	1	1.3%
その他		

備考：

卒業年次累積GPA平均：2.51

学科	学年	基礎データ 入学者数	在籍者数	退学者数	休学者数	留年者数	卒業者数
E科	1年	89	89	0	0	0	—
	2年	85	83	3	0	0	—
	3年	96	94	1	1	0	—
	4年	94	89	1	0	4	84
	計	364	355	5	1	4	84

休退学等の理由：学習意欲の低下、心身耗弱等
その他身分変更者数：2年1名

目標資格取得状況

幼稚園教諭	人数/率	小学校教諭	人数/率	保育士	人数/率
取得者	51	受験者	29	取得者	52

備考：
公立小学校(正規)14名
公立小学校（非正規）4名
公立保育園(正規)7名

卒業後の進路

	人数	割合（率）
就職内定者	83	98.8%
進学者	0	0.0%
その他		

備考：

卒業年次累積GPA平均：2.97

学科	学年	基礎データ 入学者数	在籍者数	退学者数	休学者数	留年者数	卒業者数
CCN	1年						
	2年						
	計	0	0	0	0	0	0

休退学等の理由：

目標資格取得状況

新卒	人数/率	既卒	人数/率		
受験者		受験者			
合格者		合格者			
合格率		合格率			

備考：

卒業後の進路

	人数	割合（率）

備考：

卒業年次累積GPA平均：

保健科学部　医療検査学科　学生による授業評価アンケート集計結果

表1　医療検査学科の実施率・回答率

	アンケート対象科目数（①）	アンケート実施科目数（②）	**科目実施率** ②÷① ×100(%)	②の履修登録者数（③）	③の回答者数（④）	**学生回答率** ④÷③ ×100(%)
医療検査学科	109	102	**93.6**	7771	6108	**78.6**
総　計	661	599	**90.6**	34964	24695	**70.6**

表2　医療検査学科の項目別平均値

カテゴリー	問	設　問	平均値
Ⅰ 学生自身	3	この授業への出席状況は？	4.73
	4	この授業に関連して、授業以外に学習した時間。（授業 1 回あたりの平均時間）	3.23
	5	この授業に意欲的に参加した。	4.30
Ⅱ 授業内容	6	授業の到達目標がシラバスや授業でわかりやすく示された。	4.28
	7	毎回の授業内容はよくまとまっていて、よく理解できた。	4.22
	8	授業は知的関心や好奇心を起こす内容であった。	4.23
Ⅲ 授業方法	9	聞きやすい話し方だった。	4.20
	10	板書、スライド、教材などの使い方は、わかりやすく適切だった。	4.23
	11	授業の進行速度は適切だった。	4.22
	12	学生の質問や意見への対応が十分になされていた。	4.28
Ⅳ 学習成果	13	自分にとって新しい考え方・発想を得ることができた。	4.28
	14	授業で扱った分野に対する基本的な知識を得ることができた。	4.34
	15	自分で調べ、考える姿勢が身についた。	4.22
Ⅴ 総合評価	16	この授業を受けて満足している。	4.29
学科別質問項目	17	【実習科目】レポートや課題などのチェックは適切だった。	4.40
	18	【実習科目】器具・備品・試薬などの準備は適切だった。	4.38
	19	【実習科目】スタッフの補助・対応は適切だった。	4.36
記述式項目	①	この授業でよいと思った点があれば書いてください。	
	②	この授業で改善すべきだと思った点があれば書いてください。	
	③	教室、教育設備等で改善すべき点があれば書いてください。	

問1は所属学科，問2は学年のため表からは省略。

問3以降の選択式項目について，次に示す5件法で回答を求めた。

問3　5:すべて出席，4:1回欠席，3:2回欠席，2:3回欠席，1:4回以上欠席

問4　5:2時間以上，4:1～2時間，3:30分～1時間，2:30分未満，1:0時間

問5～　5:そう思う，4:どちらかと言えばそう思う，3:どちらでもない（ふつう），2:どちらかと言えばそう思わない，1:そう思わない

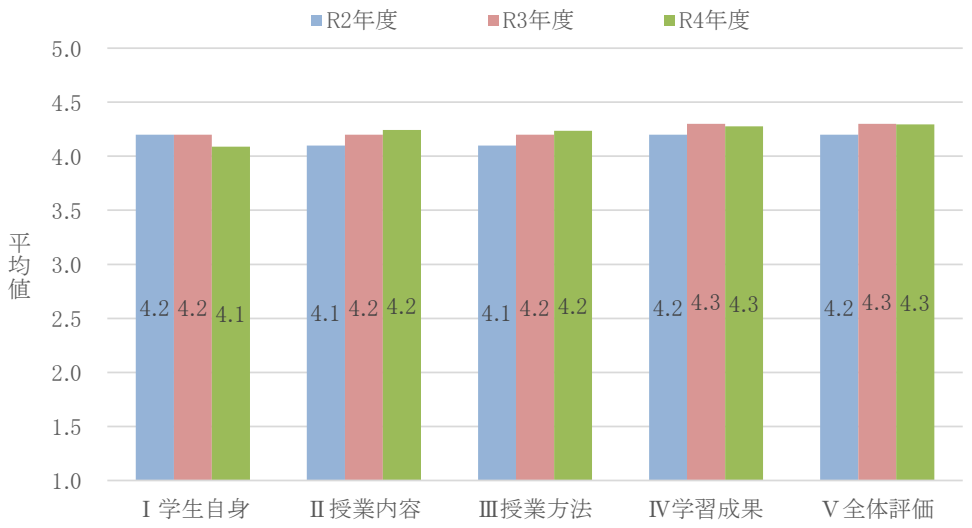


図1　医療検査学科のカテゴリー別平均値年次推移

2022 年度　保健科学部　医療検査学科　卒後アンケート

１．対象

令和4年3月に卒業した卒業生91名

２．回収率

	発送数	回答数	回収率(%)
令和 4 年度	91	52	57.1
令和 3 年度	72	41	56.9
令和 2 年度	86	69	80.2

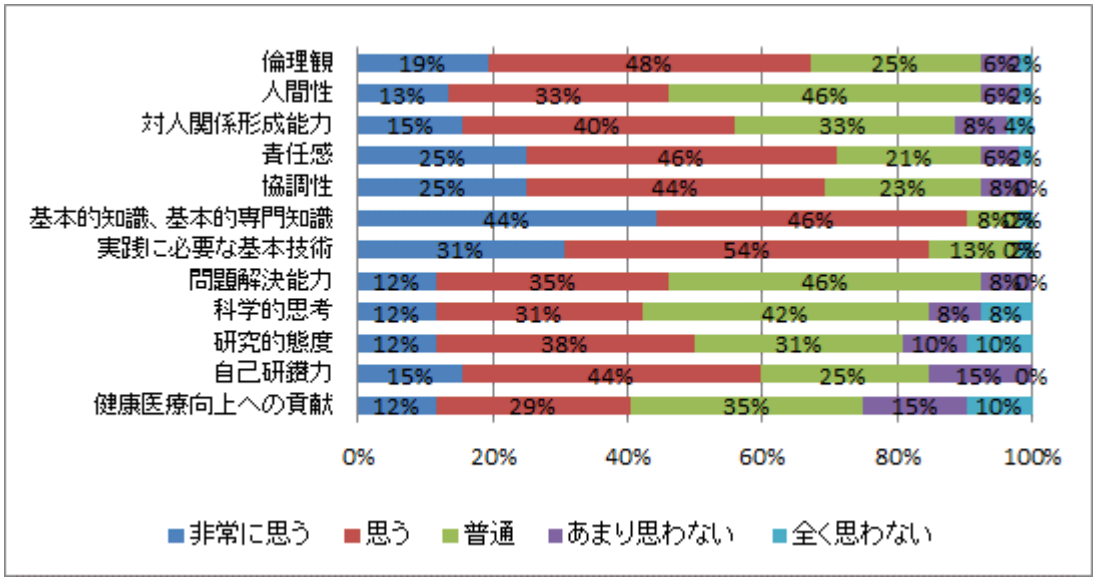
３．調査結果

● 卒業後の進路

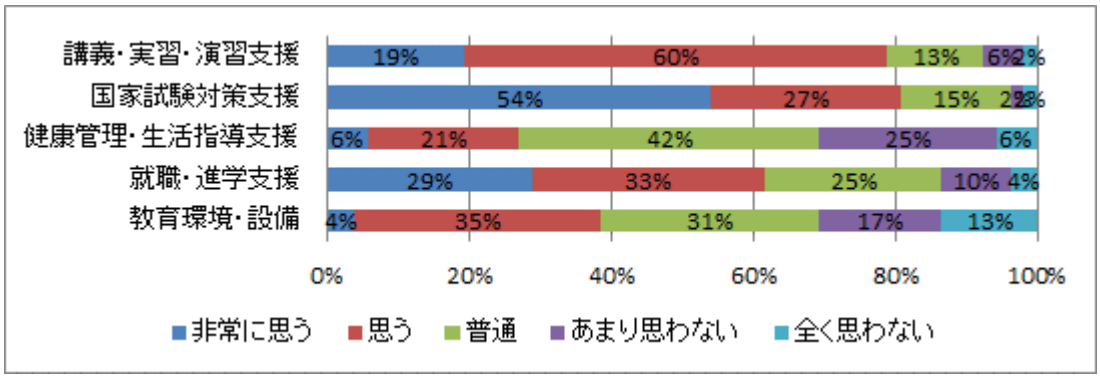
私立病院	27
国公立病院	10
健診センター	4
検査センター	3
大学病院	2
クリニック（一般）	1
クリニック（生殖補助医療）	1
大学	1
製薬関連企業	1
食品検査関連企業	1
進学（大学院・他の大学・専門学校）	1

● ディプロマポリシー（DP）に対する自己評価

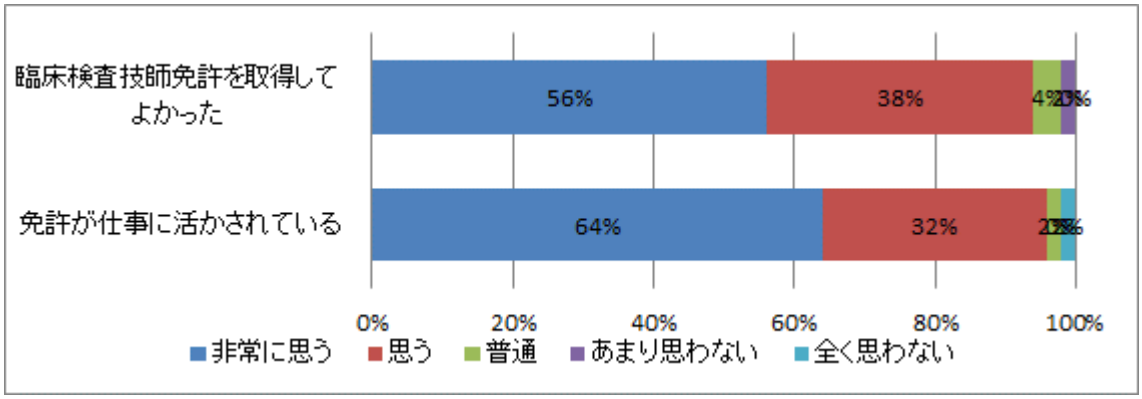
大学での学修や学生生活を通じて、以下のDPを身につけることができたか。



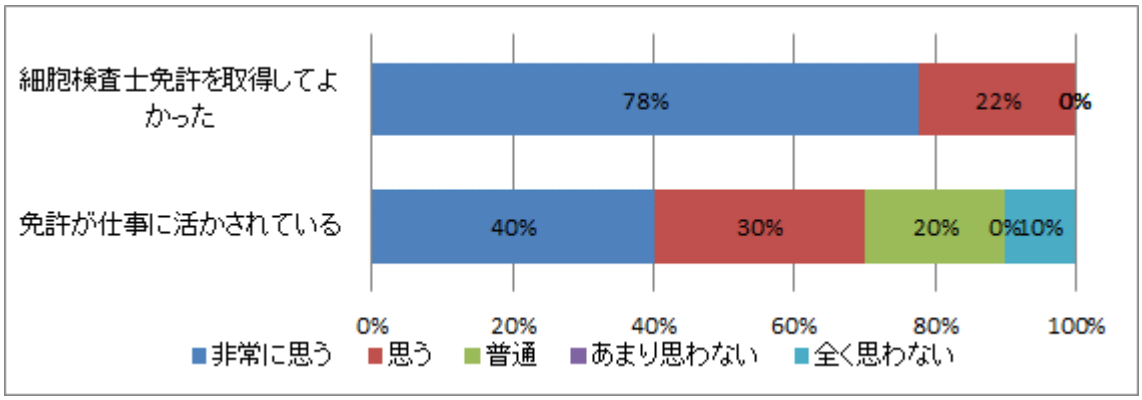
● 本学の各種支援に対する満足度



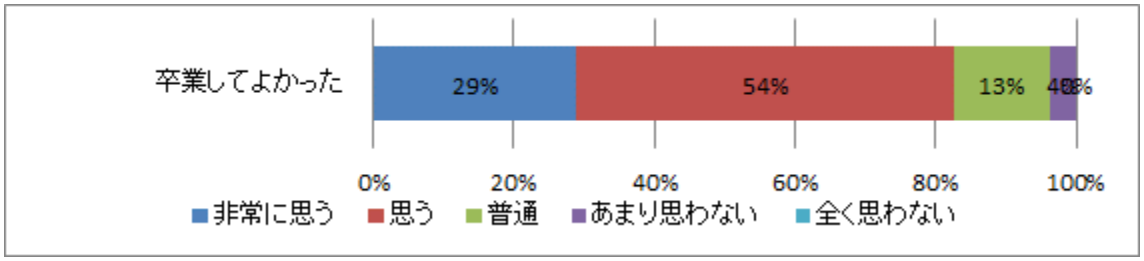
● 臨床検査技師免許を取得しての満足度（免許取得者のみ対象）



● 細胞検査士認定資格を取得しての満足度（資格取得者のみ対象）



● 総合評価：学生時代を振り返って、本学医療検査学科を卒業して良かったか。



保健科学部　診療放射線学科　学生による授業評価アンケート集計結果

表1　診療放射線学科の実施率・回答率

	アンケート対象科目数（①）	アンケート実施科目数（②）	科目実施率 ②÷① ×100(%)	②の履修登録者数（③）	③の回答者数（④）	学生回答率 ④÷③ ×100(%)
診療放射線学科	73	69	**94.5**	5209	3686	**70.8**
総　計	661	599	**90.6**	34964	24695	**70.6**

表2　診療放射線学科の項目別平均値

カテゴリー	問	設　問	平均値
Ⅰ 学生自身	3	この授業への出席状況は？	4.52
	4	この授業に関連して、授業以外に学習した時間。（授業 1 回あたりの平均時間）	3.19
	5	この授業に意欲的に参加した。	4.34
Ⅱ 授業内容	6	授業の到達目標がシラバスや授業でわかりやすく示された。	4.30
	7	毎回の授業内容はよくまとまっていて、よく理解できた。	4.26
	8	授業は知的関心や好奇心を起こす内容であった。	4.28
Ⅲ 授業方法	9	聞きやすい話し方だった。	4.27
	10	板書、スライド、教材などの使い方は、わかりやすく適切だった。	4.25
	11	授業の進行速度は適切だった。	4.29
	12	学生の質問や意見への対応が十分になされていた。	4.33
Ⅳ 学習成果	13	自分にとって新しい考え方・発想を得ることができた。	4.31
	14	授業で扱った分野に対する基本的な知識を得ることができた。	4.35
	15	自分で調べ、考える姿勢が身についた。	4.25
Ⅴ 総合評価	16	この授業を受けて満足している。	4.36
学科別質問項目	17	【実習科目】レポートや課題などのチェックは適切だった。	4.30
	18	【実習科目】装置・器具・備品などの準備は適切だった。	4.28
	19	【実習科目】教員の補助・対応は適切だった。	4.28
記述式項目	①	この授業でよいと思った点があれば書いてください。	
	②	この授業で改善すべきだと思った点があれば書いてください。	
	③	教室、教育設備等で改善すべき点があれば書いてください。	

問1は所属学科，問2は学年のため表からは省略。

問3以降の選択式項目について，次に示す5件法で回答を求めた。

問3　5:すべて出席，4:1回欠席，3:2回欠席，2:3回欠席，1:4回以上欠席

問4　5:2時間以上，4:1～2時間，3:30分～1時間，2:30分未満，1:0時間

問5～　5:そう思う，4:どちらかと言えばそう思う，3:どちらでもない（ふつう），2:どちらかと言えばそう思わない，1:そう思わない

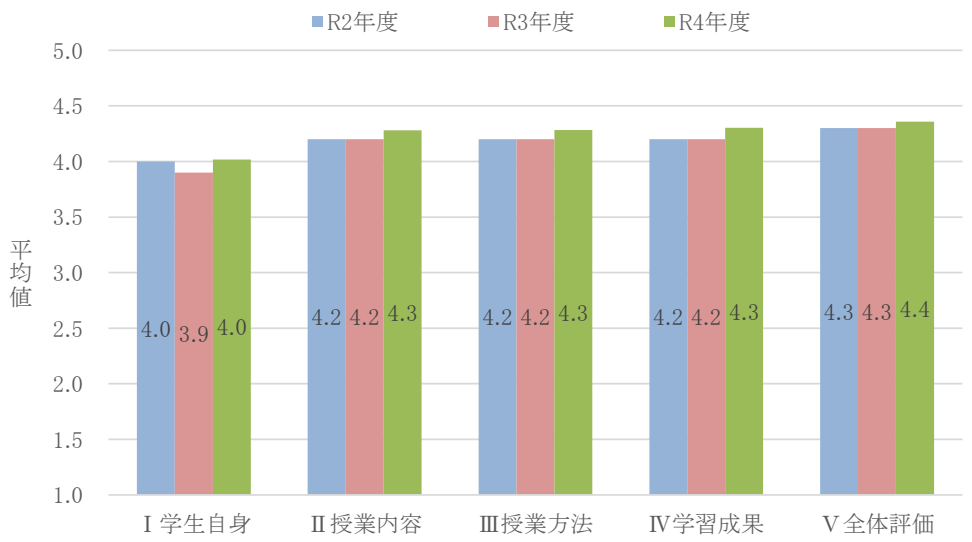


図1　診療放射線学科のカテゴリー別平均値年次推移

保健科学部　口腔保健学科　学生による授業評価アンケート集計結果

表1　口腔保健学科（大学）の実施率・回答率

	アンケート対象科目数（①）	アンケート実施科目数（②）	科目実施率 ②÷① ×100(%)	②の履修登録者数（③）	③の回答者数（④）	学生回答率 ④÷③ ×100(%)
口腔保健学科	17	15	**88.2**	957	869	**90.8**
総　計	661	599	**90.6**	34964	24695	**70.6**

表2　口腔保健学科（大学）の項目別平均値

カテゴリー	問	設　問	平均値
Ⅰ 学生自身	3	この授業への出席状況は？	4.55
	4	この授業に関連して、授業以外に学習した時間。（授業 1 回あたりの平均時間）	3.16
	5	この授業に意欲的に参加した。	4.41
Ⅱ 授業内容	6	授業の到達目標がシラバスや授業でわかりやすく示された。	4.43
	7	毎回の授業内容はよくまとまっていて、よく理解できた。	4.35
	8	授業は知的関心や好奇心を起こす内容であった。	4.32
Ⅲ 授業方法	9	聞きやすい話し方だった。	4.37
	10	板書、スライド、教材などの使い方は、わかりやすく適切だった。	4.37
	11	授業の進行速度は適切だった。	4.32
	12	学生の質問や意見への対応が十分になされていた。	4.35
Ⅳ 学習成果	13	自分にとって新しい考え方・発想を得ることができた。	4.31
	14	授業で扱った分野に対する基本的な知識を得ることができた。	4.42
	15	自分で調べ、考える姿勢が身についた。	4.29
Ⅴ 総合評価	16	この授業を受けて満足している。	4.38
学科別質問項目	17	【実習科目】実習器材や材料の準備は適切に行われた。	4.39
	18	【実習科目】教員の人数や配置は適切であった。	4.44
記述式項目	①	この授業でよいと思った点があれば書いてください。	
	②	この授業で改善すべきだと思った点があれば書いてください。	
	③	教室、教育設備等で改善すべき点があれば書いてください。	

問1は所属学科，問2は学年のため表からは省略。

問3以降の選択式項目について，次に示す5件法で回答を求めた。

問3　5:すべて出席，4:1回欠席，3:2回欠席，2:3回欠席，1:4回以上欠席

問4　5:2時間以上，4:1～2時間，3:30分～1時間，2:30分未満，1:0時間

問5～　5:そう思う，4:どちらかと言えばそう思う，3:どちらでもない（ふつう），2:どちらかと言えばそう思わない，1:そう思わない

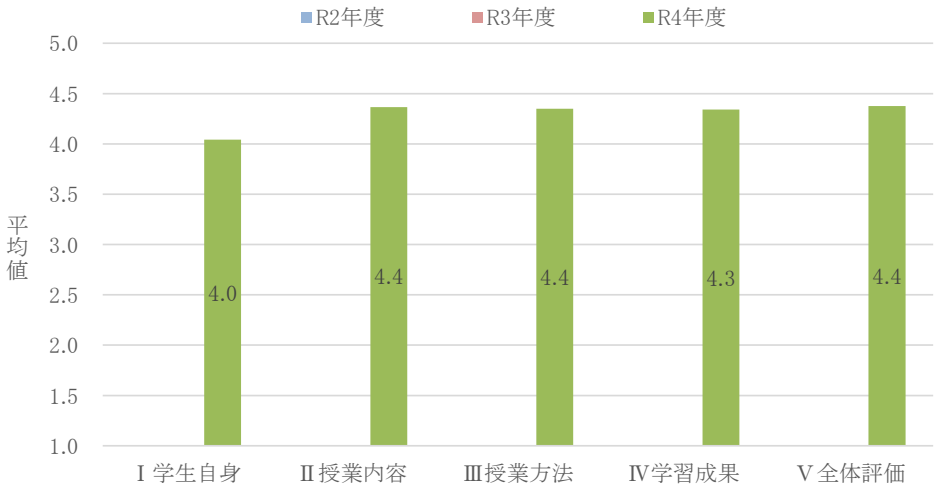


図1　口腔保健学科（大学）のカテゴリー別平均値年次推移

保健科学部　看護学科　学生による授業評価アンケート集計結果

表1　看護学科の実施率・回答率

	アンケート対象科目数（①）	アンケート実施科目数（②）	科目実施率 ②÷① ×100(%)	②の履修登録者数（③）	③の回答者数（④）	学生回答率 ④÷③ ×100(%)
看護学科	109	91	**83.5**	4980	3145	**63.2**
総　計	661	599	**90.6**	34964	24695	**70.6**

表2　看護学科の項目別平均値

カテゴリー	問	設　問	平均値
Ⅰ 学生自身	3	この授業への出席状況は？	4.65
	4	この授業に関連して、授業以外に学習した時間。（授業 1 回あたりの平均時間）	3.39
	5	この授業に意欲的に参加した。	4.50
Ⅱ 授業内容	6	授業の到達目標がシラバスや授業でわかりやすく示された。	4.48
	7	毎回の授業内容はよくまとまっていて、よく理解できた。	4.44
	8	授業は知的関心や好奇心を起こす内容であった。	4.47
Ⅲ 授業方法	9	聞きやすい話し方だった。	4.43
	10	板書、スライド、教材などの使い方は、わかりやすく適切だった。	4.41
	11	授業の進行速度は適切だった。	4.40
	12	学生の質問や意見への対応が十分になされていた。	4.45
Ⅳ 学習成果	13	自分にとって新しい考え方・発想を得ることができた。	4.51
	14	授業で扱った分野に対する基本的な知識を得ることができた。	4.53
	15	自分で調べ、考える姿勢が身についた。	4.42
Ⅴ 総合評価	16	この授業を受けて満足している。	4.51
学科別質問項目	17	【演習科目】到達度の確認は適切であった。	4.48
	18	【演習科目】(複数教員授業の場合)教員間の連携、対応は適切であった。	4.40
	19	抽象的な内容については、適度に事例を示して具体的な説明があった。	4.52
	20	授業内容は、教員独自の意見や考えを適度に示し、心に響くものであった。	4.49
記述式項目	①	この授業でよいと思った点があれば書いてください。	
	②	この授業で改善すべきだと思った点があれば書いてください。	
	③	教室、教育設備等で改善すべき点があれば書いてください。	

問1は所属学科，問2は学年のため表からは省略。

問3以降の選択式項目について，次に示す5件法で回答を求めた。

問3　5:すべて出席，4:1回欠席，3:2回欠席，2:3回欠席，1:4回以上欠席

問4　5:2時間以上，4:1～2時間，3:30分～1時間，2:30分未満，1:0時間

問5～　5:そう思う，4:どちらかと言えばそう思う，3:どちらでもない（ふつう），2:どちらかと言えばそう思わない，1:そう思わない

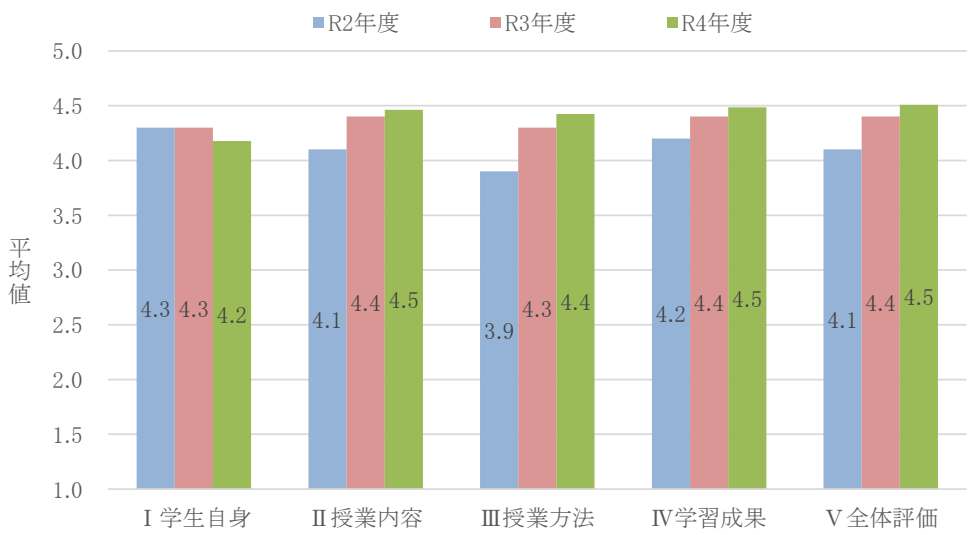


図1　看護学科のカテゴリー別平均値年次推移

2022 年度　保健科学部　看護学科　卒後アンケート

１．対象

令和4年3月に卒業した卒業生29名

２．回収率

	発送数	回答数	回収率(%)
令和 4 年度	89	29	32.6
令和 3 年度	78	23	29.5
令和 2 年度	75	37	49.3

３．調査結果

● 卒業後の進路

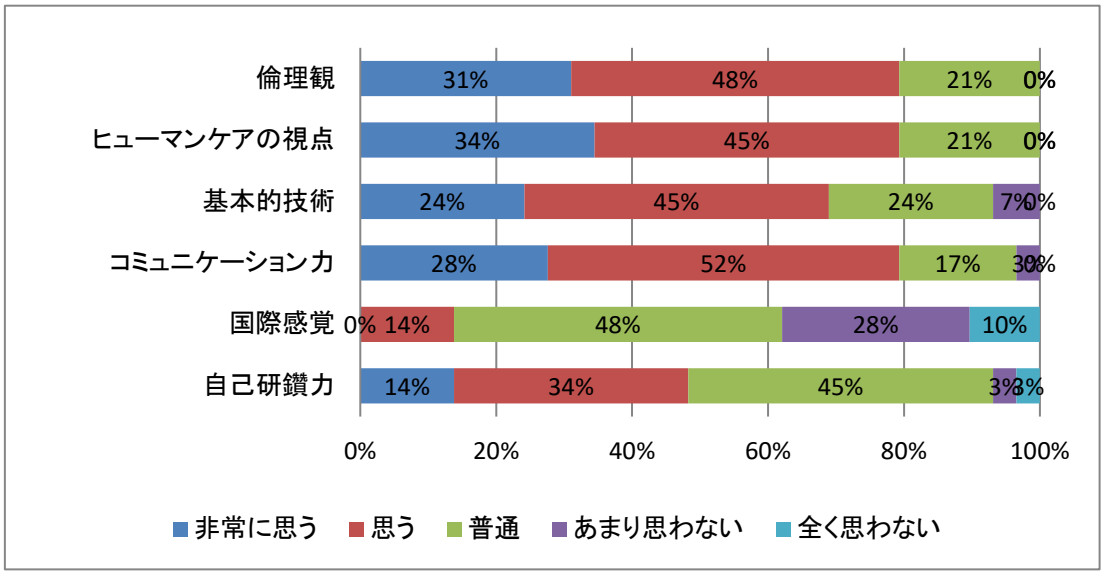
病院	29

● 卒業後の職業

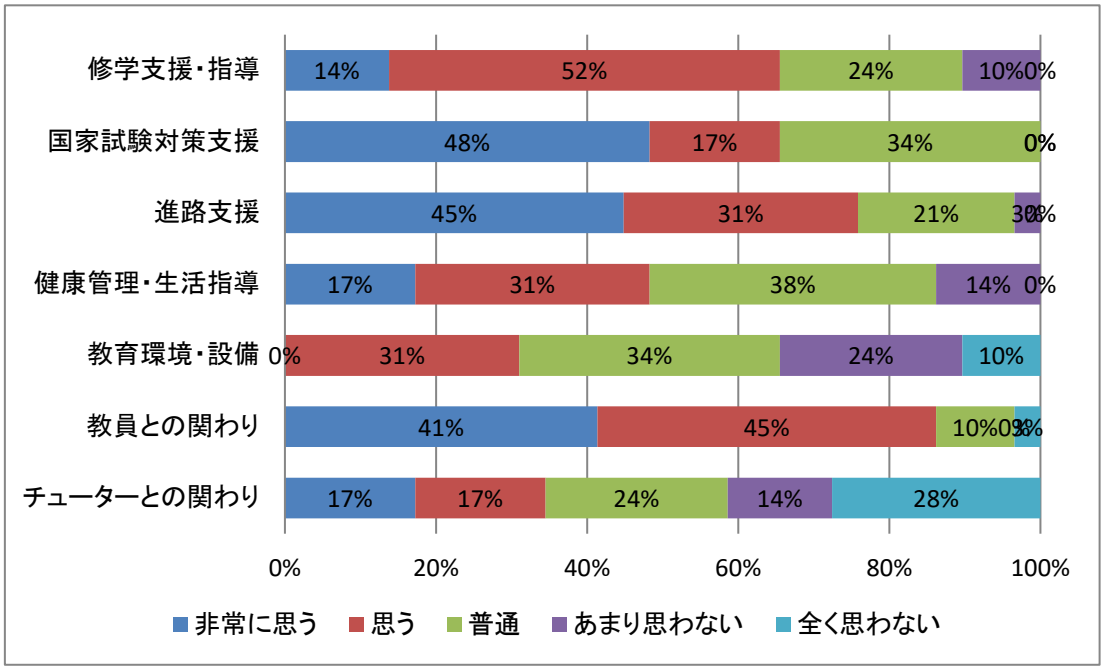
看護師	29

● ディプロマポリシー（DP）に対する自己評価

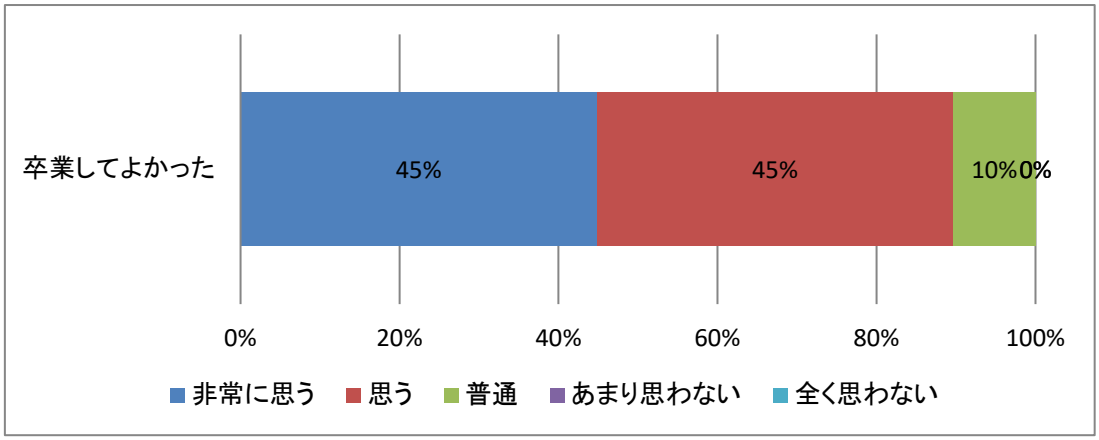
大学での学修や学生生活を通じて、以下のDPを身につけることができたか。



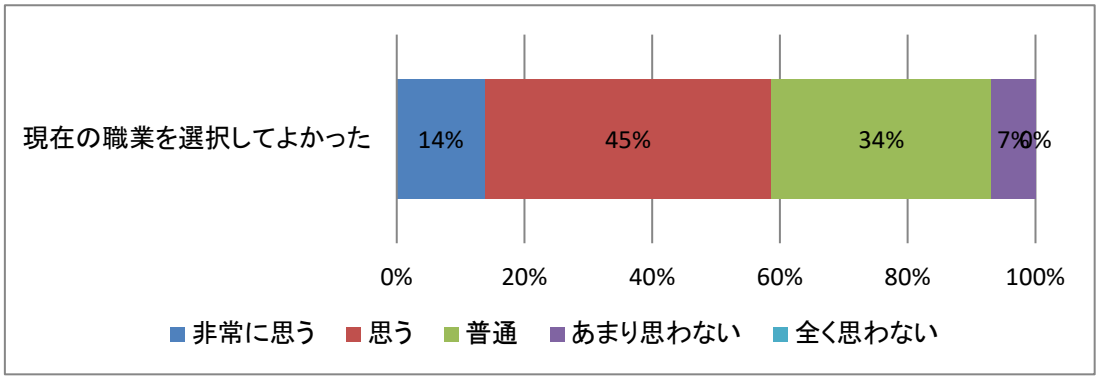
● 本学の各種支援に対する満足度



● 現在の職業を選択しての満足度



● 総合評価：学生時代を振り返って、本学看護学科を卒業して良かったか。



教育学部　こども教育学科　学生による授業評価アンケート集計結果

表1　こども教育学科の実施率・回答率

	アンケート対象科目数（①）	アンケート実施科目数（②）	科目実施率 ②÷① ×100(%)	②の履修登録者数（③）	③の回答者数（④）	学生回答率 ④÷③ ×100(%)
こども教育学科	149	134	**89.9**	5668	3916	**69.1**
総　計	661	599	**90.6**	34964	24695	**70.6**

表2　こども教育学科の項目別平均値

カテゴリー	問	設　問	平均値
Ⅰ 学生自身	3	この授業への出席状況は？	4.24
	4	この授業に関連して、授業以外に学習した時間。（授業 1 回あたりの平均時間）	3.18
	5	この授業に意欲的に参加した。	4.59
Ⅱ 授業内容	6	授業の到達目標がシラバスや授業でわかりやすく示された。	4.53
	7	毎回の授業内容はよくまとまっていて、よく理解できた。	4.49
	8	授業は知的関心や好奇心を起こす内容であった。	4.51
Ⅲ 授業方法	9	聞きやすい話し方だった。	4.45
	10	板書、スライド、教材などの使い方は、わかりやすく適切だった。	4.46
	11	授業の進行速度は適切だった。	4.47
	12	学生の質問や意見への対応が十分になされていた。	4.51
Ⅳ 学習成果	13	自分にとって新しい考え方・発想を得ることができた。	4.54
	14	授業で扱った分野に対する基本的な知識を得ることができた。	4.58
	15	自分で調べ、考える姿勢が身についた。	4.48
Ⅴ 総合評価	16	この授業を受けて満足している。	4.55
学科別質問項目	17	教員の学生への対応は公平であった。	4.67
記述式項目	①	この授業でよいと思った点があれば書いてください。	
	②	この授業で改善すべきだと思った点があれば書いてください。	
	③	教室、教育設備等で改善すべき点があれば書いてください。	

問1は所属学科，問2は学年のため表からは省略。

問3以降の選択式項目について，次に示す5件法で回答を求めた。

問3　5:すべて出席，4:1回欠席，3:2回欠席，2:3回欠席，1:4回以上欠席

問4　5:2時間以上，4:1～2時間，3:30分～1時間，2:30分未満，1:0時間

問5～　5:そう思う，4:どちらかと言えばそう思う，3:どちらでもない（ふつう），2:どちらかと言えばそう思わない，1:そう思わない

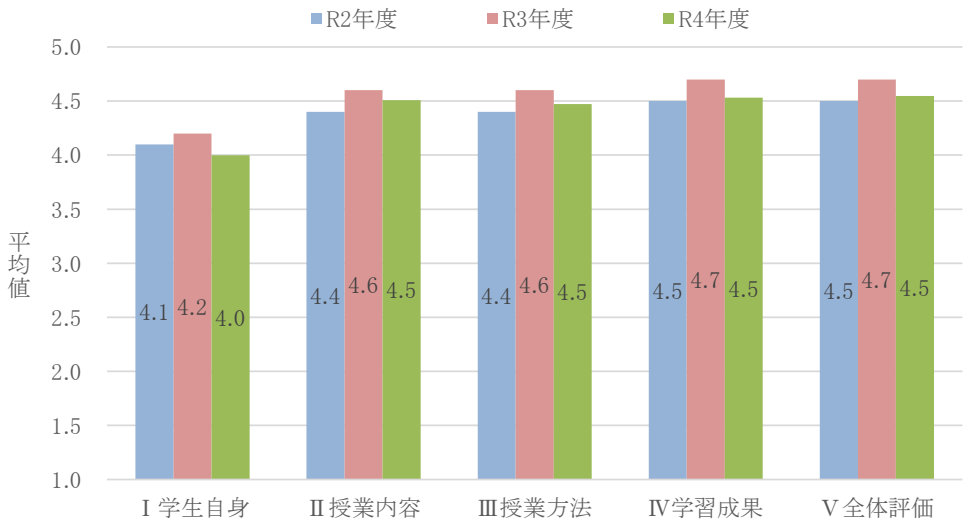


図1　こども教育学科のカテゴリー別平均値年次推移

2022 年度　教育学部　こども教育学科　卒後アンケート

１．対象

令和4年3月に卒業した卒業生73名

２．回収率

	発送数	回答数	回収率(%)
令和 4 年度	73	23	31.5
令和 3 年度	84	26	31.0
令和 2 年度	78	42	52.5

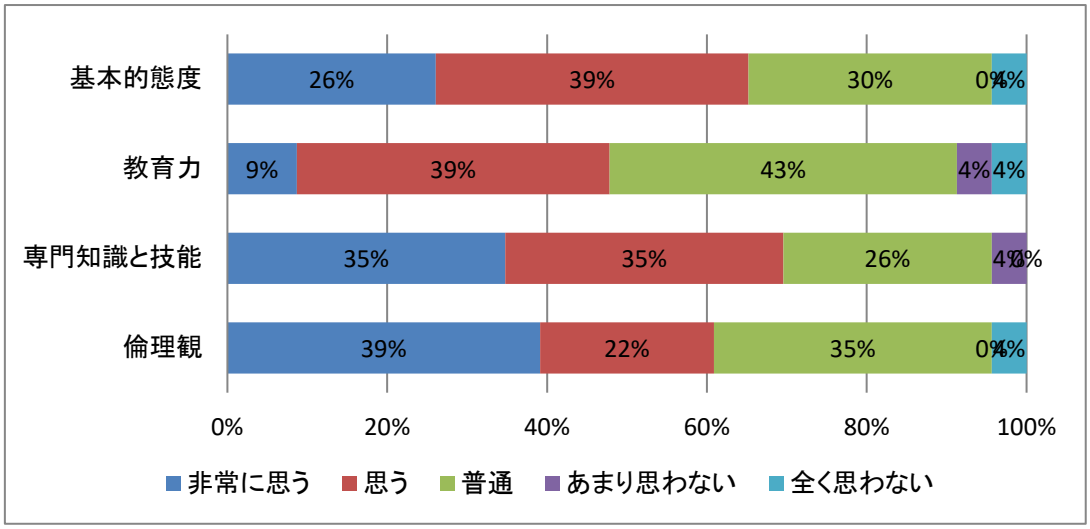
３．調査結果

● 卒業後の進路

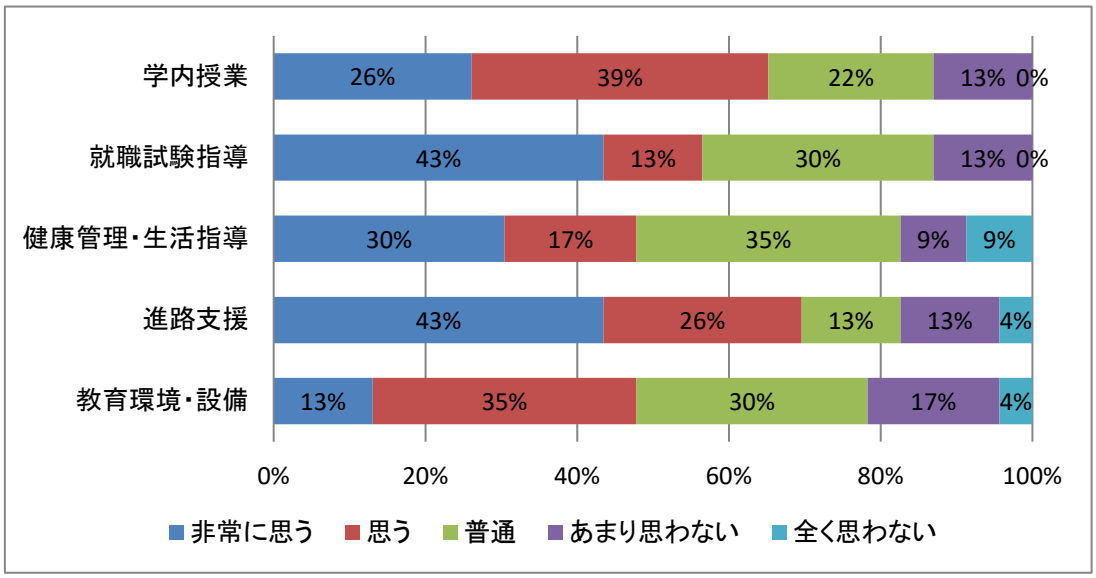
認定こども園	12
社会福祉施設	6
保育所	3
幼稚園	2
小学校	2
働いていない	0
進学（大学院・他の大学・専門学校）	0

● ディプロマポリシー（DP）に対する自己評価

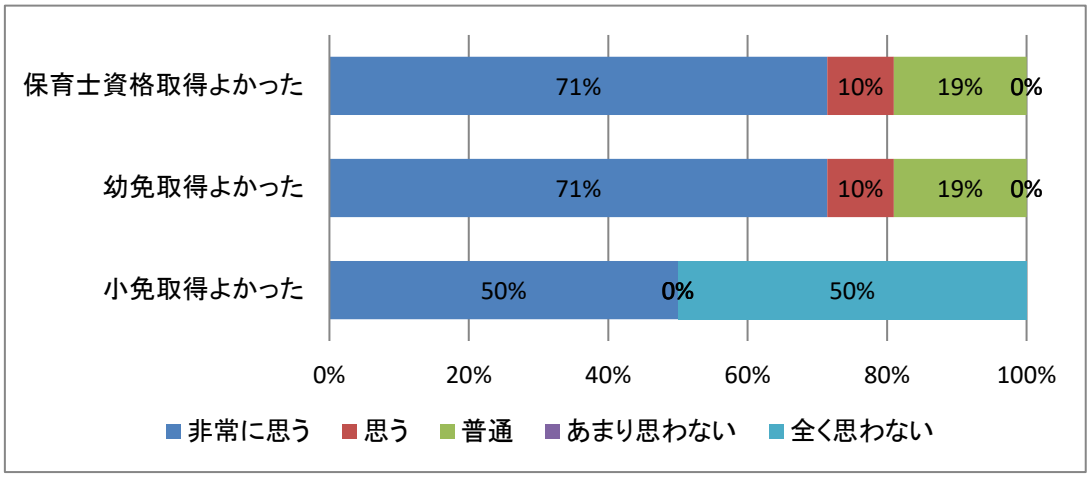
大学での学修や学生生活を通じて、以下のDPを身につけることができたか。



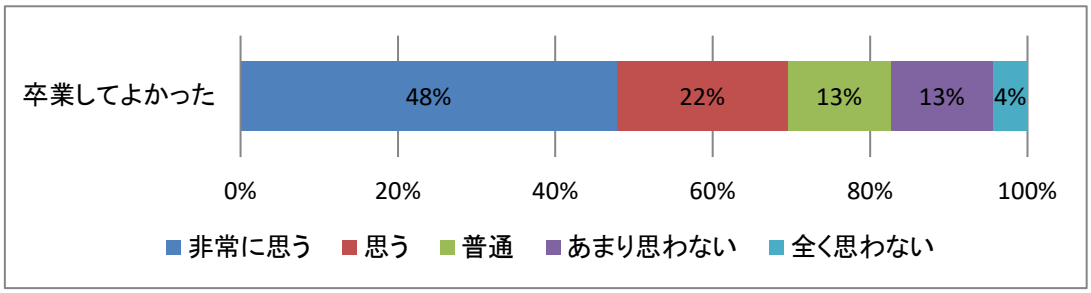
● 本学の各種支援に対する満足度



● 資格を取得しての満足度



●総合評価：学生時代を振り返って、本学こども教育学科を卒業して良かったか。



短期大学部　口腔保健学科　学生による授業評価アンケート集計結果

表1　口腔保健学科（短大）の実施率・回答率

	アンケート対象科目数（①）	アンケート実施科目数（②）	科目実施率 ②÷① ×100(%)	②の履修登録者数（③）	③の回答者数（④）	学生回答率 ④÷③ ×100(%)
口腔保健学科	46	39	**84.8**	2525	1930	**76.4**
総　計	661	599	**90.6**	34964	24695	**70.6**

表2　口腔保健学科（短大）の項目別平均値

カテゴリー	問	設　問	平均値
Ⅰ 学生自身	3	この授業への出席状況は？	4.75
	4	この授業に関連して、授業以外に学習した時間。（授業 1 回あたりの平均時間）	3.41
	5	この授業に意欲的に参加した。	4.60
Ⅱ 授業内容	6	授業の到達目標がシラバスや授業でわかりやすく示された。	4.53
	7	毎回の授業内容はよくまとまっていて、よく理解できた。	4.48
	8	授業は知的関心や好奇心を起こす内容であった。	4.53
Ⅲ 授業方法	9	聞きやすい話し方だった。	4.51
	10	板書、スライド、教材などの使い方は、わかりやすく適切だった。	4.49
	11	授業の進行速度は適切だった。	4.44
	12	学生の質問や意見への対応が十分になされていた。	4.48
Ⅳ 学習成果	13	自分にとって新しい考え方・発想を得ることができた。	4.53
	14	授業で扱った分野に対する基本的な知識を得ることができた。	4.53
	15	自分で調べ、考える姿勢が身についた。	4.51
Ⅴ 総合評価	16	この授業を受けて満足している。	4.54
学科別質問項目	17	【実習科目】実習器材や材料の準備は適切に行われた。	4.51
	18	【実習科目】教員の人数や配置は適切であった。	4.48
記述式項目	①	この授業でよいと思った点があれば書いてください。	
	②	この授業で改善すべきだと思った点があれば書いてください。	
	③	教室、教育設備等で改善すべき点があれば書いてください。	

問1は所属学科，問2は学年のため表からは省略。

問3以降の選択式項目について，次に示す5件法で回答を求めた。

問3　5:すべて出席，4:1回欠席，3:2回欠席，2:3回欠席，1:4回以上欠席

問4　5:2時間以上，4:1～2時間，3:30分～1時間，2:30分未満，1:0時間

問5～　5:そう思う，4:どちらかと言えばそう思う，3:どちらでもない（ふつう），2:どちらかと言えばそう思わない，1:そう思わない

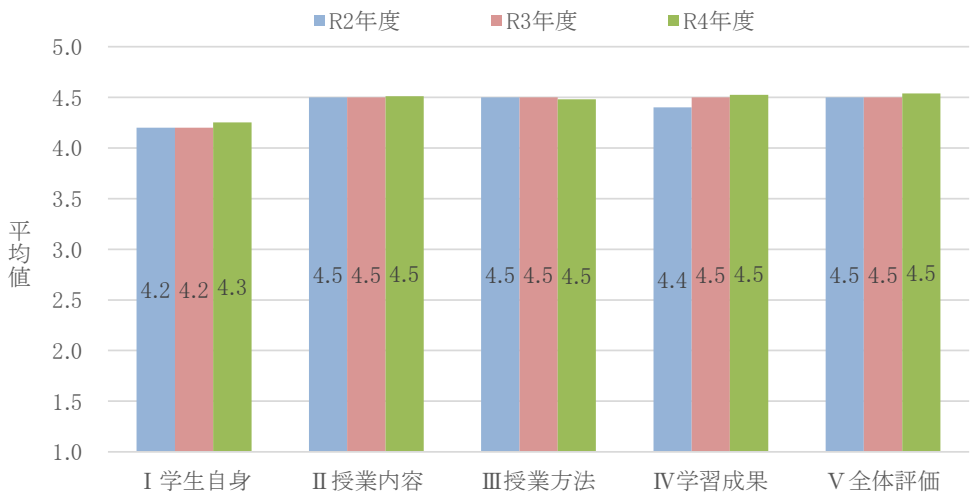


図1　口腔保健学科（短大）のカテゴリー別平均値年次推移

2022 年度　短期大学部　口腔保健学科　卒後アンケート

１．対象

令和4年3月に卒業した卒業生74名

２．回収率

	発送数	回答数	回収率(%)
令和 4 年度	74	28	37.8
令和 3 年度	64	27	42.2
令和 2 年度	79	52	65.8

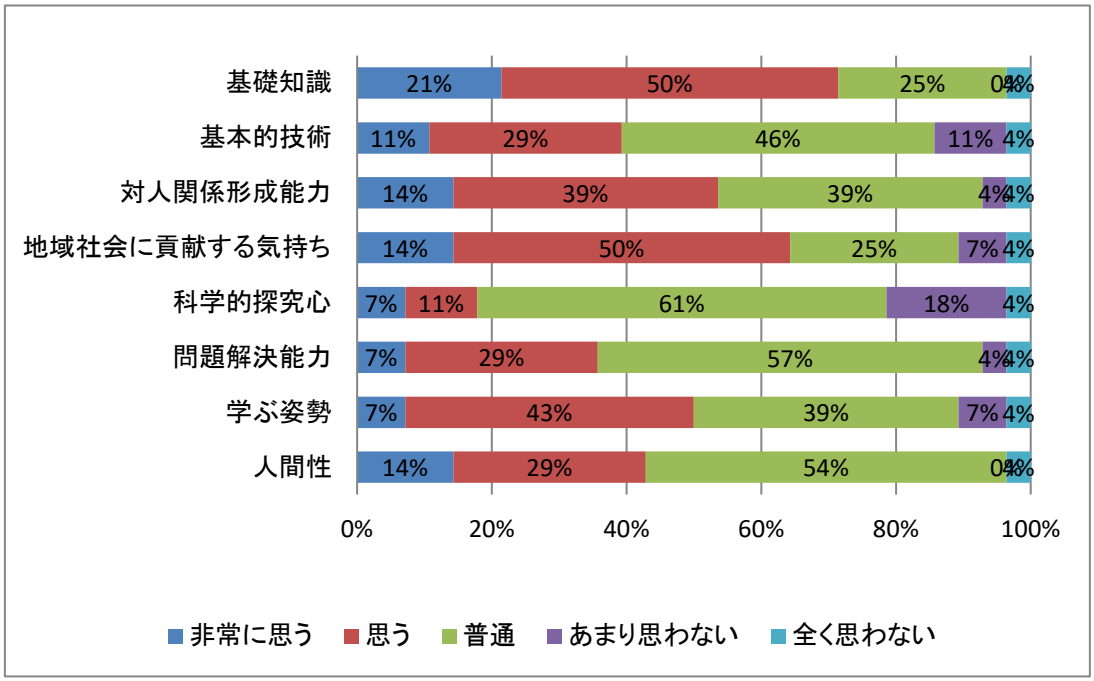
３．調査結果

● 卒業後の進路

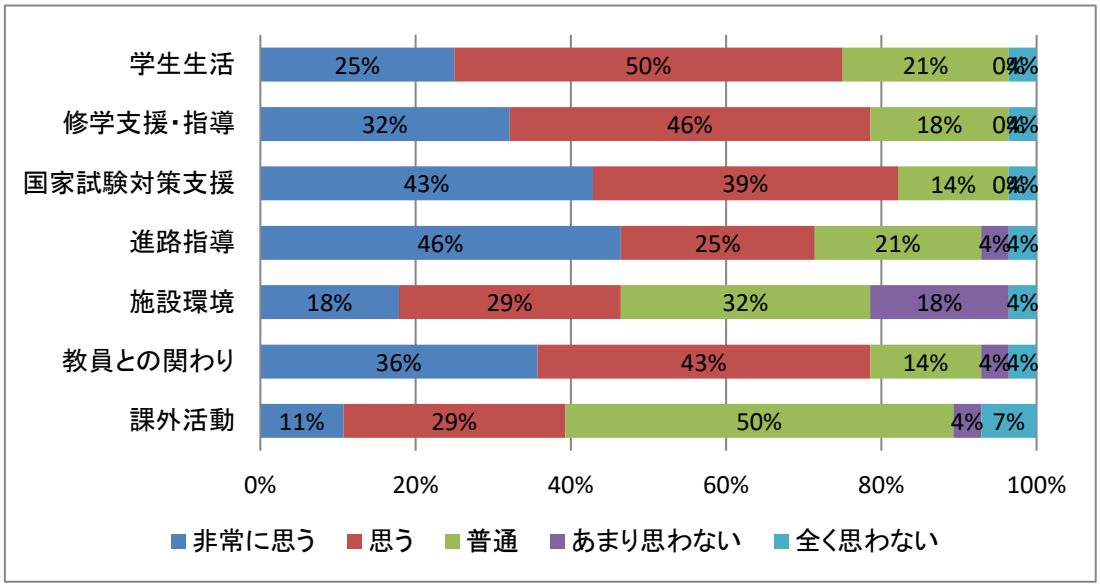
診療所	22
病院	5
働いていない	1

● ディプロマポリシー（DP）に対する自己評価

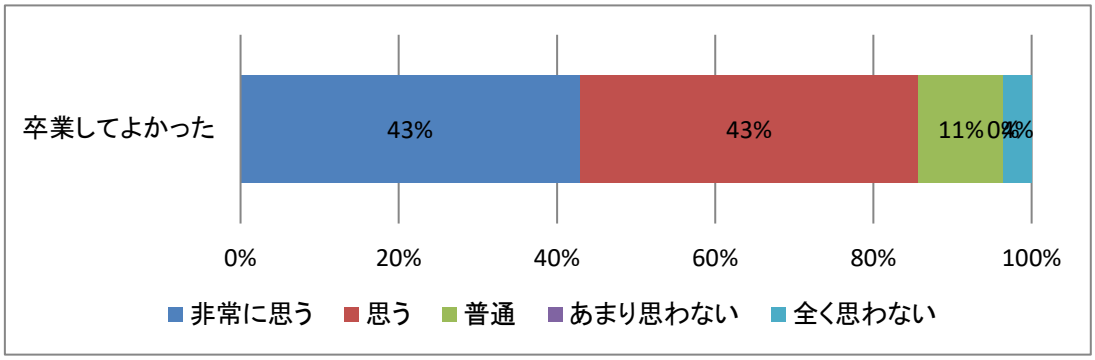
大学での学修や学生生活を通じて、以下のDPを身につけることができたか。



● 本学の各種支援に対する満足度



●総合評価：学生時代を振り返って、本学口腔保健学科を卒業して良かったか。



短期大学部　看護学科通信制課程　学生による授業評価アンケート集計結果

表1　看護学科通信制課程の実施率・回答率

	アンケート対象科目数（①）	アンケート実施科目数（②）	科目実施率 ②÷① ×100(%)	②の履修登録者数（③）	③の回答者数（④）	学生回答率 ④÷③ ×100(%)
看護学科通信制課程	32	32	**100.0**	202	200	**99.0**
総　計	661	599	**90.6**	34964	24695	**70.6**

表2　看護学科通信制課程の設問項目

カテゴリー	問	設　問	平均値
Ⅰ 学生自身	3	あなたはシラバスを読んで授業内容を確認して臨みましたか。	3.97
	4	3日間の授業に意欲的に取り組みましたか。	4.32
	5	この授業を受けて今後の学習に意欲的に取り組めますか。	4.42
Ⅱ 授業内容	6	授業内容は無駄や重複がなく順序立てて整理されていた。	4.38
	7	専門的内容に対し、わかりやすい説明があった。	4.42
	8	抽象的な内容については適度に例を示して具体的な説明があった。	4.42
	9	授業内容は表面的ではなく教員自身の意見や考えを適度に示し、心に響くものであった。	4.48
Ⅲ 授業方法	10	聞きやすい話し方だった。	4.29
	11	授業の進行速度は適切だった。	4.28
	12	授業の要点・テーマ・目的がわかりやすい展開であった。	4.32
	13	板書・スライド・教材などの使い方は適切だった。	4.30
	14	ノートをとるための時間はちょうど良かった。	4.28
	15	学生への質問の量、タイミングや方法は適切であった。	4.27
Ⅳ 学習成果	16	自分にとって新しい考え方・発想を得ることができた。	4.46
	17	授業で扱った分野に対する基本的な知識を得ることができた。	4.43
	18	自分で調べ、考える姿勢の大切さに気づいた。	4.51
Ⅴ 総合評価	19	この授業を受けて満足している。	4.51
記述式項目	①	この授業でよいと思った点があれば書いてください。	
	②	この授業で改善すべきだと思った点があれば書いてください。	
	③	教室、教育設備等で改善すべき点があれば書いてください。	

問1は性別，問2は年齢のため表からは省略。

問3以降の選択式項目について，次に示す5件法で回答を求めた。

5:そう思う，4:どちらかと言えばそう思う，3:どちらでもない（ふつう），2:どちらかと言えばそう思わない，1:そう思わない

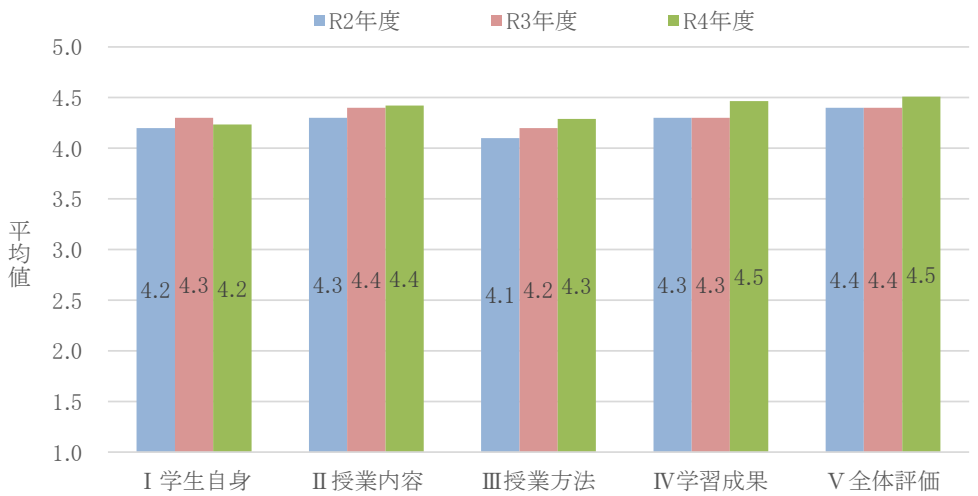


図1　看護学科通信制課程のカテゴリー別平均値年次推移

2022年度　短期大学部　看護学科通信制課程　卒後アンケート

１．対象

令和4年3月に卒業した卒業生124名

２．回収率

	発送数	回答数	回収率(%)
令和４年度	124	47	37.9
令和３年度	124	47	37.9
令和２年度	128	45	35.1

３．調査結果

● 回答者の背景

男女比(人)

女性	42
男性	5

年齢（人）

30歳代	2
40歳代	28
50歳以上	17

就業の状況（人）

働いていない	2
働いている	45

勤務場所（人）

病院	23
診療所または開業医	8
老人保健施設または特別養護老人ホーム	6
訪問看護	3
看護小規模多機能	1
重度身体障害者医療施設	1
松原市医師会	1
デイサービス	1
ワクチン接種業務（派遣）	1
働いていない	2

卒業後の職場（人）

変わっていない	23
勤務先が変わった	13
部署が変わった	5
役職に変化があった	2
副業を始めた	1

役職の変化

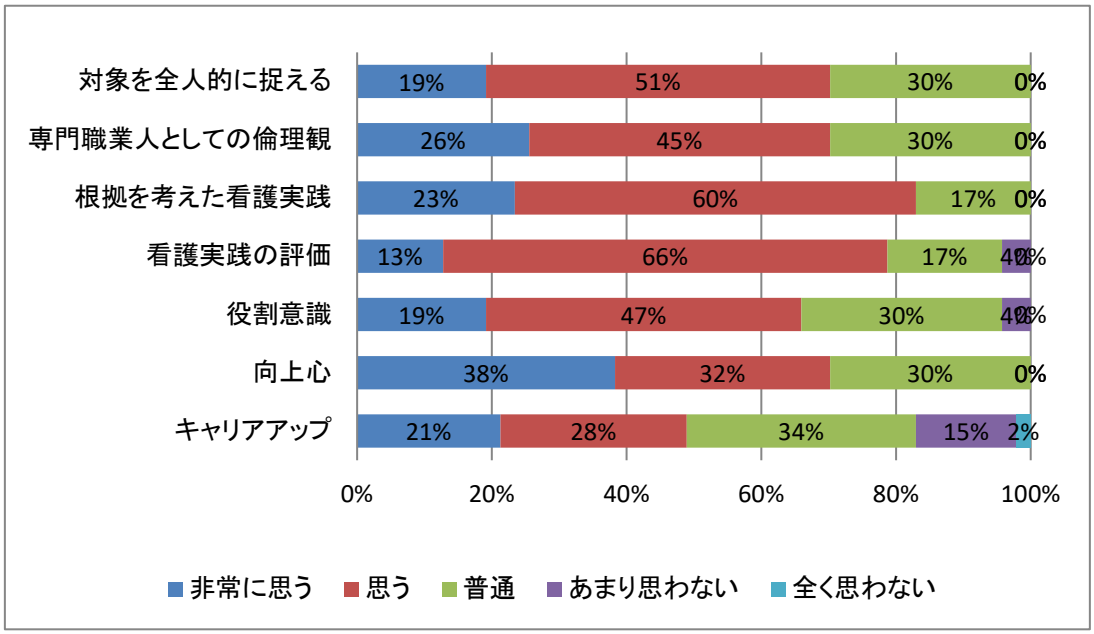
病棟リーダー	1
管理者	1

進学の有無（人）

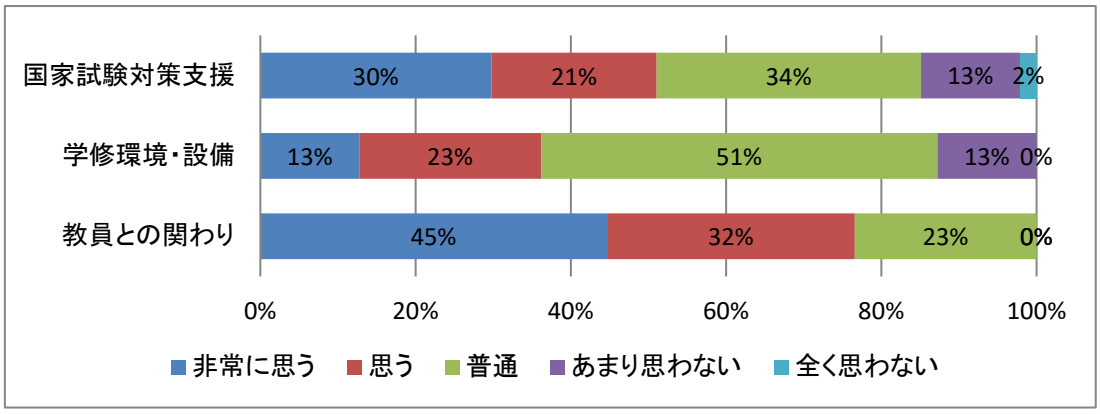
進学していない	44
進学の意思はあるが、準備中である	3
進学した	0

● ディプロマポリシー（DP）に対する自己評価

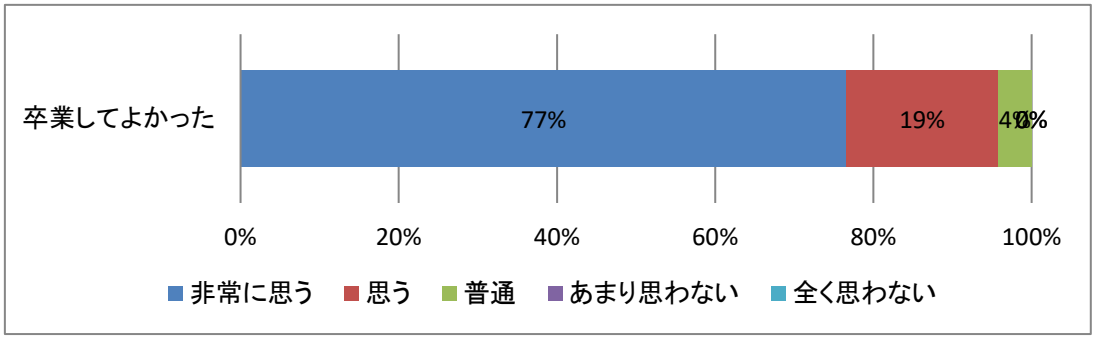
大学での学修や学生生活を通じて、以下のDPを身につけることができたか。



● 本学の各種支援に対する満足度



●総合評価：学生時代を振り返って総合的にお答えください。



基盤教育分野　学生による授業評価アンケート集計結果

表1　基盤教育分野の実施率・回答率

	アンケート対象科目数（①）	アンケート実施科目数（②）	**科目実施率** ②÷① ×100(%)	②の履修登録者数（③）	③の回答者数（④）	**学生回答率** ④÷③ ×100(%)
基盤教育分野	126	117	**92.9**	7854	5041	**64.2**
総　計	661	599	**90.6**	34964	24695	**70.6**

表2　基盤教育分野の項目別平均値

カテゴリー	問	設　問	平均値
Ⅰ 学生自身	3	この授業への出席状況は？	4.59
	4	この授業に関連して、授業以外に学習した時間。（授業 1 回あたりの平均時間）	2.90
	5	この授業に意欲的に参加した。	4.43
Ⅱ 授業内容	6	授業の到達目標がシラバスや授業でわかりやすく示された。	4.37
	7	毎回の授業内容はよくまとまっていて、よく理解できた。	4.38
	8	授業は知的関心や好奇心を起こす内容であった。	4.34
Ⅲ 授業方法	9	聞きやすい話し方だった。	4.38
	10	板書、スライド、教材などの使い方は、わかりやすく適切だった。	4.38
	11	授業の進行速度は適切だった。	4.42
	12	学生の質問や意見への対応が十分になされていた。	4.35
Ⅳ 学習成果	13	自分にとって新しい考え方・発想を得ることができた。	4.39
	14	授業で扱った分野に対する基本的な知識を得ることができた。	4.44
	15	自分で調べ、考える姿勢が身についた。	4.32
Ⅴ 総合評価	16	この授業を受けて満足している。	4.43
記述式項目	①	この授業でよいと思った点があれば書いてください。	
	②	この授業で改善すべきだと思った点があれば書いてください。	
	③	教室、教育設備等で改善すべき点があれば書いてください。	

問1は所属学科，問2は学年のため表からは省略。

問3以降の選択式項目について，次に示す5件法で回答を求めた。

問3　5:すべて出席，4:1回欠席，3:2回欠席，2:3回欠席，1:4回以上欠席

問4　5:2時間以上，4:1～2時間，3:30分～1時間，2:30分未満，1:0時間

問5～　5:そう思う，4:どちらかと言えばそう思う，3:どちらでもない（ふつう），2:どちらかと言えばそう思わない，1:そう思わない

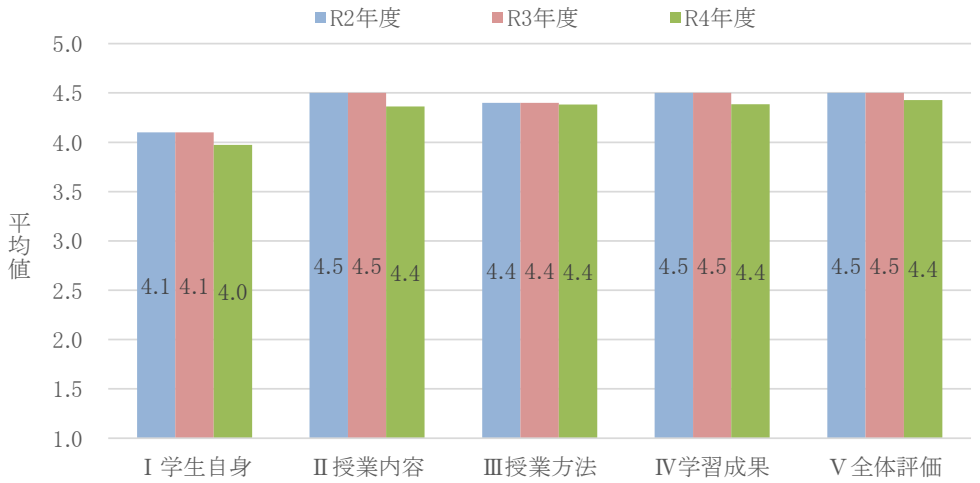


図1　基盤教育分野のカテゴリー別平均値年次推移